久泉遺跡発掘調査報告 Ⅱ

EXCAVATION REPORT OF THE HISAIZUMI SITE Ⅱ

平成16年度一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立つ
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５年　３月

富山県　砺波市教育委員会

大溝（SD09）全景

砺波平野に広がる散村と久泉遺跡

青稲が萌える田園と久泉遺跡

久泉遺跡出土遺物集合写真

序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。この度、平成16年11月１日をもって旧砺波市と旧庄川町が合併し、新砺波市が誕生いたしました。将来の都市像を「庄川と散居に広がる　健康フラワー都市」とし、まちづくりの基本理念を「花香り、水清く、風さわやかなまち　砺波」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに花・水・風をキーワードに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

このたび市内を東西に横断する一般国道359号砺波東バイパスを建設することとなりました。この道は、富山と金沢を結ぶ主要な道路として市民生活に欠くことのできないものとなっており、バイパス建設が急務となっておりました。

それに先立ち平成12年度に分布調査、平成14年度に試掘調査を行ったところ、縄文時代をはじめとして、古代、中世の遺構・遺物が確認されました。国土交通省ならびに富山県教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を進めていく上でできる限りその保護に努めてまいりましたが、平成15年度より３ヵ年計画で本発掘調査を実施する運びとなりました。

調査では、縄文時代と古代、中世の時期が確認されました。縄文時代では、昨年度に続いて農耕や食料採集と深く関わりのある打製石斧が多く出土しました。古代・中世では、東大寺領荘園との関連が考えられる大規模な溝を検出しました。

それら成果をまとめた本書が地域の歴史や文化の研究にご活用いただくとともに、縄文の太古から我々の祖先が庄川扇状地を切り開き、逞しく生き抜いてきた姿に思いを馳せていただければ幸いです。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、地元久泉地区自治振興会、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成17年３月　　砺波市教育委員会

教育長　堀田良男

例　　言

1．本書は平成16年度に実施した富山県砺波市祖泉・久泉地内に所在する久泉遺跡の発掘調査報告である。

2．調査は、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の委託を受けて、砺波市教育委員会が実施した。調査は、平成15年から平成17年までの３ヵ年計画であり、本年度は２年次目にあたる。

発掘調査は、砺波市矢木から久泉にかけての一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立ち、砺波市教育委員会が主体となり、日本海航測株式会社（富山県富山市二口町２丁目５番地15）に業務委託し実施した。

3．調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は学芸員野原大輔が担当し、教育次長小幡和日出が総括した。

4．調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なお、遺跡の略記号は市名と遺跡名の頭文字（Tonamisi Hisalzumi）と、平成16年度の調査となることから「ＴＨＩ－１６」とした。

5．調査事務局および調査担当者は以下のとおりである。

調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長	小幡和日出
	生涯学習課	課　長	白江　秋広（平成16年10月まで）
		同	清澤　康夫（平成16年11月から）
	同	係　長	喜田　真二（平成16年10月まで）
	同	同	上野　　勉（平成16年11月から）
本調査担当者	同	学芸員	野原　大輔
	日本海航測株式会社	調査員	小川　幹太
	株式会社中部日本鉱業研究所	調査員	阿部　将樹

6．調査期間および面積は以下のとおりである。

〔本線・市道〕平成16年４月21日～平成16年９月28日　　調査面積 2,920㎡

〔電柱移設地〕平成16年11月１日～平成16年11月18日　　調査面積　12㎡

7．本書の編集は野原・小川が行い、執筆および図版作成は野原・小川・阿部が担当し執筆分担は各文末に記した。遺構写真は野原・阿部、遺物写真は野原が撮影した。

8．遺物撮影では、福岡町教育委員会の撮影スタジオをお借りすることができた。撮影指導をして頂いた栗山雅夫氏に心から謝意を表したい。

9．本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。ただし、現地調査の遺構検出時点で略記号を付したため、本文中では略記号と遺構の性格がことなる場合があることを断っておく。

掘立柱建物－SB、溝－SD、土坑－SK、ピット－SP、風倒木痕－FB

また、本書で使用している方位は真北で、標高は海抜高である。

10．土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2001年前期版）に準拠している。

11．調査期間や整理作業期間を通じて、下記の方々から多大なるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表する。

牛嶋　茂（奈良文化財研究所）　金子裕之（奈良文化財研究所）　金田章裕（京都大学）
酒井重洋（富山県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ）　杉本和樹（西大寺フォト）　栗山雅夫（福岡町教育委員会）
神保孝造（富山県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ）　高梨清志（富山県教育委員会）　西井龍儀（富山考古学会）
麻柄一志（魚津市教育委員会）　宮田進一（富山県文化振興財団）　山本正敏（富山県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ）

以上、五十音順・敬称略

目　次

序　文

例　言

目　次

序　章

第1節　調査に至る経緯……（野原）……1

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境……（〃）……3

第2節　歴史的環境……（〃）……8

第3章　調査の成果

第1節　調査方法と調査経過……（野原・小川）……13

第2節　基本層序……（野原）……16

第3節　遺　構……（野原・小川・阿部）……20

(1)上層遺構……20

(2)下層遺構……39

第4節　遺　物……（野原・小川・阿部）……56

(1)上層遺構出土遺物……56

(2)下層遺構出土遺物……58

(3)遺物包含層出土遺物……59

第5節　自然科学分析……（パリノ・サーヴェイ株式会社）……79

第4章　考　察

第1節　打製石斧の製作技術と出土状況……（野原）……81

第2節　大溝（SD09）の検討……（野原）……91

第5章　まとめ……（野原）……99

【参考文献】

図 版 目 次

Fig. 1　平成15、16年度調査区位置図 …… 2
Fig. 2　久泉遺跡の位置 …… 3
Fig. 3　庄川扇状地を中心とした地形分類図 …… 4
Fig. 4　砺波平野の地形分類図 …… 5
Fig. 5　久泉遺跡周辺地形図 …… 6
Fig. 6　太田地区従前図 …… 7
Fig. 7　中尾遺跡の御物石器 …… 8
Fig. 8　福山窯跡出土の瓦塔水煙部器 …… 9
Fig. 9　徳大寺家領般若野荘荘域図 …… 10
Fig. 10　久泉遺跡とその周辺遺跡 …… 12
Fig. 11　調査区位置図 …… 13
Fig. 12　基本層序模式図 …… 18
Fig. 13　上層遺構全体図 …… 21
Fig. 14　西側調査区断面図 …… 24
Fig. 15　北側調査区断面図（東壁・北壁） …… 25
Fig. 16　東側調査区断面図 …… 26
Fig. 17　南側調査区断面図（東壁・南壁） …… 27
Fig. 18　北側・南側調査区断面図（西壁） …… 28
Fig. 19　北側調査区断面図（西壁） …… 29
Fig. 20　上層遺構図　SB01 …… 32
Fig. 21　上層遺構図　溝 …… 33
Fig. 22　上層遺構図　溝 …… 34
Fig. 23　上層遺構図 …… 35
Fig. 24　上層遺構図　溝 …… 36
Fig. 25　上層遺構図　土坑・ピット …… 38
Fig. 26　下層遺構全体図 …… 41
Fig. 27　下層遺構図　礫群出土状況図 …… 44
Fig. 28　下層遺構図　土坑 …… 45
Fig. 29　下層遺構図　ピット …… 46
Fig. 30　各類型計測部位とその名称 …… 60
Fig. 31　上層遺構・遺物包含層出土遺物実測図 …… 62
Fig. 32　遺構・遺物包含層出土遺物実測図（1）　縄文土器 …… 63
Fig. 33　遺物包含層出土遺物実測図（2）　縄文土器 …… 64
Fig. 34　遺物包含層出土遺物実測図（3）　打製石斧（SP265内磨製石斧 未製品） …… 65
Fig. 35　遺物包含層出土遺物実測図（4）　打製石斧（Ⅰ類） …… 66
Fig. 36　遺物包含層出土遺物実測図（5）　打製石斧（Ⅰ類） …… 67
Fig. 37　遺物包含層出土遺物実測図（6）　打製石斧（Ⅰ類） …… 68
Fig. 38　遺物包含層出土遺物実測図（7）　打製石斧（Ⅱ a 類） …… 69
Fig. 39　遺物包含層出土遺物実測図（8）　打製石斧（Ⅱ a 類） …… 70
Fig. 40　遺物包含層出土遺物実測図（9）　打製石斧（Ⅱ b 類） …… 71

Fig. 41　遺物包含層出土遺物実測図（10）　打製石斧（Ⅱｂ類）…… 72
Fig. 42　遺物包含層出土遺物実測図（11）　打製石斧（破類）…… 73
Fig. 43　遺物包含層出土遺物実測図（12）　打製石斧（破類）…… 74
Fig. 44　打製石斧未製品…… 85
Fig. 45　縄文土器・打製石斧出土分布図…… 89
Fig. 46　SD09埋没過程の復元モデル…… 93
Fig. 47　SD09埋没過程復元模式図…… 94
Fig. 48　従前地（太田）高低測量図…… 98

表　目　次

Tab. 1　久泉遺跡内調査一覧…… 2
Tab. 2　久泉遺跡と周辺遺跡一覧表…… 11
Tab. 3　基本層序相関図（H14試掘調査・H15本調査・H16本調査）…… 18
Tab. 4　上層遺構の構成比率…… 20
Tab. 5　下層遺構の構成比率…… 39
Tab. 6　掘立柱建物一覧（上層）…… 47
Tab. 7　溝一覧（上層）…… 47
Tab. 8　土坑一覧（上層）…… 47
Tab. 9　ピット一覧（上層）…… 48
Tab. 10　溝一覧（下層）…… 50
Tab. 11　土坑一覧（下層）…… 50
Tab. 12　ピット一覧（下層）…… 51
Tab. 13　風倒木一覧（下層）…… 55
Tab. 14　種類別遺物構成グラフ…… 56
Tab. 15　出土別遺物構成グラフ…… 56
Tab. 16　遺物観察表（土器・陶磁器類）…… 75
Tab. 17　遺物観察表（縄文土器）…… 76
Tab. 18　遺物観察表（打製石斧・磨製石斧）…… 77
Tab. 19　市域の縄文遺跡消長表…… 82
Tab. 20　打製石斧法量分布図…… 83
Tab. 21　打製石斧の諸元グラフ…… 86
Tab. 22　SD09・SD03出土遺物一覧…… 95
Tab. 23　C14測定年代結果…… 96
Tab. 24　溝の方向性一覧…… 97

写真図版目次

PL. 1　空中写真（1）
PL. 2　空中写真（2）

PL. 3　上層空中写真
PL. 4　下層空中写真
PL. 5　上層遺構（1）
PL. 6　下層遺構（1）
PL. 7　上層・下層遺構（2）
PL. 8　上層遺構（3）
PL. 9　上層遺構（4）
PL. 10　上層遺構（5）
PL. 11　上層遺構（6）
PL. 12　上層遺構（7）
PL. 13　上層遺構（8）
PL. 14　上層遺構（9）
PL. 15　下層遺構（3）
PL. 16　打製石斧出土状況
PL. 17　調査区土層断面
PL. 18　調査風景
PL. 19　遺構・遺物包含層出土遺物（1）　縄文土器
PL. 20　遺構・遺物包含層出土遺物（2）　縄文土器
PL. 21　遺構・遺物包含層出土遺物（3）　縄文土器、礫
PL. 22　遺構・遺物包含層出土遺物（4）　縄文土器
PL. 23　打製石斧・磨製石斧集合写真
PL. 24　遺構・遺物包含層出土遺物（5）　打製石斧・磨製石斧・未製品
PL. 25　遺構・遺物包含層出土遺物（6）　打製石斧・磨製石斧・未製品
PL. 26　遺物包含層出土遺物（1）　打製石斧（Ⅰ類）
PL. 27　遺物包含層出土遺物（2）　打製石斧（Ⅰ類）
PL. 28　遺物包含層出土遺物（3）　打製石斧（Ⅰ類）
PL. 29　遺物包含層出土遺物（4）　打製石斧（Ⅰ類）
PL. 30　遺物包含層出土遺物（5）　打製石斧（Ⅰ類）
PL. 31　遺物包含層出土遺物（6）　打製石斧（Ⅰ類）
PL. 32　遺物包含層出土遺物（7）　打製石斧（Ⅱａ類）
PL. 33　遺物包含層出土遺物（8）　打製石斧（Ⅱａ類）
PL. 34　遺物包含層出土遺物（9）　打製石斧（Ⅱａ類）
PL. 35　遺物包含層出土遺物（10）　打製石斧（Ⅱａ類）
PL. 36　遺物包含層出土遺物（11）　打製石斧（Ⅱｂ類）
PL. 37　遺物包含層出土遺物（12）　打製石斧（Ⅱｂ類）
PL. 38　遺物包含層出土遺物（13）　打製石斧（Ⅱｂ類）
PL. 39　遺物包含層出土遺物（14）　打製石斧（Ⅱｂ類）
PL. 40　遺物包含層出土遺物（15）　打製石斧（Ⅰ・Ⅱａ類）・欠損品
PL. 41　遺物包含層出土遺物（16）　打製石斧（Ⅰ・Ⅱａ類）・欠損品
PL. 42　遺物包含層出土遺物（17）　打製石斧（不明）
PL. 43　遺物包含層出土遺物（18）　打製石斧（不明）
PL. 44　遺構・遺物包含層出土遺物（6）　須恵器・土師器・珠洲・青磁・白磁

序　　章

第１節　調査に至る経緯

事前協議　平成11年11月、砺波市管内における国道359号の埋蔵文化財対応について、砺波市土木課、砺波市教育委員会生涯学習課、建設省富山工事事務所調査第二課、富山県埋蔵文化財センターの四者で協議し、砺波市庄下・太田・柳瀬地内の分布調査を実施することで合意した。それを受けて同月、分布調査実施内容の詳細について確認している。

分布調査　事業予定地内における分布調査は、平成12年３月21日、砺波市教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。調査対象面積は42,500㎡である。調査の結果、久泉遺跡周辺において土師質土器、須恵器、青磁、近世陶磁器あわせて15点が採集された。遺物採集地点は２箇所において集中的に分布している状況であった。また周辺に「カンジャダ」（鍛冶屋田か）という旧地名も残っていることなどから、遺物集中域を含めるようにして遺跡範囲を拡大することとなった。

試掘調査　平成14年６月、国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所、富山県教育委員会文化財課、砺波市土木課、砺波市教育委員会生涯学習課で四者協議を行い、分布調査で確認された遺跡範囲内における埋蔵文化財の対応について協議した。調査は、砺波市教育委員会が主体となって試掘調査を実施することで合意した。平成14年７月、国土交通省と砺波市教育委員会は砺波東バイパス久泉遺跡発掘調査に係る委託契約を締結、同月30日より試掘調査を開始した。

試掘調査の結果、遺構・遺物が検出され、遺跡の広がりを確認した。試掘対象面積18,630㎡のうち約13,000㎡について、記録保存等の保護措置が必要であるという結論に至った。

試掘調査結果を受けて再度四者協議をし、保護措置等が必要な範囲について次年度以降に本発掘調査にて対応することで合意した。７月の試掘調査の結果、周辺には舌状の微高地がいくつか存在することがわかり、西端の微高地は調査対象地の西に続く状況が明らかとなった。そこで同年10月に市教育委員会が主体となり、祖泉神社西側の施工予定地約4,500㎡を対象として追加の試掘調査を実施することとなった。調査の結果、埋蔵文化財が希薄な地帯であることが判明、保護措置の必要がないと判断した。

本発掘調査　試掘調査で判明した記録保存対象地約13,000㎡について、平成15年から17年までの３カ年計画で実施することで合意した。平成15年４月、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道工事事務所（旧称：富山工事事務所）と砺波市は委託契約を締結し、調査面積4,100㎡について、本発掘調査を実施した[1]。（野原）

1　野原大輔・中村恭子　2004『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会

No	調査種別	調査期間	調査原因	発見された遺構	発見された遺物	備考
1	――	S63(1988)	光圓寺門徒会館等建設	――	須恵器,珠洲,越中瀬戸	遺跡の発見
2	試掘調査	H1(1990).5	境内にて大甕発見	墓坑（大甕埋設）	越前,骨蔵器,土師器,円板，火葬骨	市教委・砺波郷土資料館調査
3	分布調査	H12(2001).3.21	国道359バイパス建設	――		
4	試掘調査	H14(2003) 7.30～8.9 10.8～10.9	国道359バイパス建設	竪穴住居，柱穴，溝，土坑，ピット	縄文土器，打製石斧，土師器（古代），須恵器，鉄滓，中世（？）磁器，近世磁器	調査対象面積23,090.58㎡、調査面積1,068.5㎡。
5	本調査	H15(2004) 4.21～9.30	国道359バイパス建設	[縄文中期中葉－後期後葉]ピット [奈良・平安時代]なし [鎌倉・南北朝・室町時代]石組建物，竪穴状土坑，掘立柱建物，溝，井戸，土坑，ピット	縄文土器，打製石斧 土師器，須恵器 土師器，珠洲，八尾，瀬戸，青磁，宋銭	1年次目。調査面積4,100㎡。縄文時代の打製石斧を主体的に出土。13～14世紀と考えられる石組建物を検出。

Tab. 1　久泉遺跡内調査一覧

Fig. 1　平成15、16年度調査区位置図

第２章　　位置と環境

第１節　地理的環境

市の概要　久泉遺跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。平成16年11月１日、旧砺波市と旧庄川町が合併、新“砺波市”が誕生した。面積は126.96㎢、人口49,237人（平成17年２月末現在）であり、東経136度54分～137度04分、北緯36度33分～36度41分に位置している。

庄川扇状地　砺波市は、市名の由来ともなっている砺波平野に広がっている[1]。砺波平野は、その大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地である。庄川扇状地は県内の三大扇状地（庄川・神通川・常願寺川）に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。扇頂部である庄川町青島から扇端部である高岡市南部の湧水帯までの距離は13～15km、面積は146㎢に及ぶ。源を岐阜県荘川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流路延長115km、流域面積1180㎢、平均河床勾配１／120～１／800の規模をはかる[2]。また、庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は、庄川の排水河川の役目を果たし砺波平野の西端部を流れている。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっており、長閑な田園空間を形成している。

市域は大部分が扇状地によって占められているが、庄川以東には低位段丘、そして高位段丘である芹谷野段丘が存在する。段丘以東には、射水丘陵から連なる東別所新山山地などの丘陵帯が広がっている。

庄川右岸の段丘　庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までには低位段丘が存在しており、隆起扇状地堆積物が形成されている。頼成・権正寺・東保では、庄川右岸に沿う帯状の自然堤防の微高地上に集落が発達している。

1　佐伯安一　1979「砺波市」『角川日本地名大辞典16富山県』角川書店
2　富山県　1992『10万分の１富山県地質図説明書』

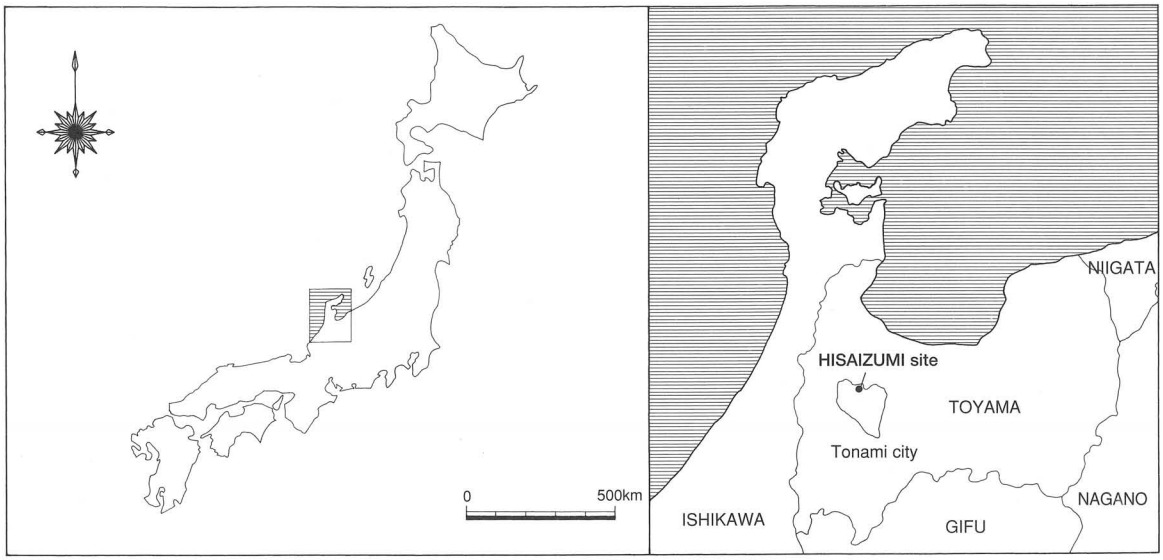


Fig. 2　久泉遺跡の位置

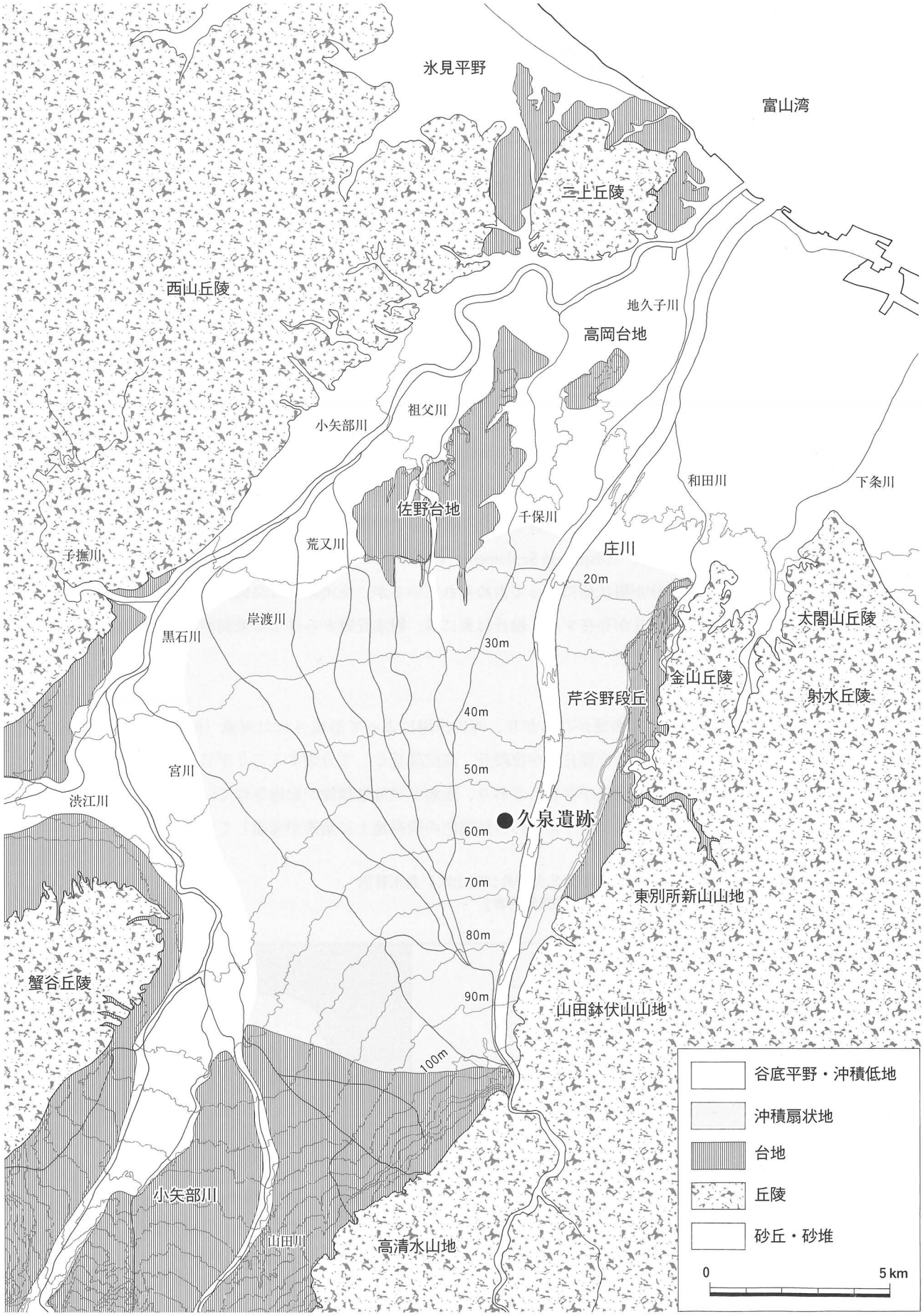


Fig. 3　庄川扇状地を中心とした地形分類図（Scale＝１／150,000）〔高岡市教委：2001〕p５を改変して作成

芹谷野段丘　高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10km に広がり、福岡の厳照寺周辺では海抜80m を測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が展開した。

芹谷野段丘の東、和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和田川流域段丘帯をなしている。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5km、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰き止められて増山湖ができた。

和田川の右岸は、一般に庄東山地・音川山地と呼称される範囲に含むことができ、富山県を東西に分断する射水丘陵帯の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。

東別所新山山地　南に位置する東別所新山山地は標高200m 余りを最高点として100m 余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。

久泉周辺の微地形　庄川扇状地上には自然堤防状や中州状の微高地が島状に点在しており、その間を縫うように旧河道が蛇行している。微高地や縁辺部では、マッドとよばれる植土や壌土が分布しており、そこには黒土層の堆積がみられる。黒土層は、①いわゆる黒ボク層で自然堤防上や中州状の微高地から縁辺部に分布するもの、②湿地帯で生成される有機質層、③埋没微高地からその縁辺部で生成された黒土層で、畠地土壌化・水田土壌化したもの、の３種に分類される[1]。

祖泉から久泉周辺は、マッドが分布しており[2]、南北に長い微高地状の地形が密集する地帯に本遺跡は位置している。

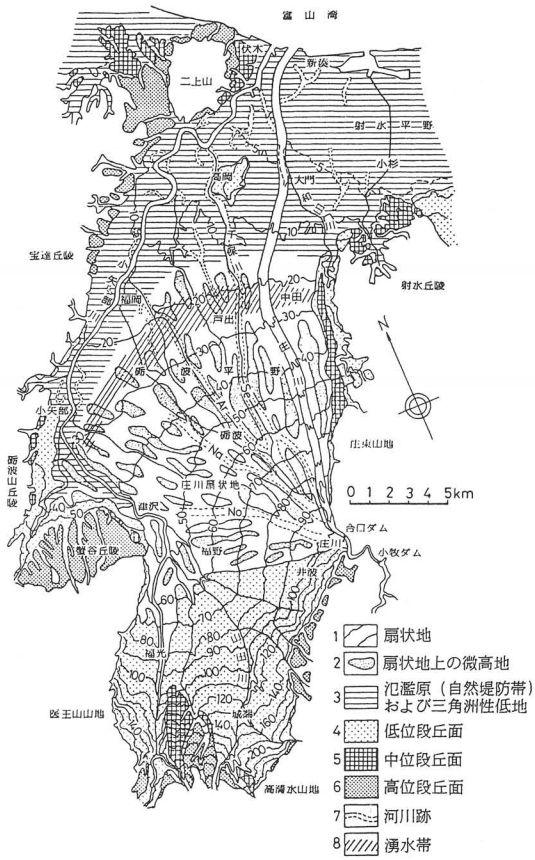


Fig. 4　砺波平野の地形分類図
〔神島：1990より転載〕

1　外山秀一　1997　「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」『砺波散村地域研究所研究紀要』第14号　砺波散村地域研究所
2　藤井昭二　1967　『50000分の１表層地質図　砺波』富山県

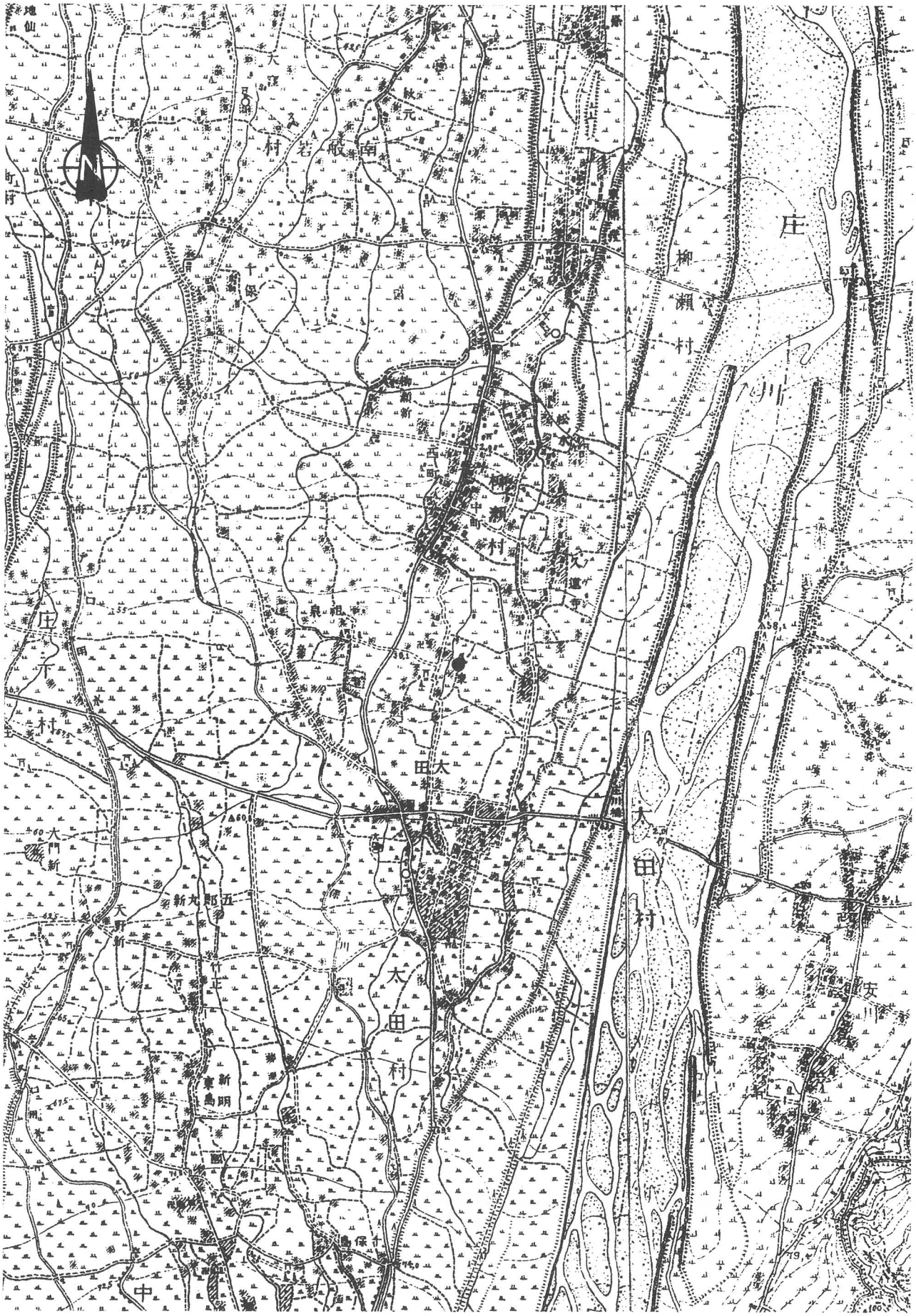


Fig. 5　久泉遺跡周辺地形図　Scale=１／20,000

「出町」「宮森新」（明治42年（1909）大日本帝國陸地測量部測図）より作成

Fig. 6　太田地区従前図（昭和 37 年（1962）、太田地区改良区作図を改変）Scale= 1 ／10,000

第２節　歴史的環境

砺波市には159箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在する（2005年３月現在）。ここでは久泉遺跡－１を中心として市内の遺跡について概観する。文中の遺跡名には「○○遺跡－１」というように Fig. 12の遺跡番号を付してある。

あけぼの

旧石器時代の遺跡は、庄川右岸の音川山地や芹谷野段丘に分布する。音川山地には芹谷遺跡－２・池原遺跡－３・増山外貝喰山遺跡－４・頼成Ｄ遺跡－５、芹谷野段丘には高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡－６などがある。市内において旧石器が注意されたのは、昭和48年頃の芹谷遺跡がはじめてであり、住蔵久雄氏の業績による。氏の発見以来、これまで100点以上の石器が表面採集された。それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」と呼ばれる鉄石英・玉髄でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・容結凝灰岩によるナイフ形石器や彫器で構成される[1]。

縄文文化の盛行

芹谷野段丘以東を中心として縄文文化の花がひらいた。高位段丘である芹谷野段丘では、上和田遺跡－７、厳照寺遺跡－８、宮森新天池遺跡－９、宮森新北島Ⅰ遺跡－10、頼成新遺跡－11、三合遺跡－12がある。また、中位段丘である和田川流域段丘帯には、高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡－６、増山遺跡－13などがある。市内における縄文時代の遺物は古くからその存在が知られ、大正13年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡－14から出土した御物石器は、前田円蔵氏が所蔵しており[2]、現在福岡の厳照寺にて保管され市指定文化財となっている。

芹谷野段丘縁辺の福岡・宮森新にまたがり存在する厳照寺遺跡－８は、市内の縄文遺跡として最も著名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周知されるようになった厳照寺遺跡は、梅檀野地区圃場整備事業に先立ち昭和50・51年に試掘調査、昭和51年に富山県埋蔵文化財センターによって本調査が実施された[3]。本遺跡から出土した土器群は、「厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として、中期前葉の地域的な指標となっている。遺構では、竪穴住居跡11棟・埋甕１箇所・穴などが検出され、典型的な弧状集落であることが判明した。宮森新北島Ⅰ遺跡では、「厳照寺Ⅰ式」の土器群と中期の竪穴住居跡１棟を確認している[4]。

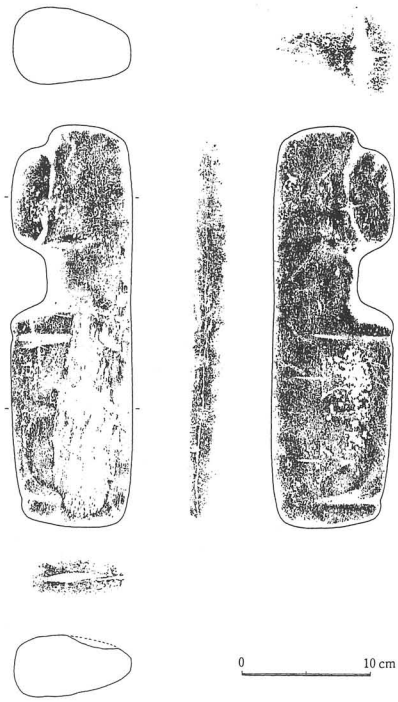


Fig. 7　中尾遺跡の御物石器

低地では庄川以東の低位段丘上に宮森遺跡－15、徳万遺跡－16、東保石坂遺跡－17など、芹谷野段丘を抉る谷口に存在する。また、庄川扇状地扇頂部には庄川町に中期前葉の松原遺跡がある。今回の調査により扇央部において初めて縄文遺跡が発見され、また、平成15年度の東保遺跡（東保高池遺跡）－18の試掘調査では縄文土器を検出している。

1　西井龍儀　1990「第１章　旧石器」『砺波市史資料編１　考古、古代・中世』砺波市史編纂委員会編
2　梅檀山村史刊行会　1976『梅檀山村史』
3　富山県教育委員会　1977『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』
4　富山県教育委員会　1978『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』

空白の時代　弥生から古墳時代にかけて現在のところ市域においては空白の時代と言わざるをえない。社会基盤が稲作経営に移行したことに連動し、人々が扇状地でも湧水帯の多い扇端部に移り住んだことに起因するものと思われる。わずかな資料として、福山大堤遺跡−19や安川野武士Ａ遺跡−20B 地点出土の弥生土器があるが、増山城跡−21発掘調査では弥生時代末の土器片が出土している[1]ことから、皆無というわけではない。婦負郡や射水郡に連なる丘陵地帯や、扇状地に点在するマッド上など安定的な土地で未発見の遺跡が眠っている可能性がある。古墳時代資料としては、高沢島Ⅲ遺跡−22が挙げられる。古墳時代後半の土師器の甕や高杯の一部が出土している。また、増山城跡−21内の又兵衛清水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している[2]。池原には“丸山古墳”やかつて県指定史跡であった“狐塚古墳”があり、前方後円墳とされていたが現在指定は解除され、古墳と見る研究者は少ない。

古代の開発　考古学的な空白期間ののち、市域では扇状地から段丘上にかけて古代の遺跡が出現しはじめる。奈良時代、庄川扇状地東部に展開した４荘の東大寺領荘園（石粟荘・伊加流伎荘・井山・杵名蛭荘）の成立に連動したものであろう。また、芹谷野段丘上では梅檀野窯跡群が操業をはじめ、大規模に須恵器生産を行っている。芹谷野段丘上の西側斜面一帯には、幾多の数の窯跡が現在も残っており表面観察や遺物の採集ができる。須恵器生産の開始年代は、増山支群の宮森窯跡−23と福山支群の安川天皇窯跡−25が８世紀半ばに位置付けられる[3]。８世紀後半になると、増山支群では増山亀田窯−25、増山団子地窯−26、増山妙覚寺坂窯−27、福山支群では福山窯−28、福山小堤窯−29、福山大堤窯−30が操業している。その後、梅檀野窯跡群では、10世紀ごろまで須恵器生産が続けられる。

昭和37年７月に砺波市史編纂委員会が中心となり、福山窯跡−28の発掘調査を実施した[4]。出

⇒昭和37年（1962）の発掘調査にて出土。瓦塔は、水煙部、屋蓋部、軸部、基壇部が出土している。水煙部は、上部がすぼまる角筒状軸部の外側に羽根がつくものであり、上・下端に円形の通し穴がある。羽根部分は欠損するが、軸部に接してそれぞれ７～８個の小穴が開けられている。軸部の側面には、ヘラ描きで一茎から両脇に派生した３個の蓮華のつぼみが表現されている。つぼみは隣り合う面で対称に配置されている。

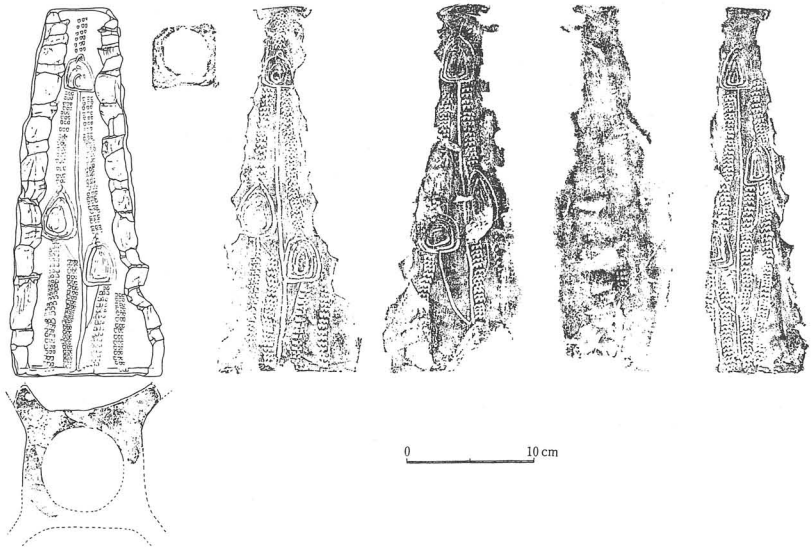


Fig. 8　福山窯跡出土の瓦塔水煙部器
〔砺波市史：1990より転載〕

1　砺波市教育委員会　2003『増山城跡発掘調査報告』(林道増山城跡線拡幅工事に伴う発掘調査報告書
2　安念幹倫　1991「七　城跡群の遺物」『富山県指定史跡　増山城跡調査報告書』　砺波市教育委員会・砺波郷土資料館
3　西井龍儀　1994「利波郡における分窯とその背景」『北陸古代土器研究』第４号　北陸古代土器研究会
4　砺波市史編纂委員会他　1962　『砺波市福山〈徳万赤坂〉須恵器窯発掘報告』

土品には水煙・屋蓋・軸・基檀など瓦塔の一部や円面硯、土馬など特記すべき遺物があり、市指定文化財となっている。

扇状地上では河道に挟まれたマッドとよばれる微高地に遺跡が展開する。小杉周辺（小杉遺跡−31）、高道〜宮村〜千代周辺（高道向島遺跡−32、宮村遺跡−33、千代遺跡−34など）、太田〜久泉〜秋元周辺（太田遺跡−35、久泉遺跡−１、秋元窪田島遺跡−36）など分布が集中する傾向にある。徳万から頼成にかけては低位段丘上に徳万頼成遺跡−37がある。庄川扇状地東側の墾田開発と同時期における扇央部の開発が遺跡の分布に反映しているものと思われる。

徳大寺家領般若野荘

徳大寺家領般若野荘は、市域東部に広く展開し、現庄川両岸に沿って南は三谷地区から北は中田地区に及ぶ広大な荘域であった。荘域のなかには奈良時代に成立した東大寺領荘園伊加流伎・石粟・井山の３荘があったと推定される。

徳大寺家は藤原北家の流れを継ぐ閑院流の出であるが、般若野荘がどのような機縁で家領となったのか、またいつごろ成立したか確証となる史料はない。知行国制が一般化し、縁故関係や成功によって国守が選任され、私的人脈によって国政が普遍化していった院政期にあって、徳大寺実能・公能父子が越中国の政務に深く関わっていることを考慮すれば、公能が越中国守となった大治元年（1126）頃に般若野荘の成立をみるのが妥当であろう[1]。

中世において般若野荘では幾度かの合戦が繰り広げられた。治承・寿永の源平争乱[2]では、寿永２年（1183）、般若野荘に布陣していた平盛俊は源軍の今井兼平を迎え戦ったが敗れ、退き小矢部川原で戦ったが劣勢となり倶梨伽羅峠を越えて加賀に引き上げている。後鳥羽上皇が執権北条義時と敵対したことに端を発した承久の乱[3]では、承久３年（1221）鎌倉方である名越（北条）朝時らの北陸道軍が般若野荘まで侵攻し、京方（後鳥羽上皇方）との合戦となった。京方はこの合戦で敗れ、軍陣に降っている。

嘉吉元年（1441）の「薩戒記」[4]によると徳大寺公有が越中の荘園経営の不振に陥っている。庚永元年（1342）に般若野荘の南にある三谷寺が鎌倉覚園寺塔頭蓮華院領となっていることや、武家方の地頭方により押領が起こりやむなく領地を折半する（下地中分）という事態に起因する。明応３年（1494）にあっては越中国の徳大寺家領荘園が不知行となっている[5]。天文14年（1545）、越中に下向した徳大寺実通は、知行

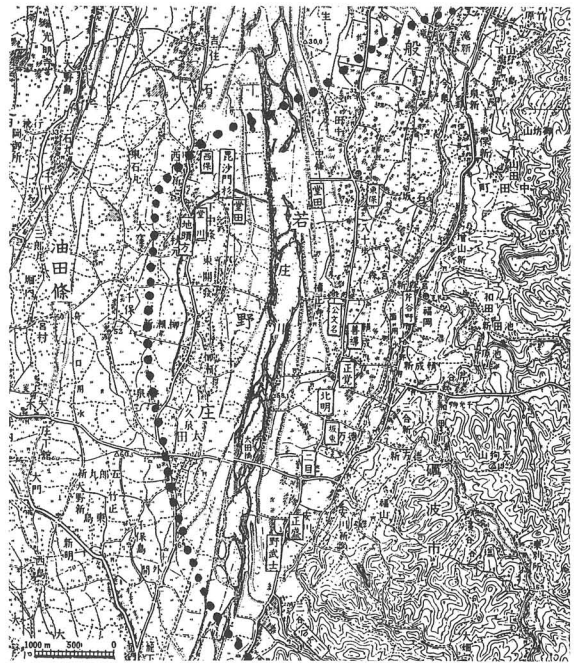


Fig. 9　徳大寺家領般若野荘荘域図
〔砺波市史：1965より転載〕

1　河合久則　1990「二、徳大寺家領般若野荘について」『砺波市史資料編１考古古代・中世』砺波市史編纂委員会編
2　『源平盛衰記』二九　寿永２年５月
3　『平家物語』長門本十三　寿永２年５月条
4　権大納言中山定親の日記
5　『後法興院記』明応３年２月２日条

分にて殺害される[1]。雄神荘の庄城（壇ノ城）に拠る石黒氏や神保氏、在地荘民のいずれの手によるものか不明であるが、家領荘園での混乱状況をうかがうことができる。安川の般若山薬勝寺の南にある公家塚（九人塚）と呼ばれる五輪塔の墓地は、実通に関係があるのかもしれない。

荘域にある遺跡としては、東保遺跡（東保高池遺跡）[2]—18、久泉遺跡—１、秋元窪田島遺跡—36、正権寺遺跡—38、狐塚遺跡—39などが存在する。12世紀後半から13世紀前半の東保遺跡（東保高池遺跡）—18では土師器が多量に出土し、墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状遺構が検出されている。秋元窪田島遺跡—36、正権寺遺跡—38は、ともに15世紀に位置付けられる。

中世末期の動乱

南北朝時代には、二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえる。和田城は、増山城—21に先立ち構築された亀山城—40であるという説が有力である。現在の亀山城は、戦国時代前期に修築された可能性が高いが、郭が同心円状に配置していることや全体的な規模などから増山城より古い構造をもつ。室町時代に神保氏が婦負・射水郡の守護代となり、はじめ亀山城を使用していたが、本城である放生津城の支城として亀山城を修築したとされる。永正３年(1506)、一向一揆を攻めるために進軍した越後守護代長尾能景が増山城に近い芹谷の合戦で討死していることから、軍事的緊張が高まっていたことが考えられ、亀山城の整備が行われ、現在の姿に近い形になったようである。さらに天文年間頃、神保長職が富山城の支城として増山城が構築されたと考えられる。こののち増山城は、長職を追撃した上杉謙信の手に落ち、永禄年間後期に長職と上杉が結んで一向宗徒を攻撃したときには、長職の本拠となっている。また、長職没後、一時的に反上杉方が居を構えるが、天正４年（1576）に謙信に攻められ落城し、天正９年（1581）に織田方に焼き払われている。天正11年（1983）以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もっとも城域が広く構造的に完成したのではないか。成政ののち、増山城は前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したと考えられる。（野原）

1　『言継卿記』天文14年３月・４月　「越中国於知行分」とあり、般若野荘か宮河荘かは不明。
2　かつての東保高池遺跡を含む遺跡。平成15年度試掘調査により範囲拡大・名称変更。

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	久泉遺跡	縄文・奈良・平安・中世	集落	21	増山城跡	鎌倉・室町	山城
2	芹谷遺跡	旧石器・縄文・古代	散布地	22	高沢島Ⅲ遺跡	奈良・平安	散布地・集落
3	池原遺跡	旧石器・縄文・古代	散布地・製鉄	23	宮森窯跡	奈良・平安	窯
4	増山外貝喰山遺跡	旧石器	散布地	24	安川天皇窯跡	奈良・平安	窯
5	頼成Ｄ遺跡	旧石器？	散布地	25	増山亀田窯跡	奈良・平安	窯
6	高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡	旧石器・縄文・古代・近世	散布地・集落	26	増山団子地窯跡	奈良・平安	窯
7	上和田遺跡	縄文（中期・晩）	散布地	27	増山妙覚寺坂窯跡	奈良・平安	窯
8	厳照寺遺跡	縄文（中期）	集落	28	福山窯跡	奈良・平安	窯
9	宮森新天池遺跡	縄文	散布地	29	福山小堤窯跡	奈良・平安	窯
10	宮森新北島Ⅰ遺跡	縄文（前・中・晩期）	集落	30	福山大堤窯跡	奈良・平安	窯
11	頼成新遺跡	縄文？	散布地	31	小杉遺跡	奈良・平安	散布地
12	三合遺跡	縄文	散布地	32	高道向島遺跡	奈良・鎌倉	集落
13	増山遺跡	縄文・奈良・平安・中世・近世	散布地・集落	33	宮村遺跡	奈良	散布地
14	中尾遺跡	縄文	散布地	34	千代遺跡	奈良・平安	散布地
15	宮森遺跡	縄文	散布地	35	太田遺跡	奈良	散布地
16	徳万遺跡	縄文（中・後期）・古墳・中世	散布地	36	秋元窪田島遺跡	古代・中世	集落
17	東保石坂遺跡	縄文（中期）・奈良・鎌倉	散布地	37	徳万頼成遺跡	古代・中世	集落
18	東保遺跡	縄文・古代・中世	集落	38	正権寺遺跡	平安	散布地
19	福山大堤遺跡	縄文	散布地	39	狐塚遺跡	鎌倉	散布地
20	安川野武士Ａ遺跡	奈良・平安・中世	散布地	40	亀山城跡（増山城跡群）	鎌倉・室町	山城

Tab. 2　久泉遺跡と周辺遺跡一覧表

Fig. 10　久泉遺跡とその周辺遺跡　Scale＝１／50,000

この図は国土地理院長の承認を得て同院発行の２万５千分の１地形図を複製したものである。（承認番号）平16北複、第101号

第３章　　調査の成果

第１節　調査方法と調査経過

調査計画　今回の調査対象面積は、2,920㎡の二層と、次年度調査区内の電柱移設箇所12㎡（４㎡×３箇所）の合計2,932㎡である。調査区（2,920㎡）は２地区に別れ、市道久泉線を挟み西側調査区、東側調査区に区分し、さらに東側調査区を北側調査区、南側調査区と区分した。また、市道久泉線の東側に沿って電柱が存在し、調査を行うにあたって倒壊の恐れが生じたため、矢板による電柱保護を行い補強した。

遺構面は、試掘調査において確認した上下二面であり、本調査においても確認することができた。黒色遺物包含層（⑤層）上面および、黒色遺物包含層直下の黄褐色地山上面の上下二面である。北側調査区→東側調査区→南側調査区→西側調査区の順で上下それぞれの遺構面の調査を完了しながら進めた。また、南側調査区の一部に、調査区を横断し市道からビニールハウスへ農作業機の進入路として利用していた部分があったため、農繁期が終わる８月下旬から掘削を行った。進入路部分については二層目の掘削に入る前に表土掘削を行った。まず進入路部分の上層を調査し、終了後下層目の調査を他の調査区と並行して行った。

調査方法　現地調査は一般的な発掘手順（表土・盛土除去→包含層掘削→遺構確認面の精査・遺構検出→遺構掘削→写真撮影→記録作業→測量→補足作業）で行った。試掘調査結果に基づき調査員立会いのもと重機による表土除去を実施した。排出した表土は耕作土と表土とに分け、ダンプトラックによりすべて東側の調査区外に搬出し山積みにした。遺構掘削時の排土も同様に東側の調査区外に山積みにした。表土掘削後、黒色遺物包含層上に遺構を確認したので、この面を

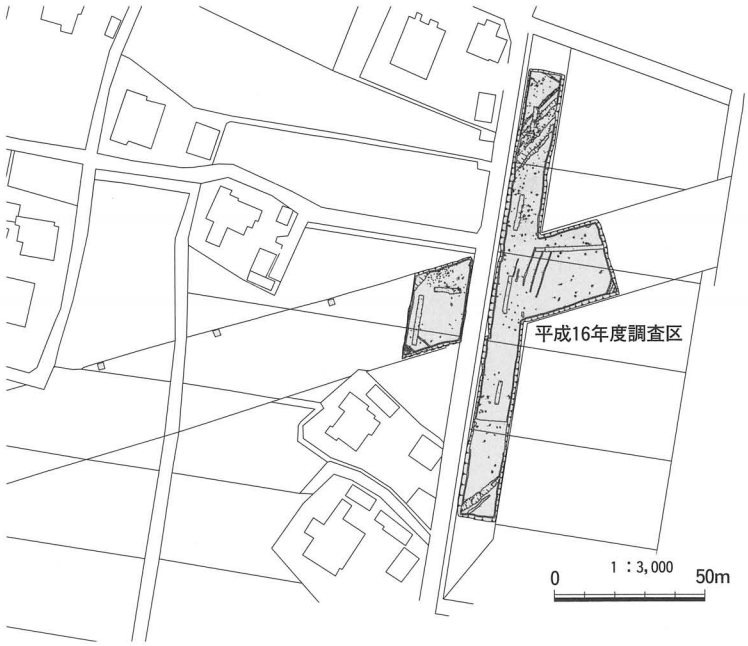


Fig. 11　調査区位置図（Scale＝１／3,000）

上層遺構面として調査を行うこととした。小規模な土坑やピットに関しては遺構検出のちに５cm 程度掘り下げた状態で記録し、遺構概略図作成後に遺構半裁と断面の記録作業を行う手順をとった。グリッドの設置には、国家座標（日本測地系）を基準に10m×10m の基準杭を設置し、出土遺物は５m 毎に適宜取り上げた。遺構掘削後、記録作業・写真撮影などの記録作業を随時実施した。

上層面の調査が終わり次第、人力により下層面までの遺物包含層掘削を行った。下層の調査は上層面と同様に行い、上層・下層面ともに完掘後に実機ヘリコプターによる空中写真測量、撮影を実施した。

現地調査は４月21日に開始し、９月28日に終了した。現地調査終了後、整理作業、報告書作成作業に入った。出土遺物の洗浄・注記・接合・復元は現地調査中の雨天時に行っており、室内作業は実測より始めた。実測作業後、分類、トレース、写真撮影、報告書作成を順次進めた。

電柱移設地　市道久泉線の地下横断工事に伴う切り回し工事のため、次年度調査区内（バイパス本線）に電柱を移設することとなった。電柱打ち込みは４箇所あり、うち調査が必要な３箇所に２m×２m の調査区を設定し、発掘作業（掘削→遺構検出→遺構掘削→記録作業→補足作業）を行った。

調査参加者　発掘作業ならびに整理作業を通して下記の方々の参加を得ることができた。炎天下の中、ひたすら作業に従事してくださった作業員さん、ならびに素晴らしい技術をもって整理に携わってくださった方々に衷心より謝意を表したい。

発掘作業　天野秋一、安念一正、永森　是、折橋　清、河原義夫、島田一郎、順徳みゆき、仙道孝俊
田島　博、鶴巻ヨシエ、長森　勉、西村昌蔵、野口静華、信田豊次、信田正明、林　清夫
東島耕三、松田利子、村上良雄、室崎光子、安ヶ川礼子(以上、㈱砺波市シルバー人材センター)
岡本信人、佐伯好秋、島田雅司、角田広一、角田亜紀子、中島由紀子、服部利浩、
満保三樹、宮本良則、吉村　豊（以上、日本海航測㈱）
佐野睦美、新保利恵、野田幸二、渡辺賀世子（以上、㈱中部日本鉱業研究所）

整理作業　岡田秀子、車谷和子、鈴木和子、橋本一恵、吉田直美（以上、日本海航測㈱）
加藤由美子、北川泰子、高橋英吏子、角田亜紀子、橋　真理子、渡辺賀世子
（以上、㈱中部日本鉱業研究所）

調査日誌抄

4／21　事前準備
5／10　東側調査区、表土剥ぎ開始。
5／14　南側調査区、表土剥ぎ開始。
5／17　作業員作業開始。安全教育等行う。
5／18　電柱保護の矢板設置。
5／19　北側調査区、表土剥ぎ開始。上層調査開始。SD09を確認。
5／24　西側調査区、表土剥ぎ開始。西側調査区においてSD09を確認。
5／26　表土剥ぎ終了。上層遺構検出開始。上層グリッド杭設置。
6／2　SD09の掘削に入る。
6／3　約200基の遺構を確認。遺構掘削・記録作業開始。
6／9　SD03の掘削開始。
6／11　SD03の掘削終了。写真撮影・記録作業を行う。西側調査区遺構掘削開始。
6／16　基本層序分層を行う。並行し図化作業・写真撮影を随時行う。
6／18　南側調査区遺構掘削開始。SD170の掘削に入る。
6／30　上層面調査終了。空中写真測量・撮影。タワーを設置し全景写真撮影を行う。
7／2　遺物包含層掘削、遺構検出を行う。
7／5　上層掘立柱建物(SB01)掘削･写真撮影を行う。
7／21　砺波市文化財保護審議会視察。
7／23　北側調査区の遺物包含層中から礫群検出。
7／26　約250基の遺構を確認。下層調査に入り随時各作業を行う。
7／30　北側調査区礫群の図面作成･写真撮影を行う。
8／2　SD09完掘全景写真撮影を行う。
8／4　SP263掘削・写真撮影・記録作業を行う。
8／12　北側調査区礫群の空中写真測量･撮影を行う。
8／13　砺波コミュニティーテレビ（2ch）取材。ふるさと開発研究所（「富山写真物語万華鏡」）取材。
8／18　ビニールハウス進入口表土剥ぎ開始。
8／19　金田章裕先生（京都大学）来跡
8／20　西側調査区、遺構掘削・写真撮影・記録作業開始。
8／27　西側調査区、遺構完掘、写真撮影を行う。ビニールハウス進入口の上層調査開始。随時各作業を行う。
8／29　太田地区体育振興会見学（約40名参加）。
9／1　ビニールハウス進入口、上層調査終了。写真撮影、記録作業、遺物包含層掘削を行う。砺波市教育委員視察。
9／3　南側調査区、基本層序の写真撮影、図化作業を順次行う。
9／18　久泉遺跡現地説明会（約50名参加）
9／21　庄南小学校６年生（38名）見学。
9／22　下層面調査終了。空中写真測量・撮影。タワーを設置し全景写真撮影を行う。
9／23　補足作業。
9／27　土壌サンプル採取。
9／28　現場事務所等撤収、現地調査終了。

（野原・小川）

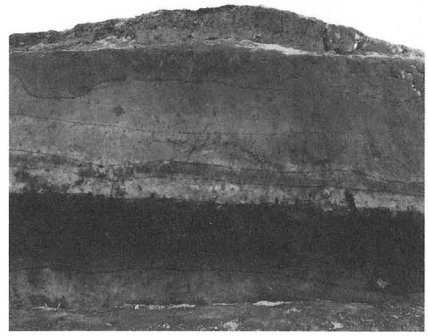
（⇑）台風23号で水没した大溝

（⇑）酷暑の中、ひとりSD09断面前でたたずむ

第２節　基本層序　　(Fig. 12, Tab. 3)

本節の目的　平成15年度調査区（4,200㎡，東西延長150m）から約200m東に今年度調査区が位置している。両調査区の間に平成17年度調査区があるため、３ヵ年調査が完了しなければ、連続的な地形状況や堆積層序を把握することはできない。しかし、平成14年度には本事業対象地全域の試掘調査を実施しており、断片的なトレンチ調査ではあるが、ある程度は地形状況・堆積層序を推定することが可能である。本節では、これまで２ヵ年の本調査範囲の基本層序の連続性や、地形・堆積状況の相違を把握することを目的とし、試掘調査の基本層序を手がかりとして把握に努めたい。

鍵　層　調査区は、河成堆積扇状地である庄川扇状地上の扇央部に位置しており、扇状地形に特有の堆積状況がみられる。この堆積状況を読み解く鍵層として、３ヵ年の調査対象地内において、普遍的に存在する５層（黒色有機質層・黒ボク土）・６層（地山シルト層）・７層（地山砂礫層）がある。これら層位を鍵層と位置付け、平成15・16年度調査区において同名の番号を付与している。よって16年度調査区の基本層序は、地表に近い位置から順に層位番号を付さず、鍵層である５・６・７層以外は現地調査段階で認識した順序で層位番号を付した。５層は黒色有機質層であり、縄文期の遺物包含層でもある。６層・７層は地山であり、６層は褐色シルト層、７層は砂礫層である。地表に近いところから５層→６層→７層の順で堆積している。



土層断面基本写真

地山の変化　地山と認定した層位は、基本的に２層ある。地山シルト層である６層は、褐色～黄褐色～明黄褐色を呈し、黒色の５層とは色調が明瞭に異なる。15・16年度、試掘調査においてほぼ全域で存在していたが、所々で７層から漸移的に５層が堆積しており、間層の６層が堆積していない箇所があった。これは、地山砂礫層である７層の堆積状況を反映したものであり、埋没微地形の影響を受けたものと判断できる。庄川扇状地は河成堆積扇状地に分類され、その形成過程では、高水時ごとの礫の堆積、扇頂溝の形成、自然堤防の形成とその破堤、河川の転流、新しい流路ぞいの砂礫の堆積および自然堤防の形成、というサイクルが幾度となく繰り返されるという[1]。礫層（７層）は河成堆積扇状地を形成する主要な構成物であり、扇状地礫層（fanglomerate）と呼ばれるものである。庄川扇状地上で砂礫採取工事を見受けることがあるが、観察すると表層堆積物が地表から１～1.5m程度の深度まで堆積しており、その下は７層のような扇状地礫層が累々と10数m下まで続く状況である。河川の形成営力によって掃流運搬された礫の堆積の結果、扇状地を構成する７層が形成された。この段階では、地表は起伏に富み、無数の自然堤防（natural levee）や後背湿地（back lowland）が形成され、それらを縫うように河流（stream）の通る細長い溝状の凹所である大小の河道（channel）が走っていたことであろう。現在では平坦な水田景観が広がる庄川扇状地もかなりの起伏があったと考えられる。その７層

1　鈴木隆介　1998「第６章　河成低地」『建設技術者のための地形図読図入門第２巻低地』古今書院，p299。基本的な地形用語は、同書を参考にしている。

により形成された微起伏の凹部に、河道から溢れ出た越流（overflow）・溢流によって細粒の泥や砂（６層）が堆積した結果、先述したように７→６→５層、７→５層と場所によって２種の堆積状況を生むことになったと理解したい。理解の一助として、試掘調査結果から埋没微地形の復元を試みている[1]。久泉遺跡の所在地は、かつて旧中田川と旧千保川に挟まれた微高地だったところであり、圃場整備以前までは河岸段丘が良好に確認できる状態であった。埋没微地形は複雑に入り組むが良好に遺構・遺物が検出された範囲（H15～17調査区）は、周辺よりややレベルが高い微高地状の地形であり、南北に幾筋か小河道が走ることが判明した。いわば島状の中洲もしくは川中島といった印象である。この微高地の範囲には、「中島」という小字が残っていることも興味深い。

黒色有機質層

５層は黒色シルト（黒ボク土）で、調査区全体にわたって遺物包含層化しており、上面で遺構を確認できたことから上層遺構面として扱っている。15年度調査区Ａ－４区で厚く堆積している５層は上部層の影響をほとんど受けておらず、いわゆる純粋に近い“黒ボク土”であった。

黒ボク土

黒ボク土とは、外山秀一氏によると大きく次の３つに区分されるという[2]。

まず、（１）いわゆる黒ボク層とよばれるもので、自然堤防状や中州状の微高地からその縁辺部にかけて分布する。次に、（２）低湿地や湿地で生成される有機質層で埋没した旧河道底でみられ、ヨシ属の高出現に代表される。さらに、（３）埋没した微高地からその縁辺部で生成された黒土層で、これはａとｂとに細分される。ａは（１）の生成後に畠地土壌化したもので、ウシクサ族とイネが多数検出される。また、ｂは（２）の生成後に水田土壌化したもので、ヨシ属とイネに代表され、旧河道底が水田として利用されている。

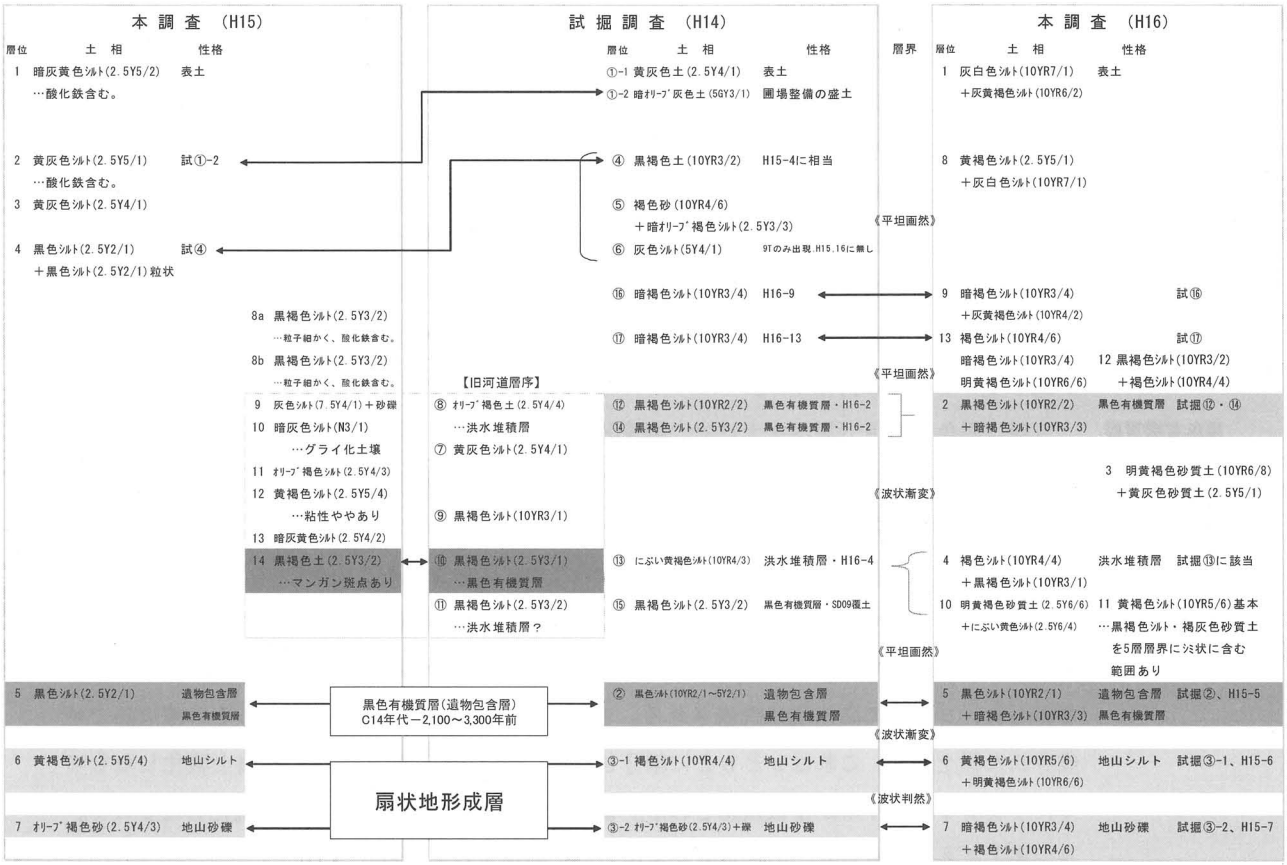
３種ある黒ボク土のうち、庄川流域で特徴的にみられるのは（１）と（３）ａであるという。すなわち、微高地からその縁辺部に分布する黒ボクと埋没した微高地からその縁辺部に分布する黒ボクが土壌化したものである。地山層（６・７層）は周辺より高い微高地地形を示していることは先に触れたとおりであり、５層の堆積もそうした地形状況に整合する。

“黒ボク土”という呼称からも想像できるように、手で触れるとフカフカで空気を多く含み、粘性はほどんどなく、水の浸透率も高い。掘削・検出を伴う埋蔵文化財調査に適している土壌である。調査員・作業員にやさしい土質である。

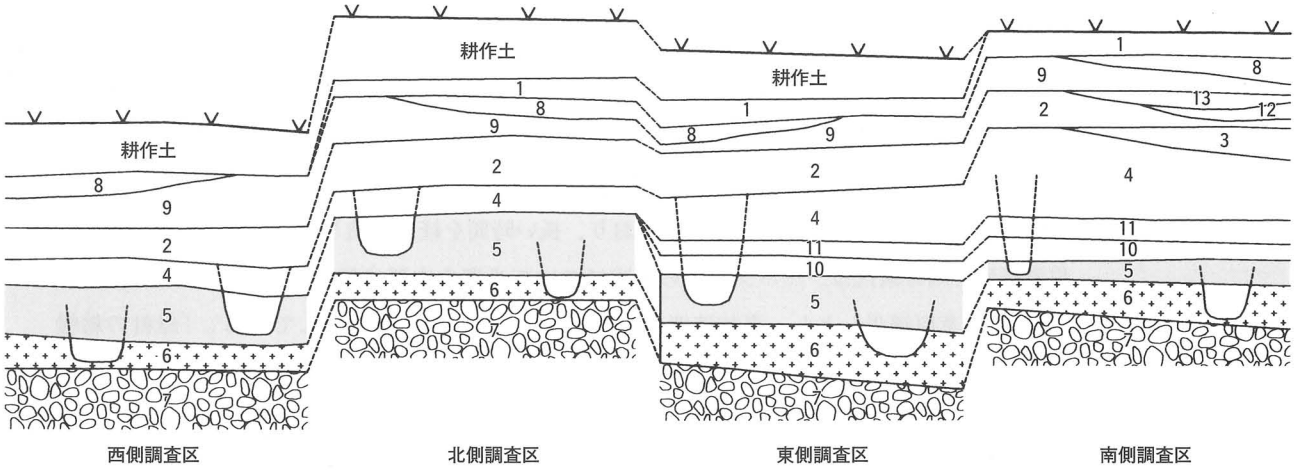
５層の形成

６・７層から漸移的に５層が堆積しており、長い時間を経て堆積していったことを物語る。佐瀬隆氏と細野衛氏は、黒ボク土層の生成について必要な主要自然条件を「テフラ」「温暖湿潤気候」「草原植生」とし、森林破壊などの「人為」の関わりを指摘している[3]。「母材の緩慢な堆積と腐植の集積」という過程で生成される黒ボク土が黒いのは、「テフラ」の風化により生じる「活性アルミニウム」の役割によるものであり、森林植生では発達しないという。５層は、外山氏が指摘したようにテフラに起因しないタイプの黒ボク土であるため、単純に比較できないが草原植生により生成されるという構造は同じではないか。調査区にはいくつもの巨大な風倒木痕を確認しているが、縄文期という時間軸を考慮した場合、森林と呼ぶほどの植生で

1　野原大輔　2004「第２節　過去に行われた調査」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会,p10
2　外山秀一　2004「第５節　プラント・オパール分析」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会
3　佐瀬隆・細野衛　1998「黒ボク土層生成論―その“堆積性と“人為との関わり”について”―」『紀要ⅩⅧ―20周年記念論集―』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



Tab. 3　基本層序相関図（H14試掘調査・H15本調査・H16本調査）



基本層序

1．灰白色シルト（10YR7/1）＋灰黄褐色シルト（10YR6/2）　表土
2．黒褐色シルト（10YR2/2）＋暗褐色シルト（10YR3/3）　黒色有機質層　試掘⑫・⑭
3．明黄褐色砂質土（10YR6/8）＋黄灰色砂質土（2.5Y5/1）
4．褐色シルト（10YR4/4）＋黒褐色シルト（10YR3/1）　洪水堆積層　試掘⑬に該当
5．黒色シルト（10YR2/1）＋暗褐色シルト（10YR3/3）　遺物包含層　黒色有機質層　試掘②、H15－５
6．黄褐色シルト（10YR5/6）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）　地山シルト　試掘③－１、H15－６
7．暗褐色シルト（10YR3/4）＋褐色シルト（10YR4/6）　地山砂礫　試掘③－２、H15－７
8．黄褐色シルト（2.5Y5/1）＋灰白色シルト（10YR7/1）
9．暗褐色シルト（10YR3/4）＋灰黄褐色シルト（10YR4/2）　試⑯
10．明黄褐色砂質土（2.5Y6/6）＋にぶい黄色シルト（2.5Y6/4）
11．黄褐色シルト（10YR5/6）基本…黒褐色シルト・褐灰色砂質土を５層層界にシミ状に含む範囲あり
12．黒褐色シルト（10YR3/2）＋褐色シルト（10YR4/4）
13．褐色シルト（10YR4/6）　暗褐色シルト（10YR3/4）　明黄褐色シルト（10YR6/6）　試⑰

Fig. 12　基本層序模式図

あったかは疑問である。外山氏のプラント・オパール分析により「微高地から後背湿地にかけての緩傾斜地にススキやチガヤなどのウシクサ類が繁茂する草原」であったことが証明されている。久泉遺跡では、「草原植生」が黒ボク土生成の主要条件であるということが可能である。

遺物包含層　調査区（H15～17調査区）全体を通して、５層は縄文期の遺物包含層化している。遺物は、漸移層の上縁から出土し始め、５層中位から上部に集中する。縄文土器年代では、中期中葉（上山田・天神山式）から後期後葉（八日市新保式）にあたる。縄文期遺物包含層を傍証すべく、５層の土壌サンプルによる放射性炭素年代測定（β線計数法＝液体シンチレーション法）を実施した[1]。結果、15年度調査区で約2,100年～3,300年前、16年度調査区で約3,300年前（第３章第５節，p81）という年代値を示した。これは、出土遺物年代ともよく整合する。

また、調査区（H15・16）全体では一定した堆積状況ではなく微地形により堆積厚が大きく変化していたが、H16調査区では層厚30～50cm と安定している。

上層遺構面
下層遺構面　５層の上面・下面で遺構を確認したため、それぞれ上層遺構面、下層遺構面として扱っている。次節でも詳細に触れるが、各遺構面はあくまでも遺構を認識しえた面であり、各期の旧地表面としての認識はない。上層遺構面は、遺構数の絶対的な少なさも気にかかるところであるが、遺構深度が浅く、さらに上層からの掘り込みにより形成された可能性が高い。古代・中世の遺構を検出したが、それらの遺物包含層にあたる層位を確認できていない。基盤整備により削平されたことも考えられる。下層遺構面は、５層と６層の層界にあたり漸移的変化を示しているので生活面とは考えにくい。５層中に旧地表面が存在するものと考えられる。

洪水堆積層　H15・16調査区内全域で検出したわけではないが、スポット的に洪水堆積層と思われる層位が見受けられる。H15調査区東端Ａ－４区で確認した旧河道はもちろんのこと、５層－２層の間に厚く堆積する４層がそれにあたる。褐色～黒褐色、試掘調査ではにぶい黄褐色を呈し、粒子の細かなシルト層である。５層との層界は平坦画然であり、急激な堆積環境の変化を読み取ることができる。河道からの越流・溢流による運搬物と考えられ、周囲より高い微高地にもかかわらず洪水を受けていたことを物語る。所々、ラミナ状堆積が観察できる箇所があったが基本的には４層を細分することはできず、短期間のうちに堆積したと考えられる。調査区南側は地山が緩やかに傾斜しており、地形的に低いところでは４層が70cm 近く堆積している。反対に地山レベルが高い箇所では、層厚は薄い。これは、低いところに厚く堆積する洪水堆積層の特性をよく示すものと考えられる。４層の洪水層が堆積した後、再び黒色有機質層（２層）が堆積する。地形的安定性を取り戻し腐植・集積を繰り返し黒色土が堆積したもので、５層形成時と堆積環境はさほど変化がみられないようである。この黒色土は、H16・17調査区においてのみ見られるもので、H15調査区にはない。間にある旧河道により地形的な変化から堆積しなかったとも考えられるが、本来存在したものが基盤整備で削平された可能性が高い。SD212の断面では、４層を掘り込んで形成され、２層により埋まったのちに再び２層上層から掘り込む状況が確認できる。調査区全体を通して、２層から表土層までの層位が少ない。表土は水田耕土であり、その直下は基盤整備の盛土である。表土下各層の層厚も薄く、表土に古代・中世遺物を含むことから、かつて存在した層位が何らかの要因で削平された可能性もある。（野原）

黒色土の再堆積

1　パリノ・サーヴェイ株式会社　2004「第６節　自然科学分析（放射性炭素年代測定、脂肪酸分析、リン・腐植分析）」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会，p67

第３節　遺　構　(Fig. 13～29, Tab. 4 ～13)

今回の調査において検出された遺構は、掘立柱建物、土坑、溝、ピットで構成されており、遺構の種類としては少ない。また、調査区全体で遺物を伴う遺構は少量である。上層遺構は５層上面において確認され、年代を特定する材料が少ないものの、出土遺物から古代から中世に帰属するものと考えられる。下層遺構は、縄文時代の遺物包含層である５層下面で認識することができたが、打製石斧をはじめとする遺物の大半が５層中位レベルで検出されたこと、そして６層（地山）から５層へ漸移的に黒褐色土が堆積している状況から、縄文期の旧地表面（生活面）が５層中にある可能性が高いことを断っておかなくてはならない。

以下、（１）上層遺構、（２）下層遺構の順で詳細について述べる。

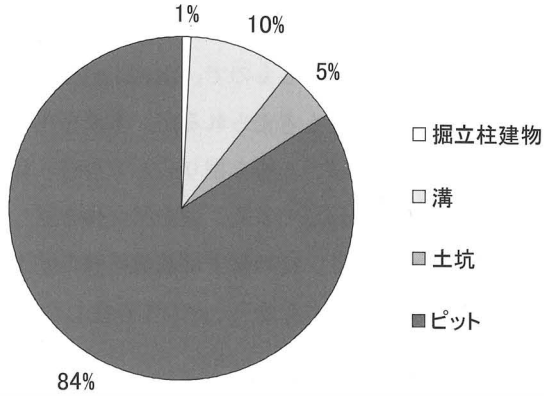
（１）上層遺構　(Fig. 13, Tab. 4)

上層の概要　試掘結果より、全域に遺物包含層（５層）の存在が確認されていたため、重機による表土掘削を遺物包含層上面付近まで行った。表土を掘削した段階で遺構が確認されたので、上層面として遺構調査を行った。上層遺構面は５層上面で認識したが、前年度に５層の放射性炭素年代測定を実施したところ約2100年から3300年前の値を示していることから[1]、上層遺構の年代（古代～中世）とあまりに時代的乖離があることになる。掘立柱建物の柱穴やその他の遺構においても、遺構深度が20～30cm 程度と浅い。また、５層上層には４層があるが、土相(土質・色・構成材）が全く異なることから、そこに堆積環境の変化を読み取ることが可能である。外山秀一氏によるプラント・オパール分析によると、５層（遺物包含層）に相当する“黒ボク土”からはプラント・オパールの出現率が低く、数10cm 上層から高出現する傾向が認められている[2]。以上のことから、上層遺構として捉えた遺構群は検出面（上層遺構面）より上部から掘り込まれ形成された可能性が高く、古代・中世期の旧地表面は５層上層の４・10・11層中に存在する蓋然性が高いと言えよう。

遺構の構成　上層遺構面では、溝13条、土坑７基、ピット112基、掘立柱建物跡１棟が確認された。各遺構の構成比率は下グラフのとおりである。調査区北側から西側には、大規模な溝 SD09が存在し、平行するように SD03が検出された。

また、調査区南側には SD09と軸を同じくして SD170をはじめとする溝群が存在し、当時の地形状況を示すものか土地利用の方向性を示すものか判然としないが、興味深い在り方をしてい

Tab. 4　上層遺構の構成比率



1　パリノ・サーヴェイ株式会社　2004「第６節　自然科学分析（放射性炭素年代測定、脂肪酸分析、リン・腐植分析）」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会，p67

2　外山秀一　2004「第５節　プラント・オパール分析」『　同　上　』，p59

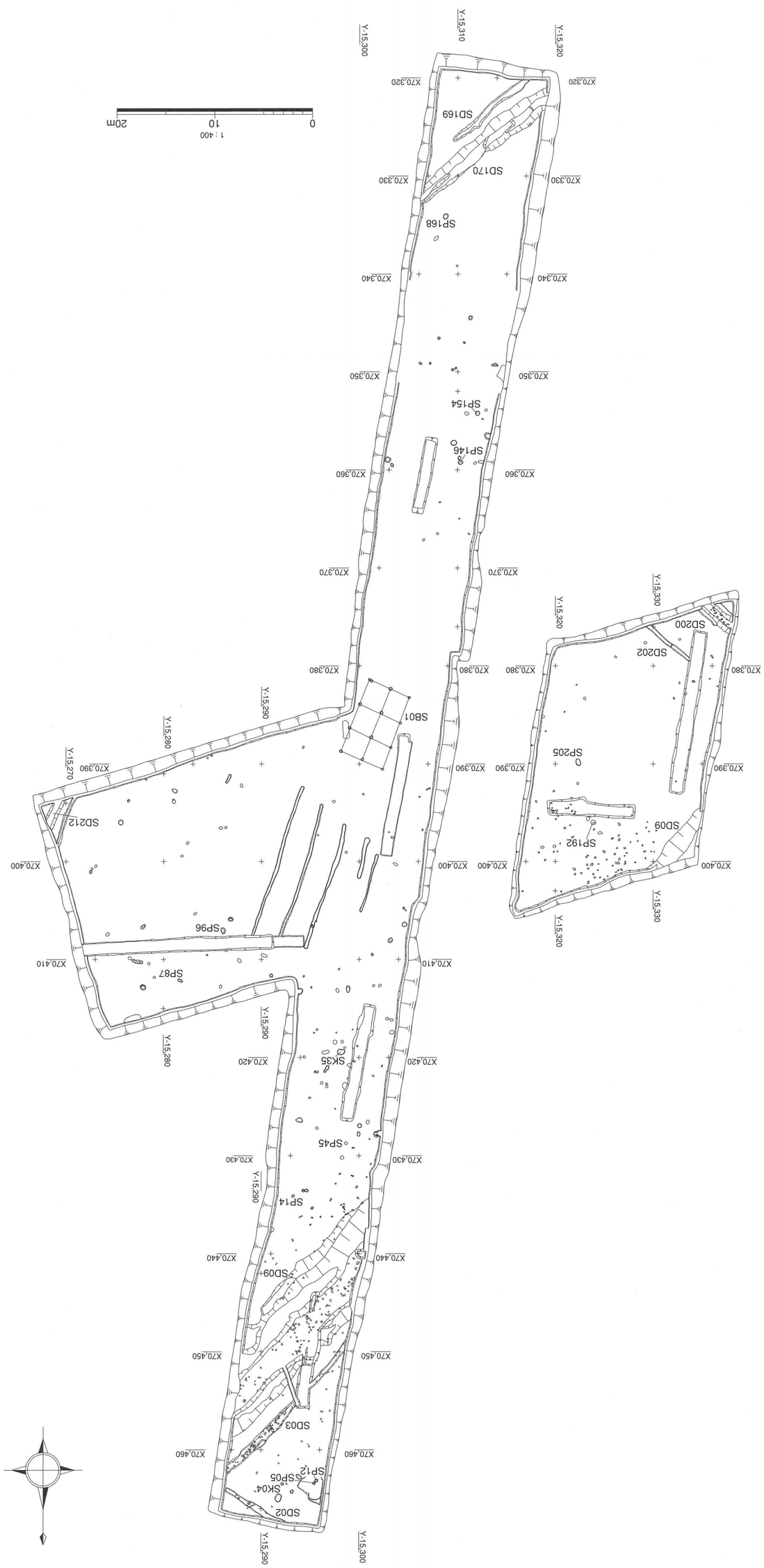


Fig. 13　上層遺構全体図（Scale＝1／400）

る。それら南北の溝群のほぼ中間位置に掘立柱建物が1棟のみ検出された。調査区幅が狭いことから調査区外に複数の建物が存在する可能性は充分考えられる。主軸は南北方向でやや東に振り、溝の主軸線に近い。掘立柱建物の柱穴以外に建物等の遺構を構成するピットはなく、調査区内にまばらにピットが散布している状況である。

掘立柱建物　(Fig. 20)

掘立柱建物は、一棟のみが検出された。今回多くの柱穴状ピットを確認した中で、柱穴の間隔、柱穴の平面・断面形状等を考慮し、掘立柱建物と判断した。

SB01 (Fig. 20)　調査区中央部に位置しており、桁行3間×梁間2間の総柱建物である。長軸7.8m×短軸4.6mで、長軸の柱間は約2.3mを測り、平面積35.4㎡である。主軸はN−20°−Eで北東方向に向く。柱穴は直径約25cm〜30cmを測り、平面プランは円形を呈している。深さ20cm〜30cmを測り、ほぼ全ての柱穴の覆土に柱根跡と考えられる層位・痕跡が認められる。検出面は実際の掘り込み面より低いため、柱穴はさらに深いものと考えられる。SP184は撹乱により半分切られている。桁行・梁間ともに柱穴が軸から多少ずれているものがあるが、掘立柱建物を構成することを考慮すると全く問題ない。

溝　(Fig. 21〜24)

上層面からは溝を13条検出した。SD02・200・202が北西〜南東方向で、その他は北東〜南東方向に延びている。遺物はSD03・09からのみ出土し、その他からは出土しなかったため、各溝の時期決定が困難である。SD09は上層遺構の代表的な遺構であるため、放射性炭素年代測定を行っている。

SD02 (Fig. 21)　北側調査区の北端に位置し、北西〜南東方向に延びる。南東側は調査区内で途切れ、北西側は調査区外に延びるため全体の様相は不明である。最大幅72cm、深さ24cmを測る比較的浅い溝である。検出面である5層より上層の4層土からの掘り込みであるため比較的新しい溝であることが窺える。

SD03 (Fig. 23・24)　北側調査区の北側に位置し、北東〜南西方向に延びる。最大幅110cm、深さ15cmを測り、比較的浅い溝である。最深部は7層土を若干掘り込んでおり礫を多含する。SD09に平行して存在することから、計画的に配置されたことやSD09との同時代性が考慮される。断面形態から南西〜北東にかけて傾斜しており、北東方向への流水が考えられる。底面からは須恵器、土師器皿、珠洲焼などが出土している。

SD09 (Fig. 23・24)　北側調査区の北側に位置し、北東〜南西方向に延びる。最大幅800cm、深さ267cmを測り、最深部では7層土を掘り込んで構築されている。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、4層土からの掘り込みであるため比較的新しい溝であることが窺える。また断面形態から2〜3回の掘り直しが行われ、その都度溝幅は縮小していったものと考えられる。両端は調査区外に延びるため全体の様相は不明であるが、西側調査区の北西隅に一部存在が確認できるため、それ以降も延びる大規模な溝であることが窺える。遺物は須恵器、土師器皿、珠洲焼、青磁碗などが出土している。

SD170 (Fig. 22)　南側調査区の南側に位置し、SD169と平行し北東〜南西方向に延びる溝

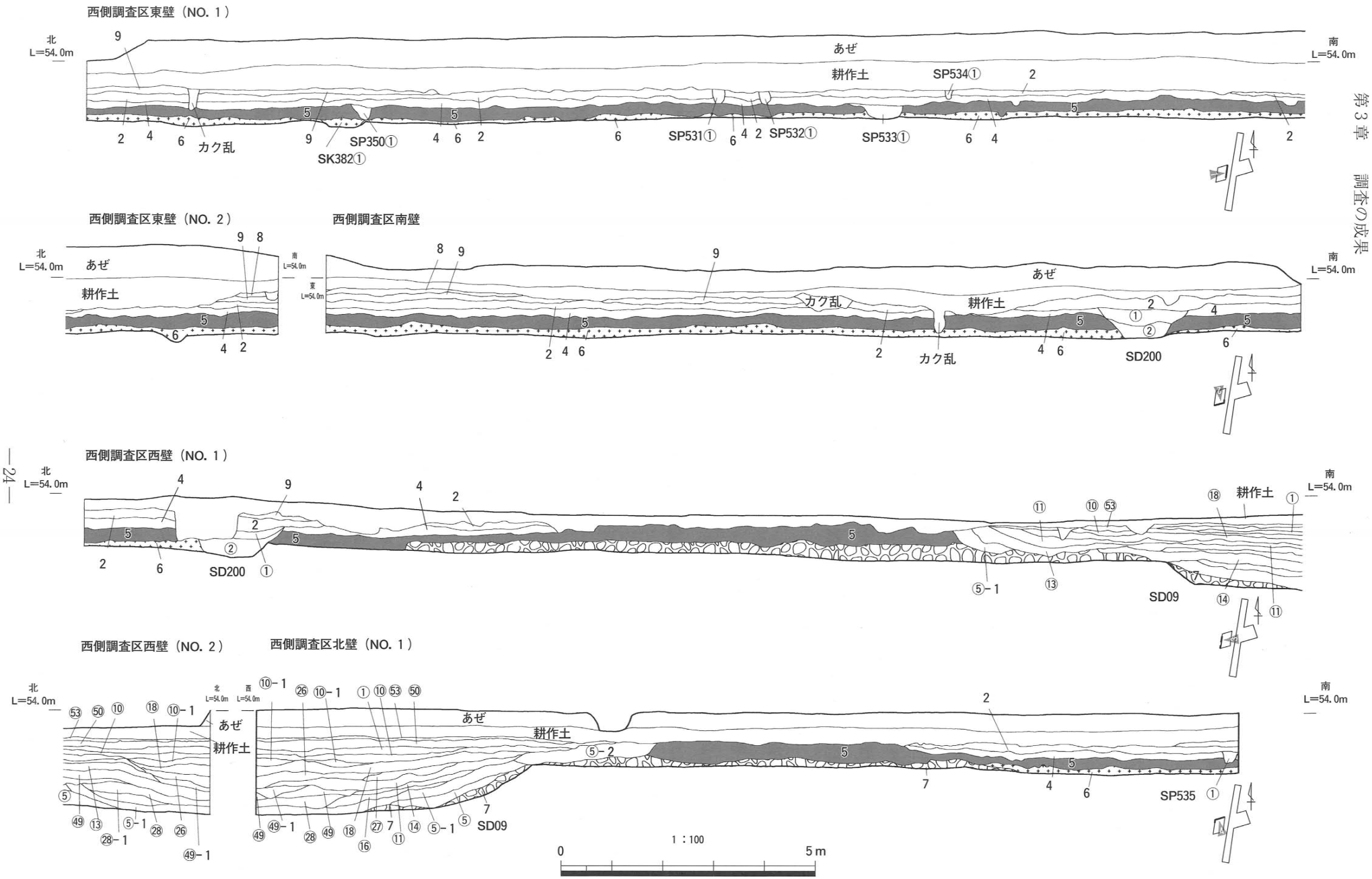
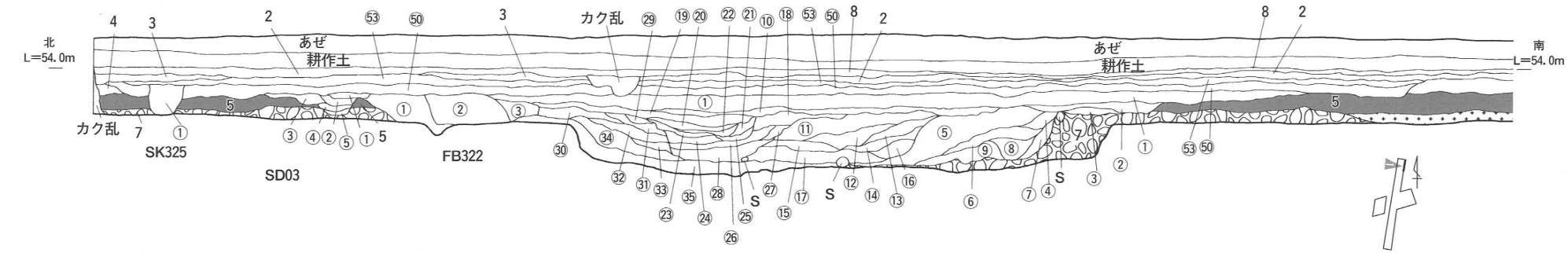
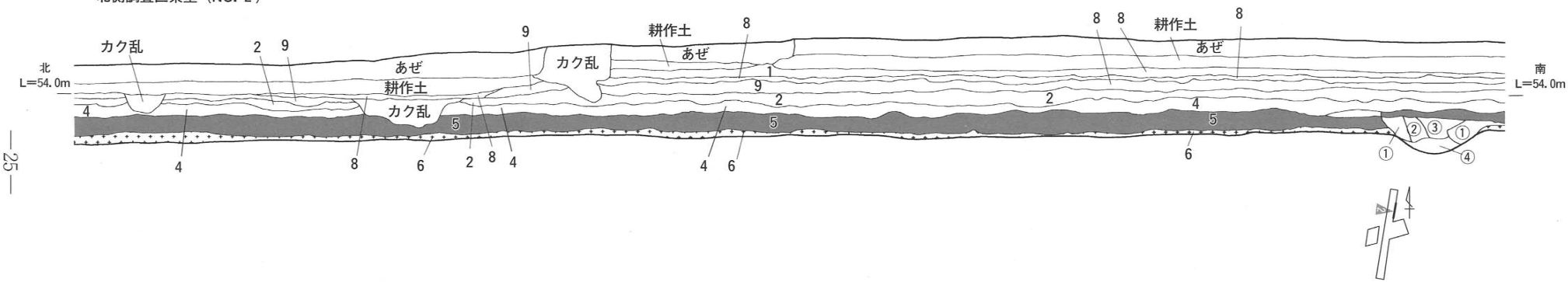


Fig. 14　西側調査区断面図

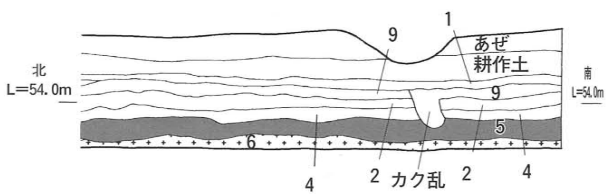
北側調査区東壁（NO. 1）



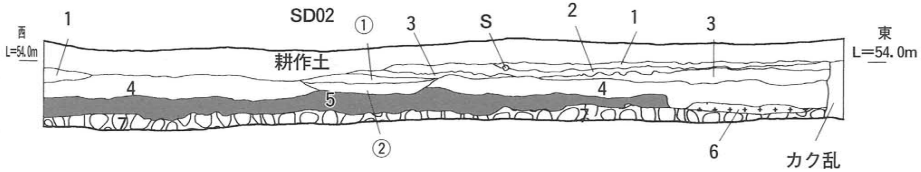
北側調査区東壁（NO. 2）



北側調査区東壁（NO. 3）



北側調査区北壁



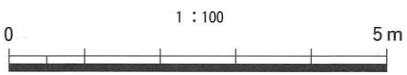


Fig. 15　北側調査区断面図（東壁・北壁）

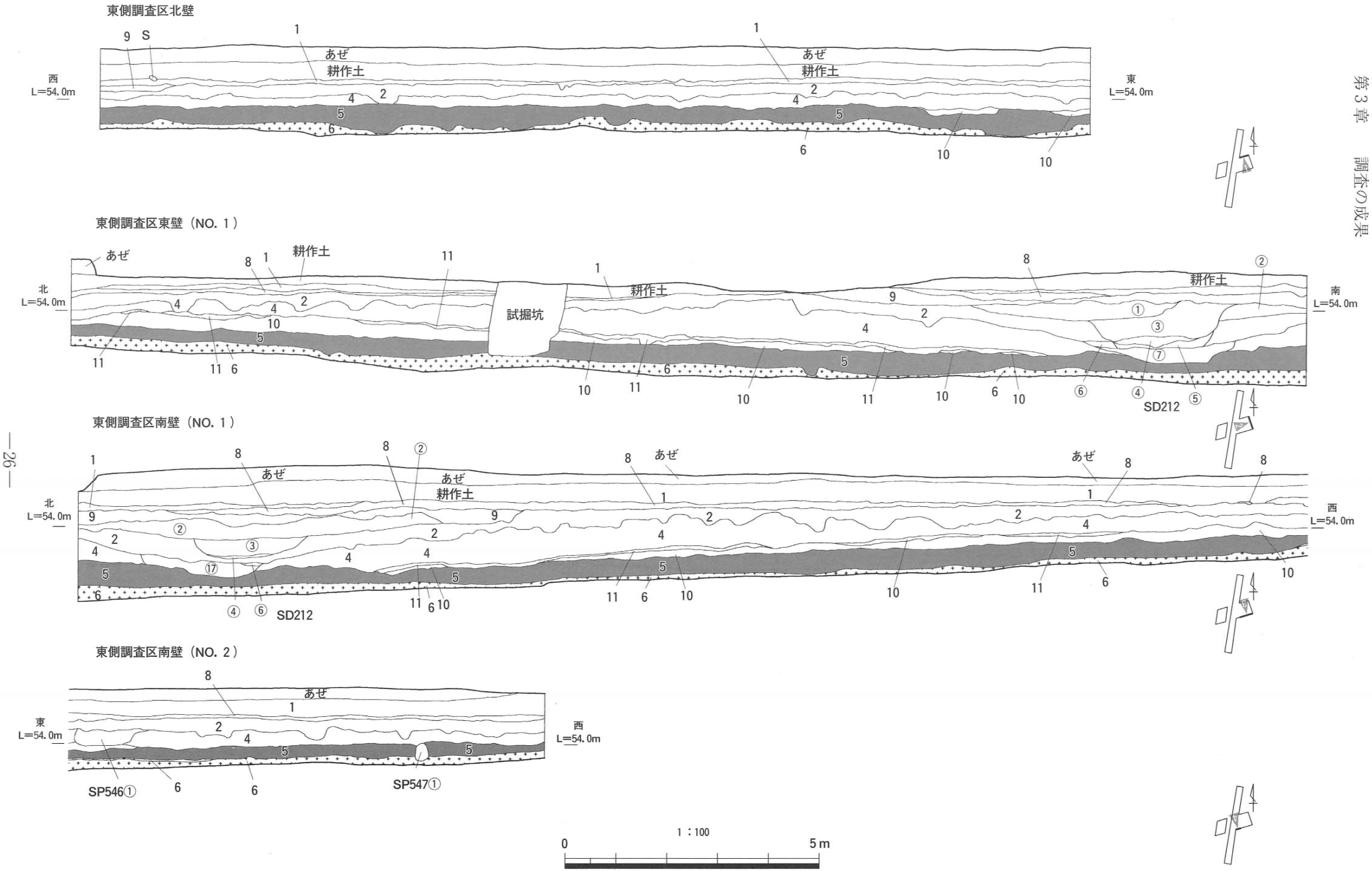


Fig. 16　東側調査区断面図

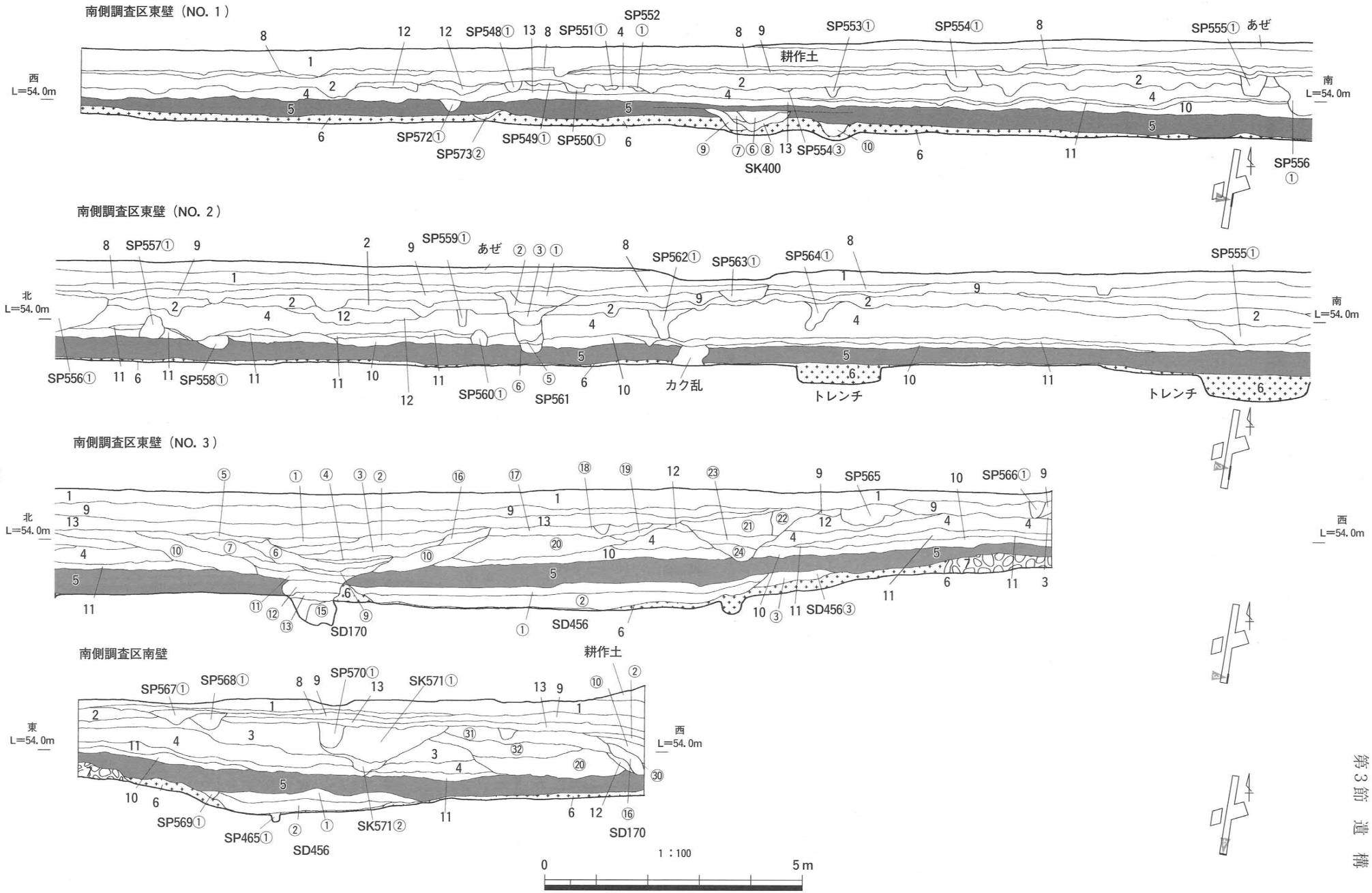


Fig. 17　南側調査区断面図（東壁・南壁）

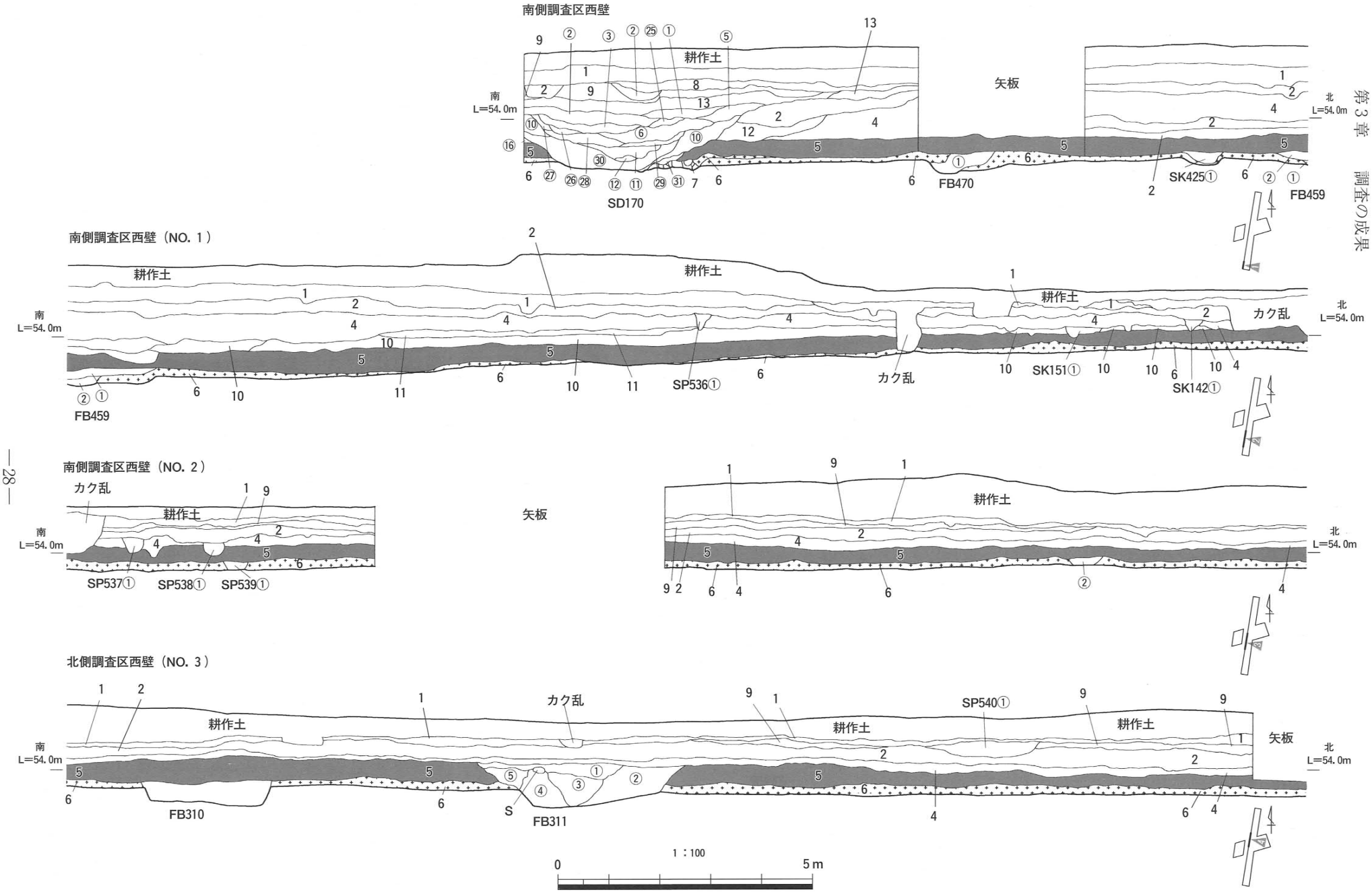
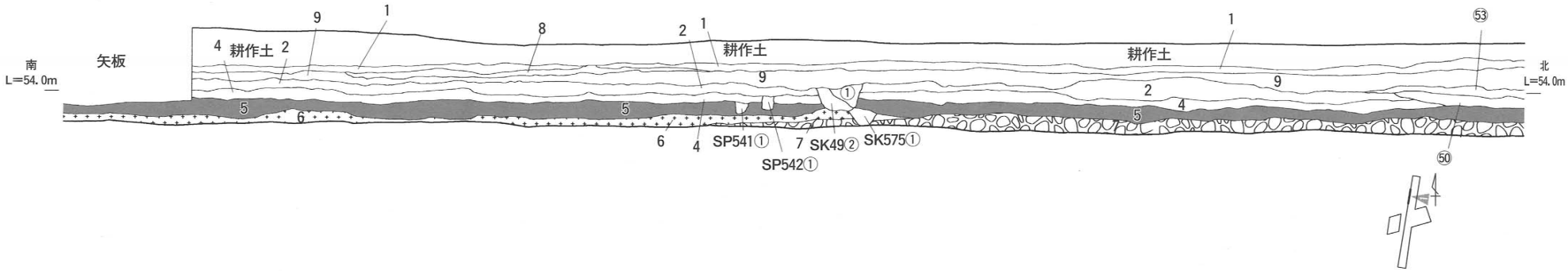
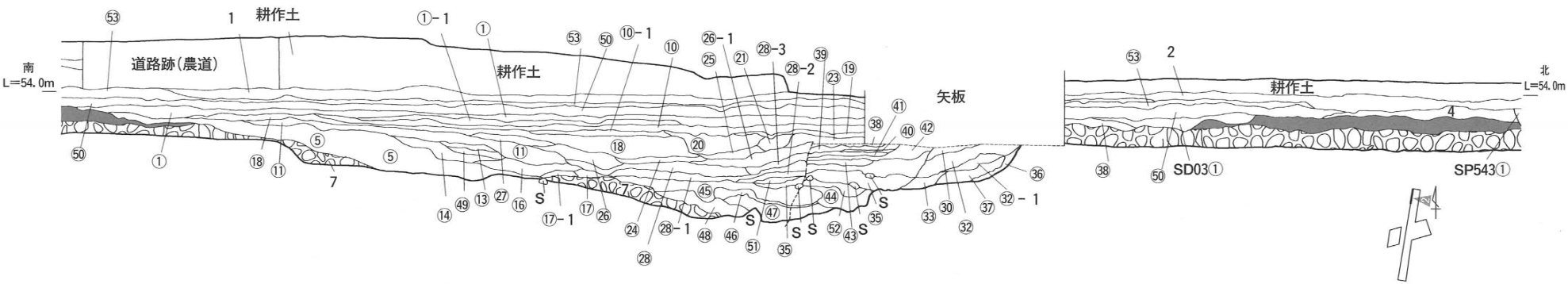


Fig. 18　北側・南側調査区断面図（西壁）

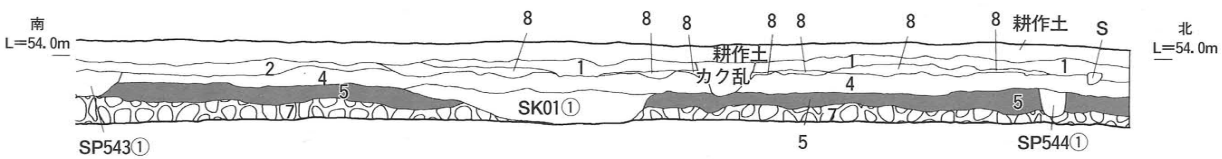
北側調査区西壁（NO. 4）



北側調査区西壁（NO. 5）



北側調査区西壁（NO. 6）



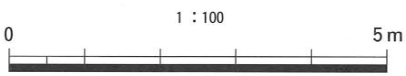


Fig. 19　北側調査区断面図（西壁）

である。最大幅867cm、最深部165cmを測り、２層土から掘り込まれており比較的新しい様相が窺える。断面形態は掘り込み面から緩やかに落ち込み、底面で急に落ち込みオーバーハングする二段階の堆積状況が窺える。覆土は砂質土が多く、しまりがあまりない。また、調査区全体を概観した結果、SD212につながる可能性が考えられる。

SD200（Fig. 21）　西側調査区の南西隅に位置し、北西～南東方向に延びる溝である。溝の両端が調査区外に延び、一部調査区にかかっている状況であるため全体の様相は不明である。最大幅200cm、深さ64cmを測り、最深部では７層土まで達しており薄く礫が広がる。断面形態は逆台形状を呈し、４層土からの掘り込みであるため比較的新しい溝であることが窺える。

SD202（Fig. 21）　西側調査区の南西に位置し、北西～南東方向に延びる溝である。南東端は調査区外に延び、北西端は試掘坑に切られ、それ以降は検出されなかった。最大幅41cm、深さ18cmの比較的細い溝である。

SD212（Fig. 21）　東側調査区の南東隅に一部かかっており、両端は調査区外に延びるため全体の様相は不明である。北東～南西方向に延びる溝であり、最大幅530cm、深さ120cmを測る。この溝の埋没過程は二時期存在し、下層は４層土から掘り込まれ溝が埋没した後、２層土が堆積し何らかの理由により２層土上面から再度掘り込まれている。また、調査区全体を概観した結果、SD170につながる可能性が窺える。

土　坑　（Fig. 25）

SK04（Fig. 25）　北側調査区の北側に位置しており、84cm×57cm、深さ12cmを測る隅丸方形土坑である。壁面は急に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。長軸は南北方向にあり、覆土は単層である。

SK35（Fig. 25）　北側調査区の南側に位置しており、77cm×54cm、深さ12cmを測る隅丸方形土坑である。壁面は若干緩やかに立ち上がり、底面は凹凸があり不整形である。長軸は東西方向にあり、覆土は２層である。

ピット　（Fig. 25）

SP05（Fig. 25）　北側調査区の北側に位置しており、SP12に隣接する。直径30cm、深さ28cmを測る円形のピットである。壁面は急に立ち上がり、中段に平場を持ち底面に至る。底面は丸みを帯びている。

SP12（Fig. 25）　北側調査区の北側に位置しており、SP05に隣接する。直径33cm、深さ14cmを測る円形のピットである。壁面は若干緩やかに立ち上がり、断面は逆台形状を呈し底面は丸みを帯びている。

SP14（Fig. 25）　北側調査区のほぼ中央に位置しており、33cm×24cm、深さ７cmを測る楕円形のピットである。壁面は若干緩やかに立ち上がり、断面は逆台形状を呈し底面はやや丸みを帯びた平底を呈する。

SP45（Fig. 25）　北側調査区の中央に位置しており、直径31cm、深さ23cmを測る円形のピットである。壁面は急に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

SP87（Fig. 25）　東側調査区の北側に位置しており、52cm×26cm、深さ11cmを測る楕円

形のピットである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

SP96（Fig. 25）　東側調査区の北側に位置しており、66cm×46cm、深さ14cm を測る楕円形のピットである。壁面は若干緩やかに立ち上がり、北側に平場を持つ。底面は丸みを帯びている。

SP146（Fig. 25）　南側調査区の中央に位置しており、51cm×41cm、深さ19cm を測る楕円形のピットである。壁面はやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

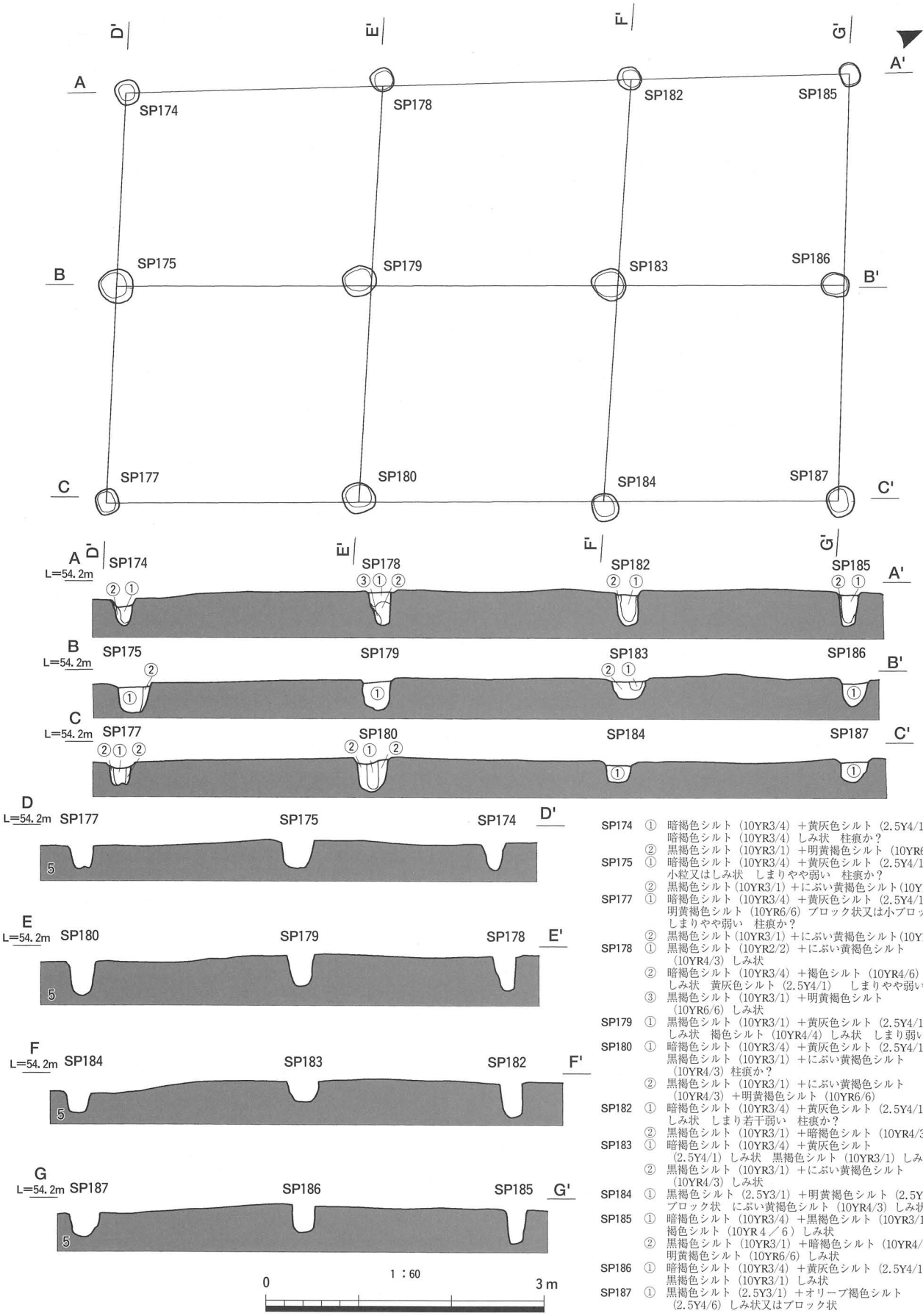
SP154（Fig. 25）　南側調査区の中央に位置しており、直径48cm、深さ14cm を測る円形のピットである。壁面は若干急に立ち上がり、北側に平場を持つ。底面は丸みを帯びている。

SP168（Fig. 25）　南側調査区の南側に位置しており、62cm×48cm、深さ27cm を測る楕円形のピットである。壁面は急に立ち上がり、断面は逆台形状を呈し底面はやや丸みを帯びた平底を呈する。

SP192（Fig. 25）　西側調査区の北側に位置しており、直径53cm、深さ11cm を測る円形のピットである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

SP205（Fig. 25）　西側調査区の中央に位置しており、72cm×46cm、深さ22cm を測る楕円形のピットである。壁面はやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

（野原・小川）



SP174 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）＋暗褐色シルト（10YR3/4）しみ状　柱痕か？
② 黒褐色シルト（10YR3/1）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）

SP175 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）小粒又はしみ状　しまりやや弱い　柱痕か？
② 黒褐色シルト(10YR3/1)＋にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)

SP177 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）明黄褐色シルト（10YR6/6）ブロック状又は小ブロック状しまりやや弱い　柱痕か？
② 黒褐色シルト(10YR3/1)＋にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)

SP178 ① 黒褐色シルト（10YR2/2）＋にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）しみ状
② 暗褐色シルト（10YR3/4）＋褐色シルト（10YR4/6）しみ状　黄灰色シルト（2.5Y4/1）　しまりやや弱い
③ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）しみ状

SP179 ① 黒褐色シルト（10YR3/1）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）しみ状　褐色シルト（10YR4/4）しみ状　しまり弱い

SP180 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）黒褐色シルト（10YR3/1）＋にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）柱痕か？
② 黒褐色シルト（10YR3/1）＋にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）

SP182 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）しみ状　しまり若干弱い　柱痕か？
② 黒褐色シルト（10YR3/1）＋暗褐色シルト（10YR4/3）

SP183 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）しみ状　黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
② 黒褐色シルト（10YR3/1）＋にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）しみ状

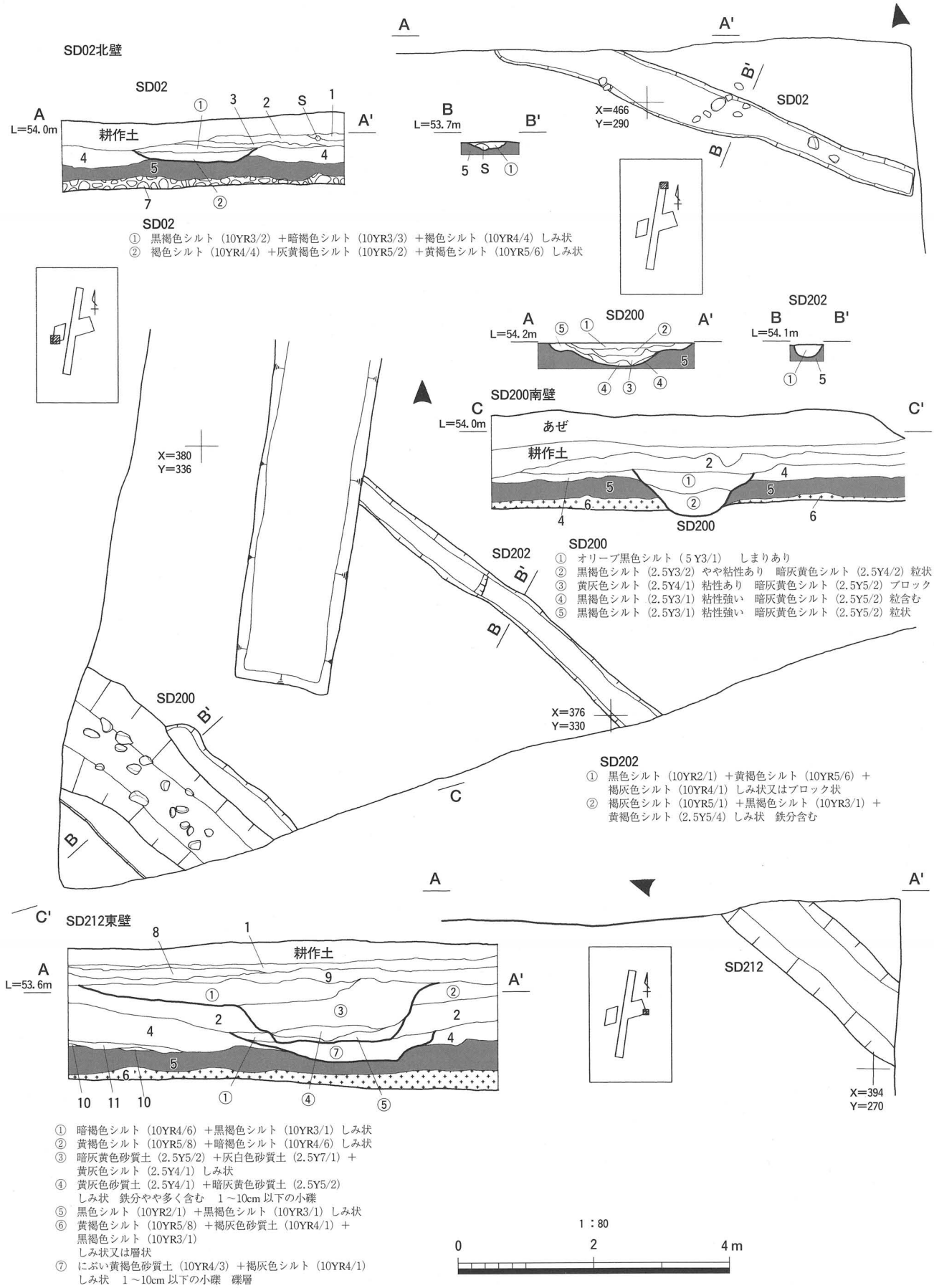
SP184 ① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋明黄褐色シルト（2.5Y6/6）ブロック状　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）しみ状

SP185 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黒褐色シルト（10YR3/1）＋褐色シルト（10YR４／６）しみ状
② 黒褐色シルト（10YR3/1）＋暗褐色シルト（10YR4/3）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）しみ状

SP186 ① 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状

SP187 ① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋オリーブ褐色シルト（2.5Y4/6）しみ状又はブロック状

Fig. 20　上層遺構図　SB01（Scale＝１／60）



SD02

① 黒褐色シルト（10YR3/2）＋暗褐色シルト（10YR3/3）＋褐色シルト（10YR4/4）しみ状
② 褐色シルト（10YR4/4）＋灰黄褐色シルト（10YR5/2）＋黄褐色シルト（10YR5/6）しみ状

SD200

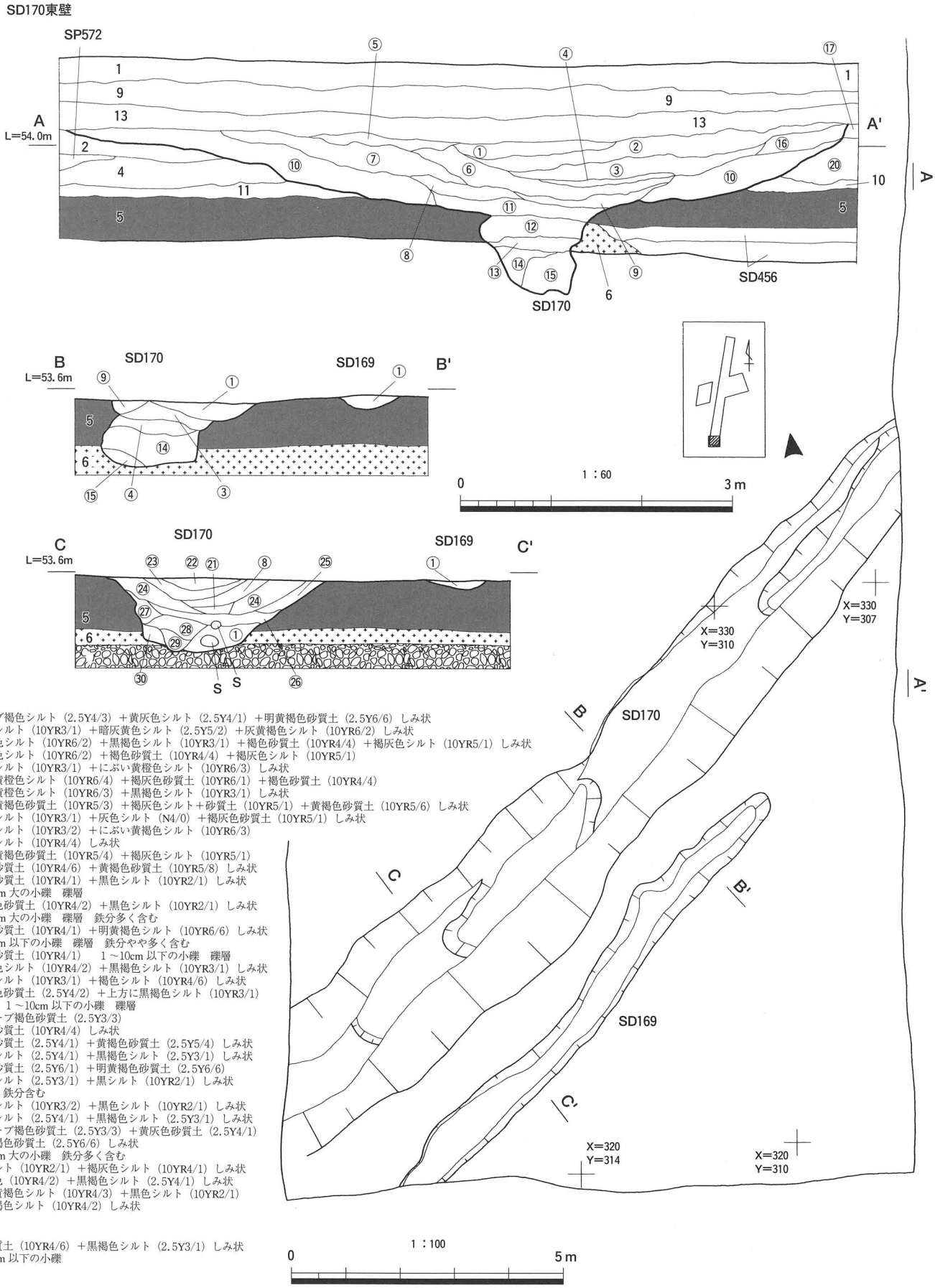
① オリーブ黒色シルト（5Y3/1）　しまりあり
② 黒褐色シルト（2.5Y3/2）やや粘性あり　暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）粒状
③ 黄灰色シルト（2.5Y4/1）粘性あり　暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）ブロック
④ 黒褐色シルト（2.5Y3/1）粘性強い　暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）粒含む
⑤ 黒褐色シルト（2.5Y3/1）粘性強い　暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）粒状

SD202

① 黒色シルト（10YR2/1）＋黄褐色シルト（10YR5/6）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状又はブロック状
② 褐灰色シルト（10YR5/1）＋黒褐色シルト（10YR3/1）＋黄褐色シルト（2.5Y5/4）しみ状　鉄分含む

① 暗褐色シルト（10YR4/6）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
② 黄褐色シルト（10YR5/8）＋暗褐色シルト（10YR4/6）しみ状
③ 暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）＋灰白色砂質土（2.5Y7/1）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）しみ状
④ 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）＋暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）しみ状　鉄分やや多く含む　1～10cm 以下の小礫
⑤ 黒色シルト（10YR2/1）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
⑥ 黄褐色シルト（10YR5/8）＋褐灰色砂質土（10YR4/1）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状又は層状
⑦ にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状　1～10cm 以下の小礫　礫層

Fig. 21　上層遺構図　溝（Scale＝1／80）



SD170

① オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）＋明黄褐色砂質土（2.5Y6/6）しみ状
② 黒褐色シルト（10YR3/1）＋暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）＋灰黄褐色シルト（10YR6/2）しみ状
③ 灰黄褐色シルト（10YR6/2）＋黒褐色シルト（10YR3/1）＋褐色砂質土（10YR4/4）＋褐灰色シルト（10YR5/1）しみ状
④ 灰黄褐色シルト（10YR6/2）＋褐色砂質土（10YR4/4）＋褐灰色シルト（10YR5/1）
⑤ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋にぶい黄橙色シルト（10YR6/3）しみ状
⑥ にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）＋褐灰色砂質土（10YR6/1）＋褐色砂質土（10YR4/4）
⑦ にぶい黄橙色シルト（10YR6/3）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
⑧ にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）＋褐灰色シルト＋砂質土（10YR5/1）＋黄褐色砂質土（10YR5/6）しみ状
⑨ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋灰色シルト（N4/0）＋褐灰色砂質土（10YR5/1）しみ状
⑩ 黒褐色シルト（10YR3/2）＋にぶい黄褐色シルト（10YR6/3）
＋褐色シルト（10YR4/4）しみ状
⑪ にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）＋褐灰色シルト（10YR5/1）
＋褐色砂質土（10YR4/6）＋黄褐色砂質土（10YR5/8）しみ状
⑫ 褐灰色砂質土（10YR4/1）＋黒色シルト（10YR2/1）しみ状
１～５cm 大の小礫　礫層
⑬ 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）＋黒色シルト（10YR2/1）しみ状
１～５cm 大の小礫　礫層　鉄分多く含む
⑭ 褐灰色砂質土（10YR4/1）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）しみ状
１～10cm 以下の小礫　礫層　鉄分やや多く含む
⑮ 褐灰色砂質土（10YR4/1）　１～10cm 以下の小礫　礫層
⑯ 灰黄褐色シルト（10YR4/2）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
⑰ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋褐色シルト（10YR4/6）しみ状
⑳ 暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）＋上方に黒褐色シルト（10YR3/1）
しみ状　１～10cm 以下の小礫　礫層
㉑ 暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）
＋褐色砂質土（10YR4/4）しみ状
㉒ 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）＋黄褐色砂質土（2.5Y5/4）しみ状
㉓ 黄灰色シルト（2.5Y4/1）＋黒褐色シルト（2.5Y3/1）しみ状
黄灰色砂質土（2.5Y6/1）＋明黄褐色砂質土（2.5Y6/6）
㉔ 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋黒シルト（10YR2/1）しみ状
混合土　鉄分含む
㉕ 黒褐色シルト（10YR3/2）＋黒色シルト（10YR2/1）しみ状
㉖ 黄灰色シルト（2.5Y4/1）＋黒褐色シルト（2.5Y3/1）しみ状
㉗ 暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）＋黄灰色砂質土（2.5Y4/1）
＋明黄褐色砂質土（2.5Y6/6）しみ状
１～５cm 大の小礫　鉄分多く含む
㉘ 黒色シルト（10YR2/1）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
㉙ 灰黄褐色（10YR4/2）＋黒褐色シルト（2.5Y4/1）しみ状
㉚ にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）＋黒色シルト（10YR2/1）
＋灰黄褐色シルト（10YR4/2）しみ状

SD169

① 褐色砂質土（10YR4/6）＋黒褐色シルト（2.5Y3/1）しみ状
１～５cm 以下の小礫

Fig. 22　上層遺構図　溝（平面：Scale＝１／100、断面：Scale＝１／60）

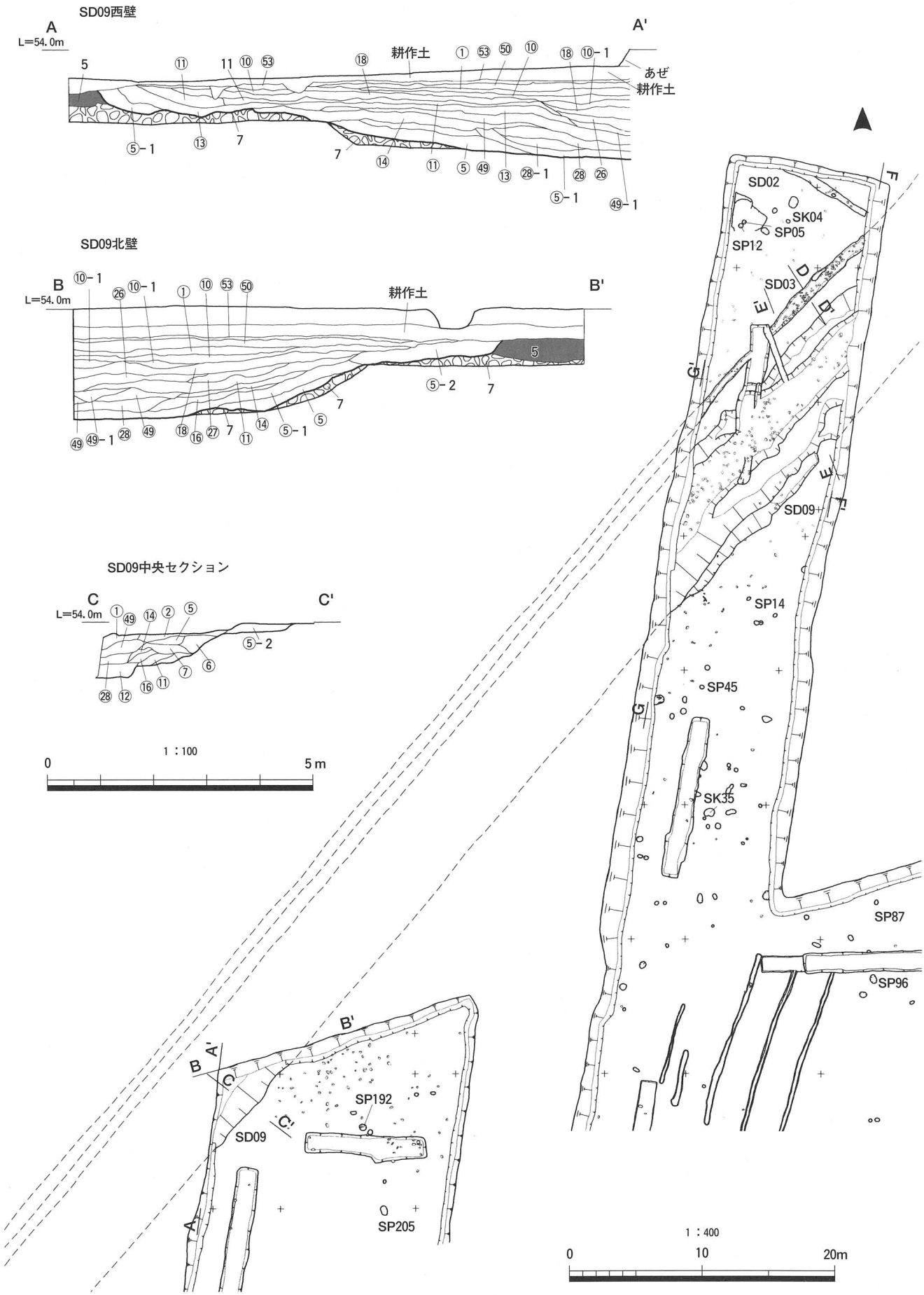


Fig. 23　上層遺構図（平面 Scale＝1／400、断面 Scale＝1／100）

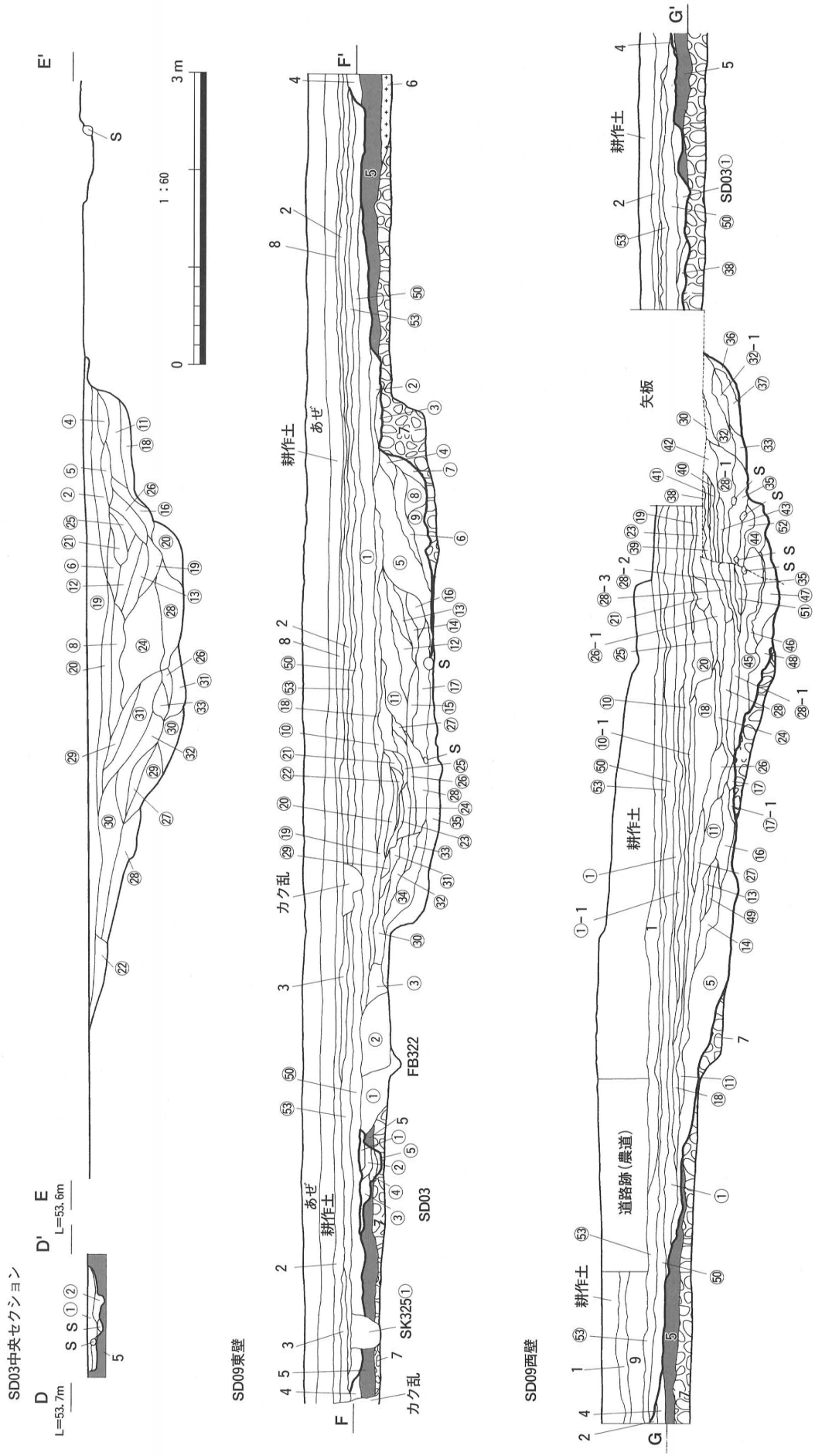


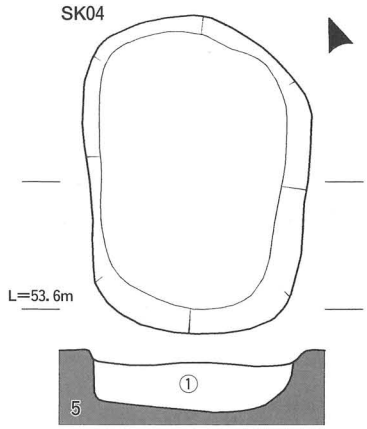
Fig. 24　上層遺構図　溝（Scale＝１／100）

SD03
① 黒褐色シルト（7.5YR3/1）＋黄褐色シルト（10YR5/6）＋暗褐色シルト（10YR3/4）しみ状又は小ブロック状
② 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状　暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）＋褐灰色砂質土（10YR4/1）しみ状
③ 褐灰色砂質土（10YR4/1）＋黒褐色シルト（10YR3/2）小ブロック状　明褐色砂質土（7.5YR5/6）しみ状　鉄分多く含む
④ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
⑤ 褐色シルト（10YR4/4）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状

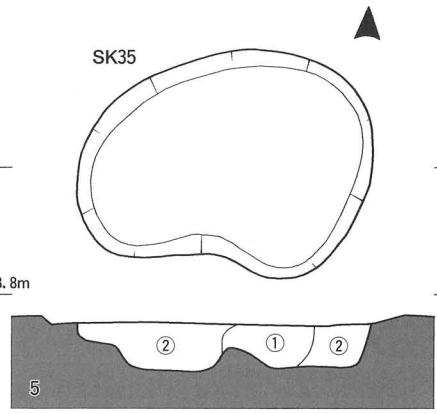
SD09
① にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）＋黒褐色シルト（10YR3/2）明黄褐色シルト（10YR5/6）しみ状　炭化物
①－1　褐灰色シルト（10YR4/1）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状　炭化物
② 黒褐色シルト（10YR3/2）＋褐色シルト（10YR4/4）＋明黄褐色シルト（10YR5/6）＋灰黄褐色シルト（10YR4/2）
③ 褐色シルト（10YR4/4）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状又は小ブロック状
④ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋灰黄褐色シルト（10YR4/2）しみ状
⑤ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
⑤－1　黒色シルト（10YR2/1）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状　1～5cm 大の小礫
⑤－2　黒褐色シルト（10YR3/1）＋暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）しみ状　1～10cm 大の小礫
⑥ 黒色シルト（10YR2/1）＋黒褐色シルト（10YR3/2）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
⑦ 暗褐色シルト（10YR3/3）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
⑧ 黒褐色シルト（10YR3/2）＋黒色シルト（10YR2/1）しみ状
⑨ にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
⑩ 暗褐色シルト（10YR3/3）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状　明黄褐色シルト（10YR5/6）＋褐灰色シルト（10YR4/1）
⑪ 明黄褐色砂質土（10YR6/6）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状　褐灰色砂質土（10YR4/1）＋にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）しみ状　鉄分含む
⑫ 暗褐色シルト（10YR3/4）＋にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）＋にぶい黄色（2.5Y6/4）　鉄分含む
⑬ にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）＋黒褐色シルト（10YR3/1）＋褐灰色シルト（10YR5/1）　鉄分含む
⑭ 明黄褐色シルト（10YR6/6）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状又は小ブロック状　鉄分含む
⑭－1　黒褐色シルト（10YR3/1）＋にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
⑮ 灰黄色シルト（2.5Y6/2）＋にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）しみ状　鉄分含む
⑯ 黄褐色砂質土（10YR5/6）＋暗褐色砂質土（10YR3/4）しみ状　黒褐色シルト（10YR3/1）　鉄分含む
⑰ 灰色砂質土（N5/0）＋黄灰色砂質土（2.5Y6/1）＋にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）しみ状　鉄分含む
⑰－1　灰色砂質土（N5/0）＋黄灰色砂質土（2.5Y6/1）しみ状
⑱ 浅黄色シルト（2.5Y7/4）＋オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/4）＋暗褐色シルト（10YR3/4）しみ状　黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状　鉄分含む
⑲ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状　明黄褐色シルト（2.5Y7/6）ブロック状
⑳ 黒褐色シルト（2.5Y3/2）＋褐灰色シルト（10YR5/1）＋明黄褐色シルト（2.5Y7/6）鉄分含む
㉑ 浅黄色シルト（2.5Y7/4）＋オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/4）しみ状　黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状　鉄分含む
㉒ 浅黄色シルト（2.5Y7/4）＋オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/4）しみ状　黒褐色シルト（10YR3/1）鉄分含む
㉓ 明黄褐色シルト（2.5Y7/6）＋黒褐色シルト（10YR3/1）＋黄灰色シルト（2.5Y5/1）＋褐灰色砂質土（10YR5/1）
㉔ 明黄褐色シルト（2.5Y7/6）＋暗褐色シルト（10YR3/4）＋黄灰色シルト（2.5Y5/1）＋褐灰色砂質土（10YR5/1）
㉕ 褐灰色砂質土（10YR5/1）＋にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）＋明黄褐色砂質土（2.5Y7/6）しみ状
㉖ 灰黄色シルト（2.5Y6/2）＋にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）＋明黄褐色砂質土（2.5Y7/6）しみ状
㉖－1　灰黄色砂質土（2.5Y6/2）＋黄褐色砂質土（2.5Y5/3）＋褐灰色シルト（10YR5/1）しみ状
㉗ 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）＋にぶい黄色砂質土（10YR6/4）しみ状
㉘ 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）＋暗褐色砂質土（10YR3/4）＋明黄褐色砂質土（2.5Y6/6）＋黄灰色砂質土（2.5Y4/1）
㉘－1　黄灰色砂質土（2.5Y6/1）＋黄褐色砂質土（2.5Y5/3）しみ状　暗褐色砂質土（10YR3/4）＋黒褐色砂質土（10YR3/2）
㉘－2　明黄褐色砂質土（2.5Y7/6）＋黄灰色砂質土（2.5Y6/1）しみ状　鉄分含む
㉘－3　黄灰色砂質土（2.5Y6/1）＋灰黄褐色砂質土（10YR6/2）しみ状
㉙ にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状
㉚ 暗褐色シルト（10YR3/3）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状又は小ブロック状
㉛ 暗褐色シルト（10YR3/3）＋黒褐色シルト（10YR3/2）＋黄褐色シルト（10YR5/6）しみ状
㉜ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状　明黄褐色シルト（10YR6/6）しみ状
㉜－1　黒色シルト（10YR2/1）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状
㉝ 褐色シルト（10YR4/4）＋黒褐色シルト（10YR3/1）ブロック状　明黄褐色砂質土（10YR6/6）しみ状
㉞ 黒色シルト（10YR2/1）＋褐色シルト（10YR4/4）しみ状
㉟ 暗褐色シルト（10YR3/4）＋黒色シルト（10YR2/1）しみ状　1～10cm 以下の小礫
㊱ 黄褐色シルト（10YR5/6）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状　1～5cm 以下の小礫
㊲ 明黄褐色シルト（10YR6/6）＋褐色シルト（10YR4/4）しみ状　黒褐色シルト（10YR3/1）
㊳ 暗褐色シルト（10YR3/3）＋黒褐色シルト（10YR3/2）　浅黄橙色シルト（10YR8/3）ブロック状
㊴ 浅黄橙色シルト（10YR8/3）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状　鉄分含む
㊵ 褐灰色シルト（10YR5/1）＋暗褐色シルト（10YR3/3）浅黄橙色シルト（10YR8/3）しみ状　鉄分含む
㊶ 褐灰色砂質土（10YR6/1）＋灰白色砂質土（10YR7/1）＋褐色砂質土（10YR4/4）しみ状　鉄分含む
㊷ 灰白色シルト（2.5Y7/1）＋黄灰色砂質土（2.5Y6/1）＋黒褐色シルト（2.5Y3/1）しみ状　鉄分含む
㊸ 灰白色砂質土（2.5Y7/1）＋灰白色シルト（2.5Y7/1）しみ状　黄灰色砂質土（2.5Y5/1）＋褐色砂質土（10YR4/4）
㊹ 黒色シルト（10YR2/1）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状
㊺ 褐色砂質土（10YR4/4）1～20cm 大の礫　礫層　鉄分含む
㊻ 褐灰色シルト（10YR4/1）＋黄褐色シルト（10YR5/6）しみ状　炭化物
㊼ 黄褐色砂質土（10YR5/6）（粒子の粗い砂質土）黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状　1～10cm 以下の小礫
㊽ 黒色シルト（10YR2/1）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状
㊾ にぶい黄橙色（10YR6/4）＋黒褐色シルト（10YR3/1）　にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）しみ状
㊾－1　にぶい黄橙色（10YR6/4）＋にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）しみ状
㊿ 暗褐色シルト（10YR4/4）＋黄灰色シルト（2.5Y5/1）しみ状　黒褐色シルト（10YR3/2）
51 褐灰色砂質土（10YR6/1）＋暗褐色砂質土（10YR3/3）浅黄橙色砂質土（10YR8/4）
52 明黄褐色砂質土（10YR6/6）＋褐灰色砂質土（10YR5/1）しみ状　1～10cm 大の小礫
53 褐色シルト（10YR4/4）＋明黄褐色砂質土（10YR6/8）＋褐灰色砂質土（10YR6/1）
54 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
55 にぶい黄橙色シルト（10YR5/3）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
56 黒褐色シルト（10YR2/2）＋にぶい黄橙色（10YR6/4）しみ状又は小ブロック状
57 明黄褐色シルト（10YR6/6）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
58 にぶい黄橙色シルト（10YR7/4）＋褐灰色砂質土（10YR6/1）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
59 にぶい黄橙色シルト（10YR7/4）＋褐灰色砂質土（10YR6/1）＋黄褐色砂質土（10YR5/6）ブロック状
60 黄褐色シルト（10YR5/6）＋褐灰色シルト（10YR4/1）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状
61 黒褐色シルト（10YR3/1）＋明黄褐色シルト（10YR7/6）しみ状
62 褐灰色シルト（10YR5/1）＋にぶい黄橙色シルト（10YR7/3）＋褐灰色シルト（10YR4/1）しみ状
63 にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）＋褐灰色砂質土（10YR4/1）しみ状
64 黒褐色シルト（10YR3/1）＋にぶい黄橙色シルト（10YR6/3）しみ状
65 褐灰色砂質土（10YR6/1）＋灰白色シルト（2.5Y8/2）しみ状
66 褐灰色砂質土（10YR5/1）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）しみ状
67 黄褐色シルト（10YR5/6）＋にぶい黄橙色シルト（10YR7/4）＋黒褐色シルト（10YR3/2）しみ状
68 にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）＋褐灰色砂質土（10YR6/1）しみ状
69 褐灰色砂質土（10YR6/1）＋にぶい黄橙色シルト（10YR7/4）しみ状
70 灰白色砂質土（10YR7/1）＋褐白色砂質土（10YR6/1）＋褐灰白砂質土（10YR4/1）しみ状
71 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）しみ状又はブロック状1～5cm 大の小礫
72 黒褐色シルト（2.5Y3/2）＋明黄褐色シルト（2.5Y6/6）しみ状　1～5cm 大の小礫
73 明黄褐色シルト（10YR6/6）＋黒褐色シルト（2.5Y3/1）しみ状
74 黒褐色シルト（10YR3/1）＋灰黄褐色シルト（10YR5/2）
75 黒色シルト（10YR2/1）＋明黄褐色シルト（10YR6/6）
76 明黄褐色シルト（10YR7/6）＋黒色シルト（10YR2/1）
77 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）＋黄褐色砂質土（2.5Y5/4）＋黒褐色シルト（10YR2/2）しみ状

FB322
① 黒褐色シルト（10YR3/2）＋黒色シルト（10YR2/1）しみ状
② 暗褐色シルト（10YR3/3）＋黒褐色シルト（10YR3/1）しみ状　1～10cm 大の礫　礫層
③ 黒褐色シルト（10YR3/1）＋暗褐色シルト（10YR3/3）しみ状

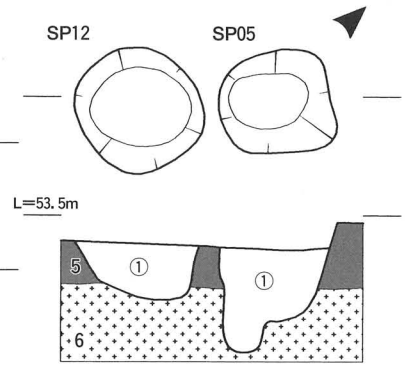
SK325
① 褐灰色シルト（10YR5/1）＋黒褐色シルト（10YR3/2）＋褐色シルト（10YR4/4）しみ状又は小ブロック状



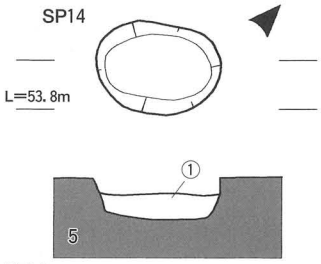
SK04
① オリーブ黒色シルト（2.5Y3/2）小礫をわずかに含んでいる
しまりが強く、粒子が細かい



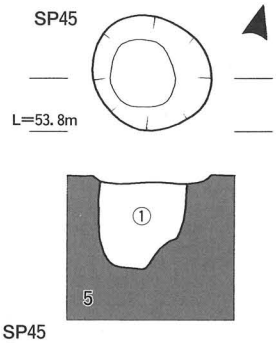
SK35
① オリーブ黒色シルト（５Y3/2）
② 黒褐色シルト（2.5Y3/1）やや粘性あり
灰オリーブ色シルト（５Y5/3）ブロック含む



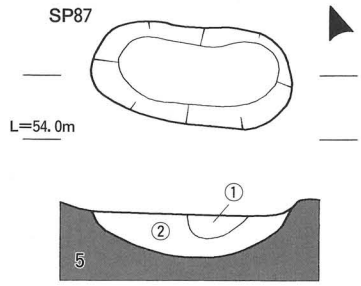
SP12 ① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）粘性強い
SP05 ① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）粘性強い
礫をわずかに含む



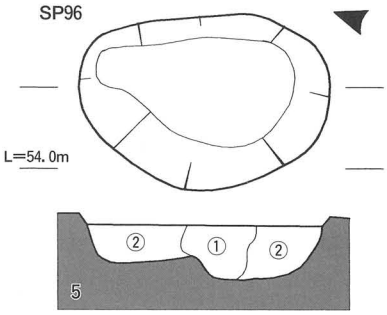
SP14
① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）砂礫微量含む



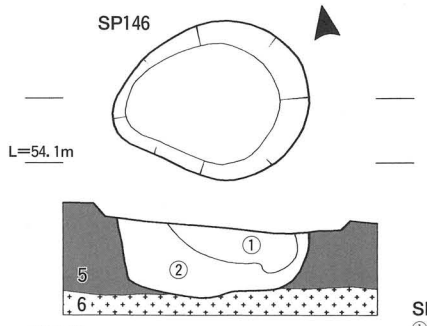
SP45
① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）しまり強い



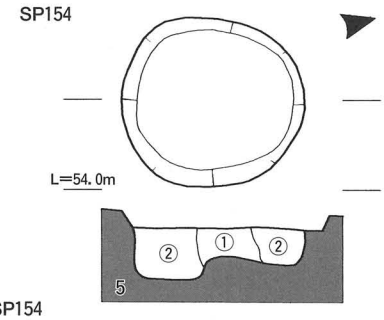
SP87
① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋黄褐色シルト（2.5Y5/6）しみ状
② オリーブ黒色シルト（５Y3/1）＋黄褐色シルト（2.5Y5/4）しみ状



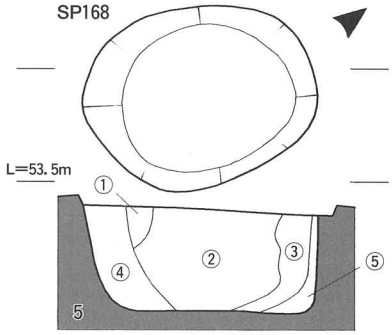
SP96
① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋にぶい黄（2.5Y6/4）しみ状
② 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋にぶい黄（2.5Y6/4）
しみ又は小ブロック状



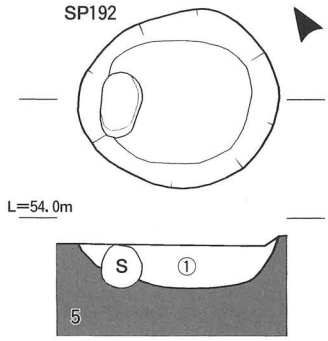
SP146
① 黒褐色シルト（2.5Y3/2）＋にぶい黄色シルト
（2.5Y6/3）ブロック状　しまり強い
② 黒褐色シルト（2.5Y3/1）黒色がかる



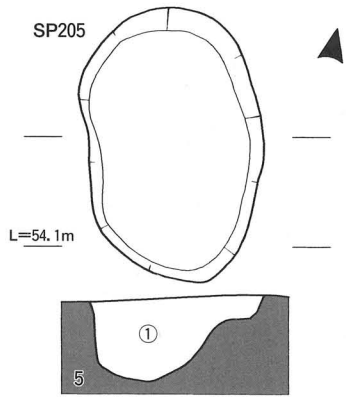
SP154
① 黒色シルト（2.5Y2/1）＋黒褐色シルト（2.5Y3/2）
ブロック　灰黄色シルト（2.5Y6/2）ブロック　やや粘性あり
② 黒褐色シルト（2.5Y3/2）＋黄灰色シルト（2.5Y6/2）ブロック



SP168
① オリーブ黒色シルト（5Y3/1）＋にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）
② 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋黄灰色シルト（2.5Y4/1）＋
黄褐色シルト（2.5Y5/6）しみ状
③ 明黄褐色シルト（10YR7/6）層界に黒褐色シルト
（2.5Y3/1）しみ状　やや砂性あり
④ 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋暗オリーブ褐色シルト
（2.5Y3/3）やや粘性あり
⑤ 黒褐色シルト（2.5Y3/1）＋オリーブ褐色シルト
（2.5Y4/6）しみ状



SP192
① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）黒色がかる　やや粘性あり



SP205
① 黒褐色シルト（2.5Y3/1）黒色がかる
やや粘性あり

Fig. 25　上層遺構図　土坑・ピット（Scale＝１／20）

（2）下層遺構　　(Fig. 26, Tab. 5)

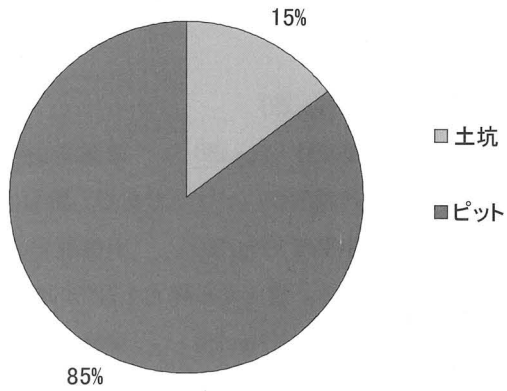
下層の概要　黒色の有機質層である遺物包含層（5層）直下で下層遺構面を確認した。調査区北半では、遺物包含層中に多量の礫が含まれており、集中的に検出された。検出状況から河川運搬物等の可能性も考慮したが、5層中に人頭大の礫以外に洪水堆積物のような層位が存在せず、完全に黒色有機質層の中にあって遺物と同じように埋没している状況から、その可能性は低いのではないかと思う。礫群中に打製石斧をはじめ土器片が散在することから、むしろ人為的に運び込まれたもの（打製石斧の材料となりうる礫であるため）の可能性が高いと考えられる。破砕した礫もいくつか見受けられ、1個の大きな礫から打製石斧の素材としていくつかの剥片を剥ぎ取ったような母岩らしき礫も検出したが、果たしてそのような役割をもった礫か確証はない[1]。

また、その礫群中に打製石斧や土器が多く検出されたことや、遺構内から一括出土した土器が5層中から繋がって検出されたこと（SP353）から、下層遺構面として認識しえたレベルより上層、つまり遺物包含層中に縄文期の旧地表面が存在すると考えるほうが妥当であるように思えてならない。前年度調査の放射性炭素年代測定では、5層は約2100から3300年前の値を示している[2]。同様に今回も5層、SP415、SK425、SK457、SK475の試料で年代測定を行っている（第3章第5節）。測定結果は出土遺物の時期とよく整合している。

遺構の構成　下層遺構では、大半がピットで占められ、土坑と思われるものは20基ほどである。竪穴住居等の住居に関する遺構は全く検出されなかった。ピットは調査区全体で検出されている。調査区中央部では久泉遺跡では初めて打製石斧が遺構内から出土したSP265、調査区北側では破砕した礫が大量に出土したSP417が検出されている。また、稀に覆土に焼土を多く含む土坑・ピットも見受けられた。同じ覆土中には炭も多く含んでいたことから、簡易な炉である可能性を考え、周辺に付属施設を検出すべく丹念に調査したが、発見することはできなかった。各地区にピットが密集している範囲も存在するが、規則性は見られない。西側調査区のSP353では、調査区内で唯一、縄文土器が一括出土している。

また、調査区中央部において昨年の発掘調査と同様に、風倒木痕が集中的に検出された。自然植生のものと考えられる。風倒木は樹根が周辺の土を巻き込みながら倒れると想定している。その想定に基づいて観察すると、断面からは6・7層（地山）や5層が逆転していたり、激しく混ざり合ったりしており、5層堆積後の層位が断面に現れないことから、下層遺構と同時期あるいは近い時期に存在したものと判断した。

Tab. 5　下層遺構の構成比率



1　山本正敏氏（富山県埋蔵文化財センター）に実見して頂いたところ、「打製石斧を剥ぎ取った母岩という感じではないが、断定的に否定することもできない」とのご教示を得た。

2　パリノ・サーヴェイ株式会社　2004「第6節　自然科学分析（放射性炭素年代測定、脂肪酸分析、リン・腐植分析）」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会，p67

土　坑　(Fig. 28)

土坑の平面プランは円形と楕円形のものがあった。すべての遺構に当てはまることであるが、出土遺物量がわずかであり、年代・性格がはっきりするものは少ない。土坑は南側に集中して存在し、覆土に炭化物、焼土を多含するものも多く存在した。

SK421（Fig. 28）　南側調査区の南側に位置し、直径120cm、深さ18cm を測る円形の土坑である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。断面形態は逆台形状を呈し、覆土中からは炭化物・焼土が出土している。

SK425（Fig. 28）　南側調査区の南側に位置し、237cm×108cm、深さ24cm を測る楕円形の土坑であり、西側は調査区外に広がる。壁面は若干緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。遺構内には、大きさ40cm×20cm、厚さ20cm の立石と考えられるものが西側に若干立ち気味に存在している。また覆土中から炭化物が出土している。炭化物は年代測定(第３章５節)を行った。

SK457（Fig. 28）　南側調査区の南側に位置し、105cm×60cm、深さ18cm を測る楕円形の土坑である。壁面は若干緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。断面形態は逆台形状を呈し、覆土は４つの層序に区分できいずれの層からも炭化物が出土している。炭化物は年代測定（第３章５節）を行った。

SK458（Fig. 28）　南側調査区の南側に位置し、154cm×105cm、深さ18cm を測る不整形の土坑である。壁面は若干緩やかに立ち上がり、断面形態は逆台形状を呈し、底面は凹凸があり不整形である。覆土は２つの層序に区分できいずれの層からも炭化物が出土している。

SK479（Fig. 28）　南側調査区の北側に位置し、117cm×68cm、深さ22cm を測る楕円形の土坑である。壁面はやや急に立ち上がり、断面は逆台形状を呈する。底面は段を持ちやや丸みを帯びた平底を呈する。

SK474・475・476（Fig. 28）　南側調査区の南側に位置する SK474は深さ20cm を測り、SK476に切られる。検出時には各遺構の切り合いや平面プランははっきりしなかった。覆土中からは若干炭化物が出土しているが、遺物は確認されなかった。SK475は深さ13cm を測り、SK476に切られる。覆土は上下２つの層序に区分でき、いずれの層からも炭化物が出土している。炭化物は年代測定（第３章５節）を行った。上層より磨製石斧が出土している。SK476は短軸205cm、深さ40cm を測り、長軸は東西方向であり調査区外に広がる。覆土中からは炭化物が多く出土しているが、遺物は確認されなかった。

ピット　(Fig. 29)

SP231（Fig. 29）　南側調査区の北側に位置しており、直径33cm、深さ30cm を測る円形の比較的深いピットである。壁面は急に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

SP245（Fig. 29）　南側調査区の北端に位置する。50cm×47cm、深さ11cmの円形のピットである。覆土から縄文土器の口縁部（Fig. 32－25）が出土している。

SP265（Fig. 29）　東側調査区の東に位置する。48cm×36cm、深さ29cmの楕円形のピットである。周囲にはピットが密集している。底面付近から打製石斧（Fig. 34－42、43）の破片が２点出土している。石斧は底面に対して水平に、重なる状況で出土している。意図的に埋めたも

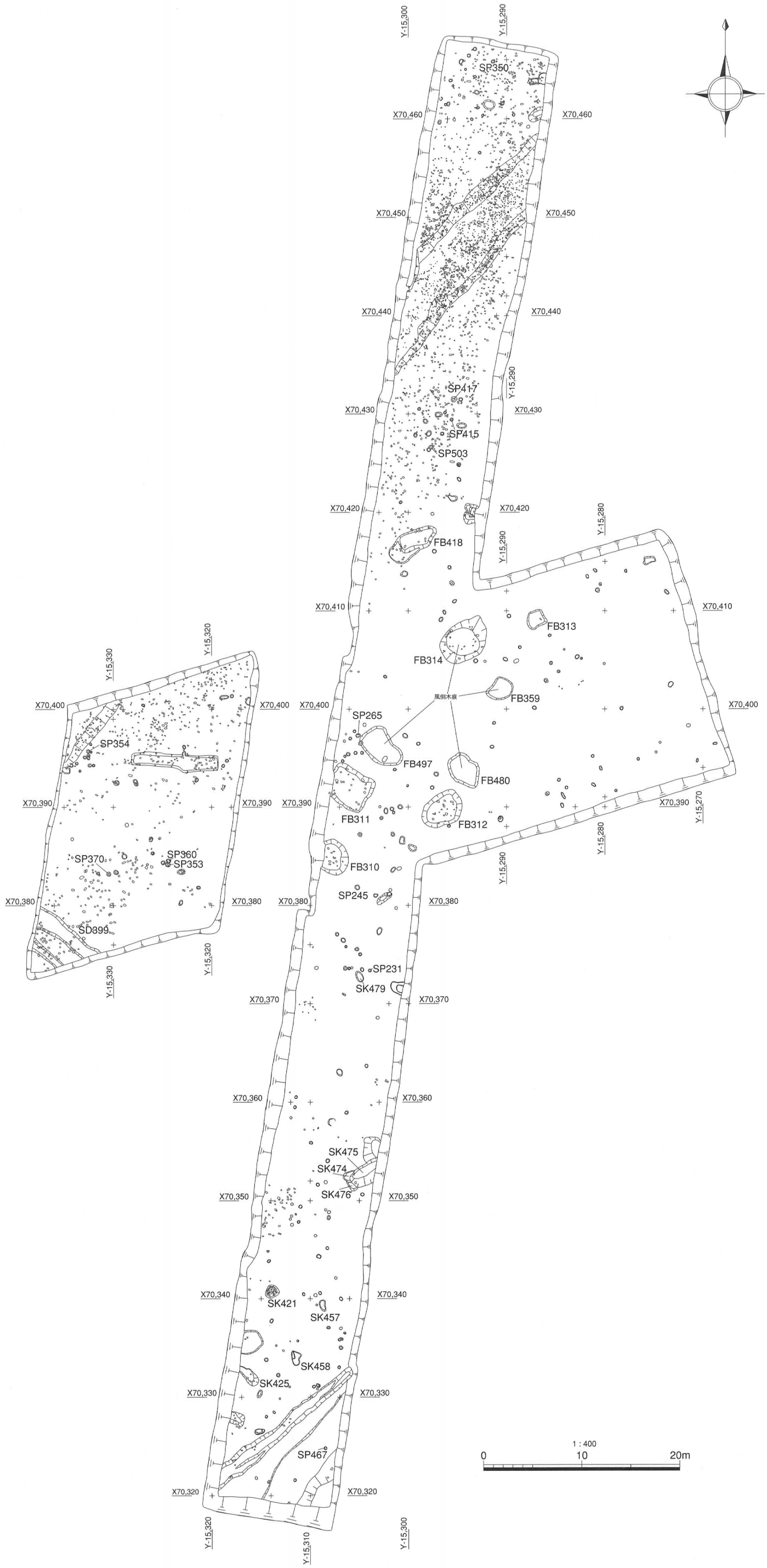


Fig. 26　下層遺構全体図（Scale＝１／400）

のか判断に難しいが、周囲の包含層から打製石斧・縄文土器の出土が比較的多いことから、廃棄された可能性も考えられる。

SP350（Fig. 29）　北側調査区の北側に位置しており、直径39cm、深さ16cmを測る円形のピットである。壁面は急に立ち上がり、断面は逆台形状を呈し底面はやや丸みを帯びた平底を呈する。

SK353・360（Fig. 29）　西側調査区の東南に位置する。50cm×43cm、深さ9cmのほぼ円形のピットである。覆土から一括の縄文土器（Fig. 32－24）が出土しているが、一括土器の一部が5層掘削中に発見されていることから、遺構の掘り込みは下層遺構面より上層にあることの証左となる。遺物は、深鉢の縄文土器であるが、口縁部から胴下半部の半分の残存であり、縄文後期前葉の気屋式相当にあたる。SP360は48cm×32cm、深さ5cmの楕円である。SK353と切りあって検出されたが、重複箇所に石が存在するため切り合い関係は不明である。

SP354（Fig. 29）　西側調査区の北西に位置する。39cm×33cm、深さ30cmのほぼ円形である。周囲に多くのピットが検出されたが、上層遺構SD09の肩部で、周囲では遺構が切られているものもある。覆土上層から縄文中期後半の古府式段階の縄文土器（Fig. 32－26）が出土している。

SP370（Fig. 29）　西側調査区の西側に位置しており、直径41cm、深さ11cmを測る円形のピットである。壁面は若干緩やかに立ち上がり、底面は凹凸があり不整形である。

SP415（Fig. 29）　北側調査区の南側に位置しており、直径33cm、深さ15cmを測る円形のピットである。壁面はやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。覆土は暗褐色シルトの単層で炭化物が出土している。炭化物は年代測定（第3章5節）を行った。

SP417（Fig. 29）　北側調査区のSD09の南に位置する。60cm×55cm、深さ17cmのほぼ円形のピットである。覆土中から、破砕した礫が出土している。石質は安山岩で、意図的に割られていると考えられる。破砕した礫は10～15cmの塊状で、接合できる礫もあった。打製石斧の材料になる剥片を製作していたものではないと考えられる。

SP467（Fig. 29）　南側調査区の南側に位置しており、直径32cm、深さ13cmを測る円形のピットである。壁面は若干緩やかに立ち上がり、断面は逆台形状を呈し底面はやや丸みを帯びた平底を呈する。

SP503（Fig. 29）　南側調査区の南側に位置しており、直径44cm、深さ17cmを測る円形のピットである。壁面はやや急に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

（野原・阿部）

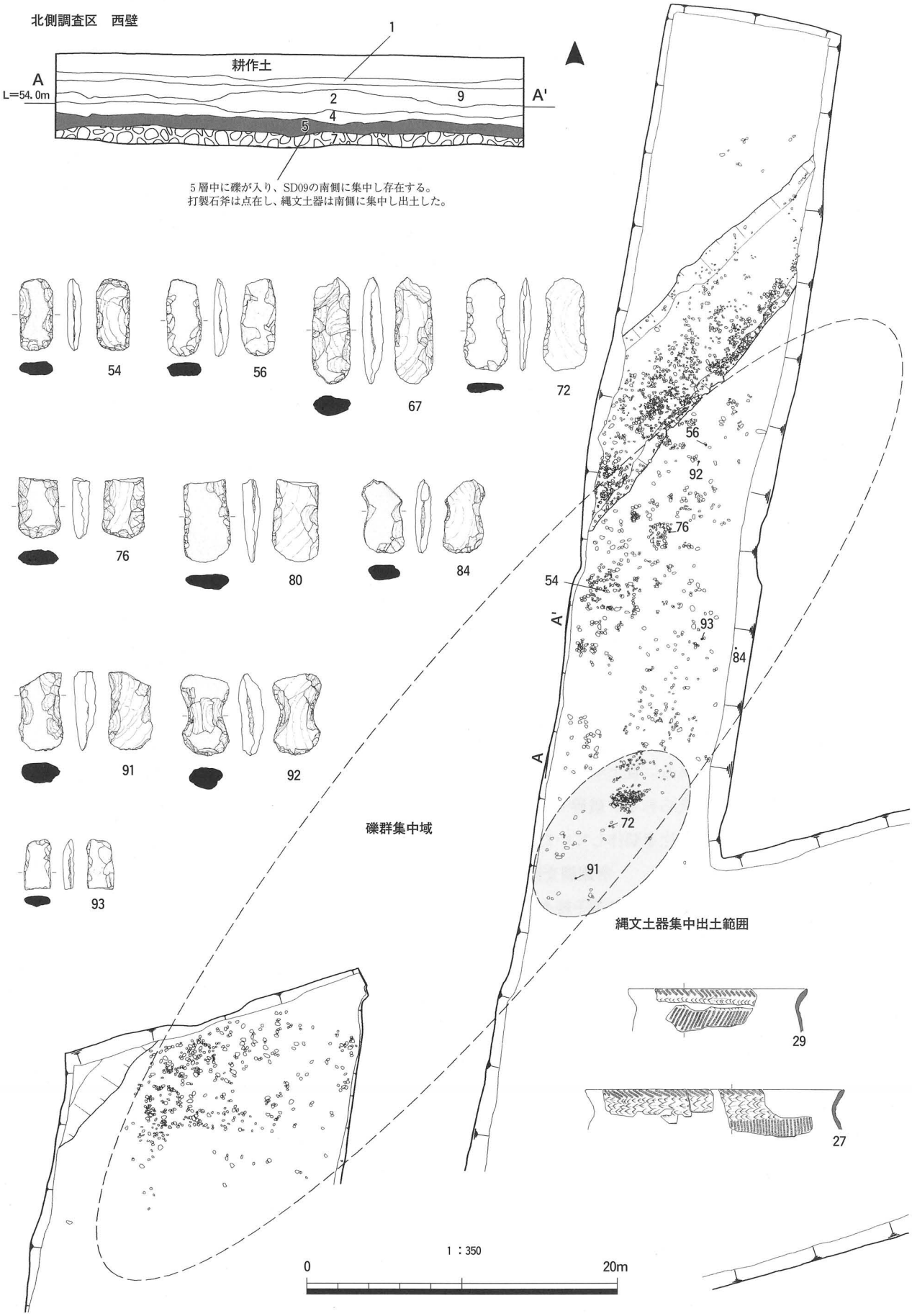


Fig. 27　下層遺構図　礫群出土状況図（Scale＝１／350）

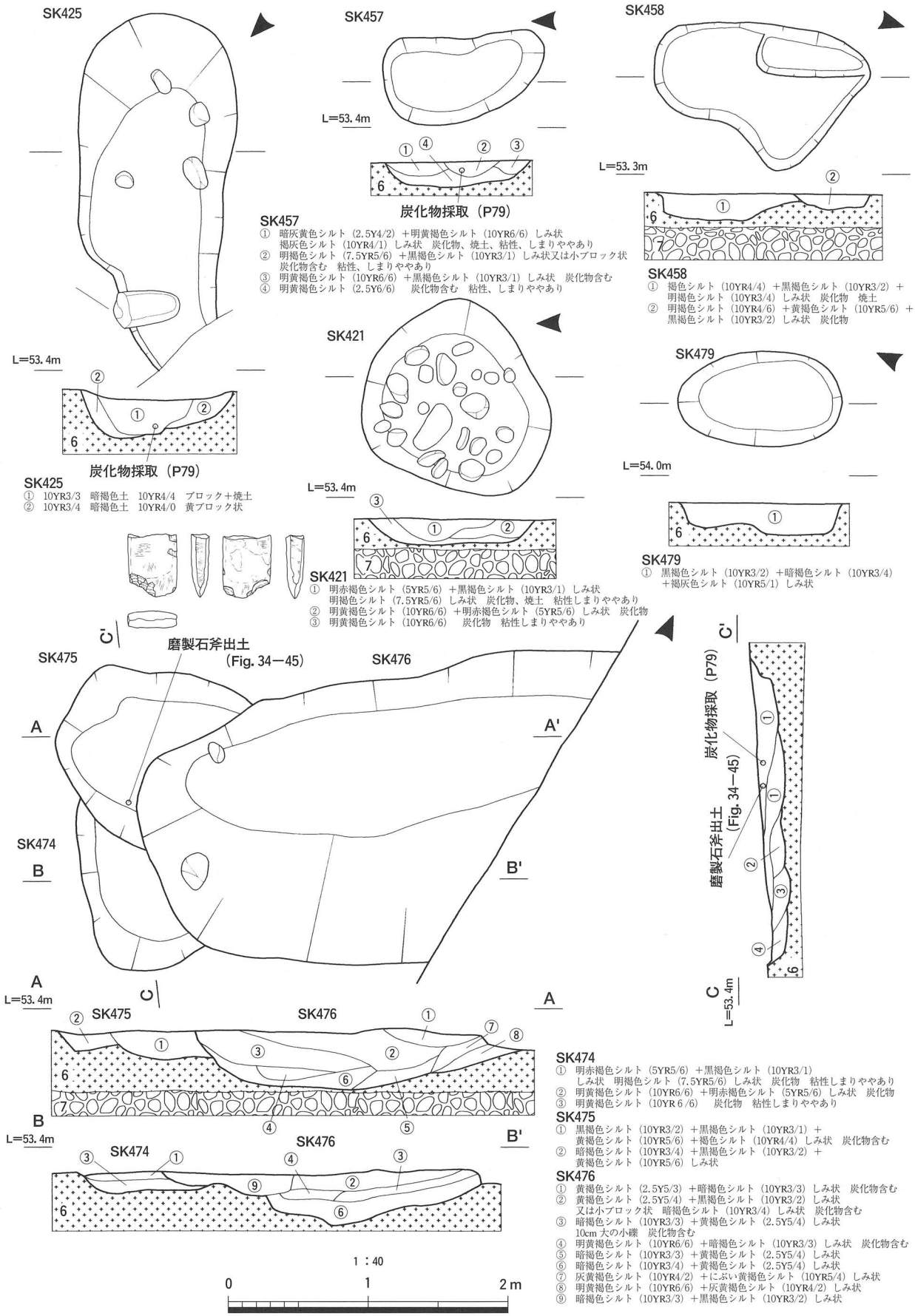


Fig. 28　下層遺構図　土坑（Scale＝1／40）

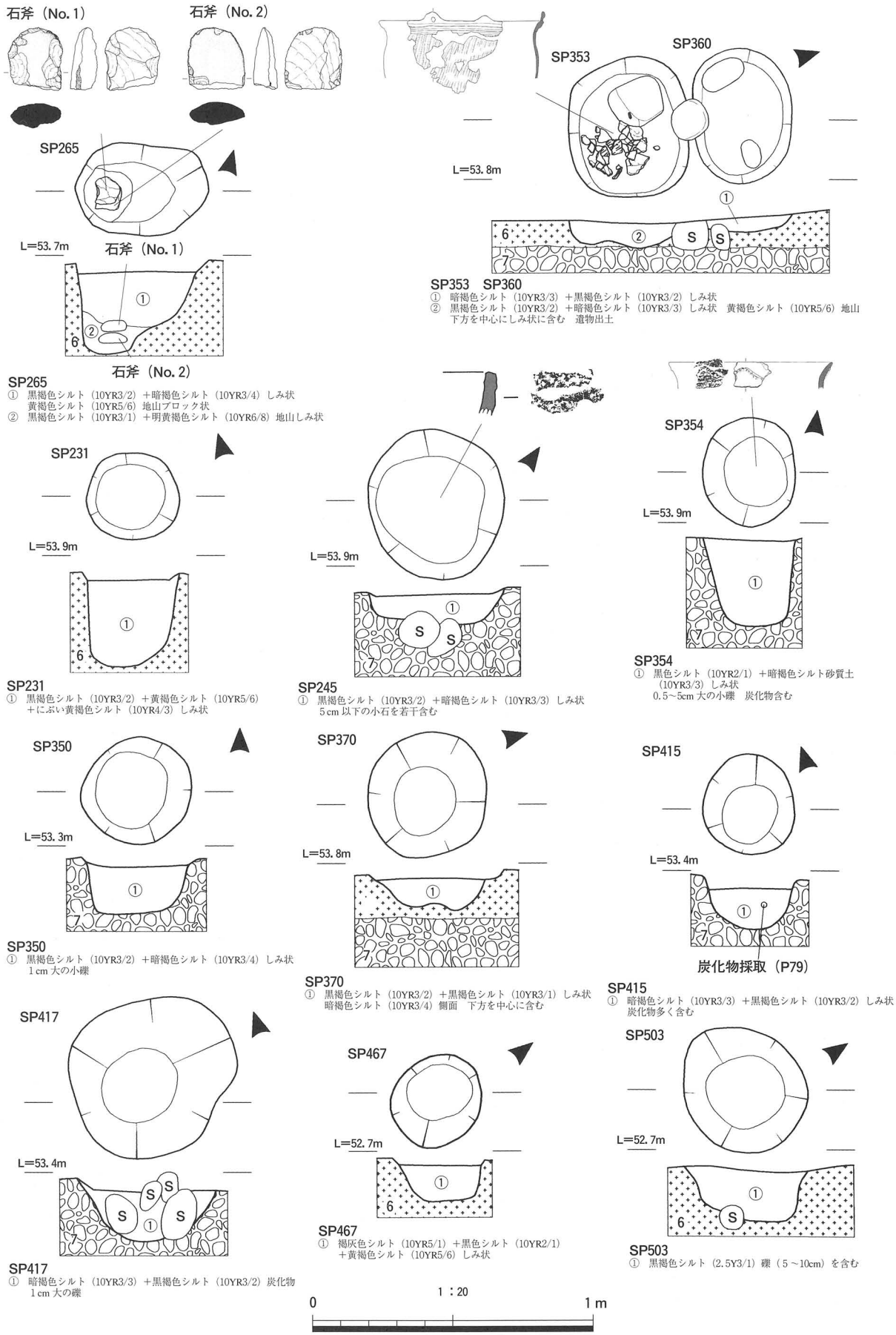


Fig. 29　下層遺構図　ピット（Scale＝１／20）

Tab. 6　掘立柱建物一覧（上層）

図版番号	遺構番号	地区	桁行柱間	梁行柱間	桁行長 cm	桁行長 平均	面積㎡ cm	面積㎡ 平均	棟方向	方位	柱形式	備考
Fig. 20	SB01	南側調査区	2	3	780	260	460	230	北西	N−20°−E	総柱	

Tab. 7　溝一覧（上層）

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：幅 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
Fig. 21	SD02	北側調査区	長方形	583	54	11	31530		
Fig. 23・24	SD03	北側調査区	長方形	1736	73	17	125894	縄文土器 土師器 須恵器 珠洲 瓦質土器	
Fig. 23・24	SD09	西側調査区	長方形	509	499	81	129091	縄文土器	
Fig. 23・24	SD09	北側調査区	長方形	1696	784	100	1329734	縄文土器 土師器 須恵器 珠洲 白磁 青磁	
	SD69	東側調査区	長方形	615	22	6	13398		
	SD70	東側調査区	長方形	427	40	5	17168		
	SD71	東側調査区	長方形	1333	37	67	49179		
	SD72	東側調査区	長方形	1425	33	13	47341		
	SD73	東側調査区	長方形	1612	31	7	50695		
Fig. 22	SD169	南側調査区	長方形	959	70	16	67366		
Fig. 22	SD170	南側調査区	長方形	1629	205	82	333630		
Fig. 21	SD200	西側調査区	長方形	335	137	34	45831	土師器	
Fig. 21	SD202	西側調査区	長方形	537	43	19	23032	土師器	
Fig. 21	SD212	東側調査区	長方形	262	107	30	28010		

Tab. 8　土坑一覧（上層）

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	SK01	北側調査区	不定形	255	193	9	49248		
Fig. 25	SK04	北側調査区	楕円形	86	63	13	4437		
	SK07	北側調査区	楕円形	63	40	20	2122		
	SK15	北側調査区	不定形	69	47	8	18752		
	SK31	北側調査区	不定形	83	19	17	2040		
	SK34	北側調査区	不定形	76	31	11	2181		
Fig. 25	SK35	北側調査区	不定形	78	54	13	3692		
	SK41	東側調査区	円形	69	45	12	2511		調査区外に延びる
	SK49	北側調査区	楕円形	73	61	25	4229		調査区外に延びる
	SK93	東側調査区	楕円形	176	52	6	8149		調査区外に延びる
	SK94	東側調査区	不定形	114	35	23	3428	縄文土器	
	SK133	東側調査区	不定形	103	26	5	2626		
	SK142	南側調査区	楕円形	57	26	15	1310		調査区外に延びる
	SK151	南側調査区	円形	67	58	13	3232		調査区外に延びる
	SK190	東側調査区	不定形	71	36	13	2156	縄文土器	

Tab. 9　ピット一覧（上層）

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
Fig. 25	SP05	北側調査区	円形	33	27	28	706		
	SP06	北側調査区	円形	30	25	21	605		
	SP08	北側調査区	楕円形	37	31	17	1021		
	SP10	北側調査区	円形	52	25	12	966		調査区外へ延びる
	SP11	北側調査区	不定形	66	13	15	1629		
Fig. 25	SP12	北側調査区	円形	35	33	15	859		
	SP13	北側調査区	楕円形	33	24	10	605		
Fig. 25	SP14	北側調査区	楕円形	33	24	7	642		
	SP21	北側調査区	円形	29	26	9	581		
	SP22	北側調査区	円形	18	16	10	253		
	SP23	北側調査区	円形	30	28	10	651		
	SP27	北側調査区	楕円形	44	22	9	854		
	SP33	北側調査区	円形	27	23	6	491		
	SP36	北側調査区	円形	15	14	4	171		
	SP37	北側調査区	円形	23	20	11	359		
	SP42	北側調査区	楕円形	32	25	10	615		
	SP44	北側調査区	円形	38	37	8	1084		
Fig. 25	SP45	北側調査区	円形	33	29	23	747		
	SP46	北側調査区	楕円形	50	29	11	1193		
	SP47	北側調査区	円形	45	42	12	1485		
	SP50	北側調査区	楕円形	42	31	9	1056		
	SP51	北側調査区	楕円形	47	39	12	1462		
	SP58	北側調査区	楕円形	36	24	10	723		
	SP59	北側調査区	楕円形	34	29	11	781		
	SP60	東側調査区	楕円形	33	26	13	656		
	SP61	東側調査区	円形	26	24	11	471		
	SP63	東側調査区	楕円形	29	23	6	516		
	SP64	東側調査区	楕円形	55	43	15	1875		
	SP66	東側調査区	円形	52	47	10	1915		
	SP67	東側調査区	楕円形	26	21	11	426		
	SP68	東側調査区	楕円形	50	24	12	1013		
	SP74	東側調査区	円形	25	22	8	449		
	SP78	東側調査区	楕円形	30	24	13	593		
	SP80	東側調査区	円形	37	33	17	975		
	SP81	東側調査区	楕円形	65	27	7	1493		
	SP82	東側調査区	楕円形	46	32	11	1214		
	SP83	東側調査区	円形	28	18	10	424		36T に切られる
	SP85	東側調査区	楕円形	37	27	10	782		
Fig. 25	SP87	東側調査区	楕円形	53	26	11	1199		
	SP88	東側調査区	楕円形	27	21	12	453		
	SP89	東側調査区	円形	29	25	12	579		
	SP92	東側調査区	円形	60	54	9	2536		
	SP95	東側調査区	楕円形	39	29	25	702		
Fig. 25	SP96	東側調査区	楕円形	66	46	14	2426		
	SP98	東側調査区	円形	52	43	16	1791		
	SP101	東側調査区	楕円形	36	22	8	636		
	SP106	東側調査区	楕円形	60	32	17	1656		
	SP108	東側調査区	楕円形	44	31	13	1056		
	SP109	東側調査区	楕円形	35	27	12	808		
	SP110	東側調査区	円形	22	19	8	323		
	SP111	東側調査区	楕円形	31	23	8	583		
	SP120	東側調査区	円形	54	48	11	2033		
	SP121	東側調査区	楕円形	31	23	13	575		

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎠	出土遺物	備考
	SP123	東側調査区	不定形	37	34	12	955		
	SP124	東側調査区	楕円形	58	37	15	1762		
	SP128	東側調査区	楕円形	29	20	10	455		
	SP129	東側調査区	楕円形	32	23	7	580		
	SP131	東側調査区	楕円形	36	28	9	808		
	SP132	東側調査区	円形	25	23	15	477		
	SP134	東側調査区	不定形	40	26	15	797		
	SP140	南側調査区	楕円形	29	22	9	503		
	SP141	南側調査区	楕円形	25	20	11	404		
Fig. 25	SP146	南側調査区	不定形	52	41	19	1615		
	SP147	南側調査区	楕円形	40	31	14	996		
	SP148	南側調査区	楕円形	35	23	13	641		
	SP149	南側調査区	円形	62	54	7	2566		
	SP153	南側調査区	円形	28	25	12	553		
Fig. 25	SP154	南側調査区	円形	48	44	14	1730		
	SP155	南側調査区	楕円形	44	34	10	1194		
	SP164	南側調査区	円形	22	19	7	330		
	SP166	南側調査区	円形	26	22	8	446		
	SP167	南側調査区	楕円形	61	30	14	1414		
Fig. 25	SP168	南側調査区	楕円形	62	47	27	2338		
	SP171	南側調査区	円形	62	54	14	2623		
	SP172	南側調査区	楕円形	41	29	8	907		
	SP174	東側調査区	円形	28	25	21	556		SB01
	SP175	東側調査区	円形	37	36	28	1059		SB01
	SP177	東側調査区	楕円形	28	25	19	557		SB01
	SP178	東側調査区	円形	26	24	36	498		SB01
	SP179	東側調査区	円形	37	32	31	926		SB01
	SP180	東側調査区	円形	36	33	32	912		SB01
	SP182	東側調査区	円形	26	24	34	497		SB01
	SP183	東側調査区	円形	37	33	19	952		SB01
	SP184	東側調査区	円形	31	28	18	181		SB01
	SP185	東側調査区	楕円形	26	21	33	458		SB01
	SP186	東側調査区	楕円形	30	25	24	632		SB01
	SP187	東側調査区	円形	34	30	22	784		SB01
	SP189	東側調査区	円形	21	17	9	297		
	SP191	東側調査区	楕円形	44	26	13	1007		
Fig. 25	SP192	西側調査区	円形	53	46	11	1921		
	SP193	西側調査区	円形	30	26	12	603		
	SP194	北側調査区	楕円形	32	24	7	631	縄文土器	
	SP195	北側調査区	円形	44	39	9	1381		
	SP196	北側調査区	円形	23	21	6	354		
	SP197	北側調査区	楕円形	37	34	4	1031		34T に切られる
	SP198	北側調査区	円形	18	13	8	203		34T に切られる
	SP199	北側調査区	不定形	72	46	10	2341		34T に切られる
	SP201	西側調査区	不定形	26	19	15	391		
	SP203	西側調査区	円形	29	28	22	628		
	SP204	西側調査区	楕円形	27	18	13	397		
Fig. 25	SP205	西側調査区	楕円形	73	46	22	2781		
	SP206	西側調査区	円形	29	24	6	539		
	SP208	西側調査区	円形	28	21	9	482		
	SP209	西側調査区	楕円形	35	23	14	644		
	SP210	西側調査区	円形	41	35	8	1086		
	SP211	西側調査区	楕円形	44	25	14	920		

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	SP401	南側調査区	楕円形	48	37	11	1399		
	SP402	南側調査区	楕円形	34	22	9	588		
	SP403	南側調査区	円形	25	19	15	375		
	SP404	南側調査区	円形	29	28	11	649		
	SP405	南側調査区	不定形	67	33	12	1525		
	SP406	南側調査区	円形	24	20	9	377		
	SP407	南側調査区	楕円形	25	18	11	323		
	SP408	南側調査区	円形	30	24	8	559		

Tab. 10　溝一覧（下層）

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：幅 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	SD399	西側調査区	不定形	664	173	21	114784		
	SD456	南側調査区	不定形	1029	418	39	430539		

Tab. 11　土坑一覧（下層）

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	SK244	南側調査区	円形	81	73	9	2289	縄文土器・須恵器	
	SK248	東側調査区	楕円形	80	54	11	3985		
	SK273	東側調査区	楕円形	76	25	13	1659		
	SK275	東側調査区	楕円形	51	29	16	1222		
	SK324	北側調査区	楕円形	100	61	11	5788		
	SK325	北側調査区	円形	116	74	9	7641		調査区外に延びる
	SK331	北側調査区	楕円形	123	100	16	9794		
	SK362	西側調査区	楕円形	61	36	15	1703		
	SK364	西側調査区	楕円形	82	54	18	3416		
	SK380	西側調査区	楕円形	92	39	14	3073		
	SK382	西側調査区	不定形	79	45	12	3306		
	SK397	西側調査区	不定形	91	71	25	4754		調査区外に延びる
	SK400	南側調査区	楕円形	130	109	38	14129		調査区外に延びる
Fig. 28	SK421	南側調査区	不定形	139	118	19	14065		
Fig. 28	SK425	南側調査区	不定形	237	102	28	21773	縄文土器	調査区外に延びる
	SK426	南側調査区	楕円形	84	45	34	3131		
	SK429	南側調査区	不定形	105	53	13	4757		
Fig. 28	SK457	南側調査区	楕円形	117	57	18	6037		
Fig. 28	SK458	南側調査区	不定形	154	83	19	10889		
	SK470	南側調査区	不定形	182	116	36	16397		
Fig. 28	SK474	南側調査区	不定形	94	55	17	5713		SK475・476に切られる
Fig. 28	SK475	南側調査区	円形	100	69	20	7603	打製石斧	SK476に切られる
Fig. 28	SK476	南側調査区	楕円形	298	209	42	50383		調査区外に延びる
	SK477	南側調査区	不定形	221	153	48	34802		調査区外に延びる
Fig. 28	SK479	南側調査区	楕円形	116	67	22	6410		
	SK483	東側調査区	不定形	127	67	22	7918		

Tab. 12　ピット一覧（下層）

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	SP220	南側調査区	円形	43	40	10	1372		
	SP221	南側調査区	円形	40	33	11	1037		
	SP222	南側調査区	楕円形	37	30	12	915		
	SP223	南側調査区	円形	36	34	7	977		
	SP225	南側調査区	円形	40	33	12	1022		
	SP226	南側調査区	円形	26	24	9	488		
	SP227	南側調査区	楕円形	35	29	14	790		
	SP228	南側調査区	円形	33	27	12	729		
	SP229	南側調査区	円形	43	41	15	1408		
	SP230	南側調査区	円形	24	23	21	435		
Fig. 29	SP231	南側調査区	円形	33	31	31	822		
	SP232	南側調査区	楕円形	77	58	18	3440		
	SP233	南側調査区	円形	37	33	9	972		
	SP234	南側調査区	円形	36	32	15	870		
	SP235	南側調査区	円形	17	16	20	221		
	SP236	南側調査区	円形	23	20	16	370		
	SP237	南側調査区	円形	39	34	14	1042		
	SP238	南側調査区	楕円形	44	35	12	1209		
	SP239	南側調査区	楕円形	79	50	18	3098		
	SP240	東側調査区	円形	33	29	12	751		
	SP241	東側調査区	楕円形	48	36	22	1387		
	SP242	東側調査区	円形	34	31	9	826		
	SP243	東側調査区	不定形	46	35	9	1336		
Fig. 29	SP245	東側調査区	円形	54	48	11	2032	縄文土器	
	SP246	東側調査区	楕円形	64	37	15	1999		
	SP247	東側調査区	楕円形	49	35	8	1405		
	SP249	東側調査区	円形	47	39	7	1422		
	SP250	東側調査区	円形	46	41	13	1496		
	SP251	東側調査区	円形	37	34	7	1007		
	SP252	東側調査区	楕円形	63	41	13	2083		
	SP253	東側調査区	楕円形	31	25	7	646		
	SP254	東側調査区	円形	41	39	9	1292		
	SP255	東側調査区	楕円形	27	21	12	452		
	SP256	東側調査区	楕円形	37	31	25	850		
	SP257	東側調査区	楕円形	65	39	12	2193		
	SP258	東側調査区	楕円形	41	34	13	1070		
	SP259	東側調査区	楕円形	57	45	17	2049		
	SP260	東側調査区	円形	37	35	20	986		
	SP261	東側調査区	楕円形	43	36	25	1249	土師器	
	SP262	東側調査区	円形	27	26	16	556		
	SP263	東側調査区	円形	35	31	17	882		
Fig. 29	SP265	東側調査区	楕円形	49	37	29	1439	打製石斧	
	SP266	東側調査区	楕円形	63	51	11	2574		
	SP267	東側調査区	楕円形	42	35	16	1141		
	SP268	東側調査区	円形	43	39	9	1390		
	SP269	東側調査区	楕円形	49	42	20	1610		
	SP270	東側調査区	楕円形	45	36	11	1279		
	SP271	東側調査区	円形	36	33	14	930		
	SP272	東側調査区	楕円形	50	29	10	1227		
	SP274	東側調査区	円形	33	30	11	810		
	SP276	東側調査区	円形	32	31	12	783		
	SP277	東側調査区	楕円形	47	29	14	1154		
	SP278	東側調査区	円形	28	27	12	608		

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	SP279	東側調査区	円形	32	27	18	713		
	SP280	東側調査区	円形	25	23	13	458		
	SP281	東側調査区	円形	24	22	20	415		
	SP282	東側調査区	楕円形	40	34	10	1135		
	SP283	東側調査区	楕円形	45	25	15	972		
	SP284	東側調査区	楕円形	43	21	13	749		
	SP285	東側調査区	楕円形	61	47	12	2336		
	SP286	東側調査区	円形	40	39	17	1210		
	SP287	東側調査区	円形	50	44	19	1755		
	SP288	東側調査区	円形	34	31	28	819		
	SP289	東側調査区	円形	31	30	10	735		
	SP290	東側調査区	楕円形	44	31	8	1091		
	SP291	東側調査区	円形	48	43	17	1605		
	SP292	東側調査区	楕円形	42	28	13	951		
	SP293	東側調査区	楕円形	49	38	15	1516		
	SP294	東側調査区	円形	20	19	13	299		
	SP295	東側調査区	楕円形	34	27	11	754		
	SP296	東側調査区	円形	36	32	10	924		
	SP297	東側調査区	円形	42	39	12	1271		
	SP298	東側調査区	円形	33	32	12	814		
	SP299	東側調査区	楕円形	56	36	11	1684		
	SP300	北側調査区	円形	44	42	13	1421	縄文土器	
	SP301	東側調査区	楕円形	51	36	17	1470		
	SP302	東側調査区	円形	26	23	9	489		
	SP303	東側調査区	円形	46	43	12	1521		
	SP304	東側調査区	楕円形	37	30	13	889		
	SP305	東側調査区	楕円形	47	31	9	1150		
	SP306	東側調査区	楕円形	43	33	19	1236		
	SP307	東側調査区	楕円形	52	42	23	1778		
	SP308	東側調査区	円形	41	36	14	1113		
	SP309	東側調査区	楕円形	34	29	11	757		
	SP315	東側調査区	円形	35	31	23	817		
	SP316	東側調査区	円形	30	27	12	673		
	SP317	東側調査区	円形	36	33	13	921		
	SP318	東側調査区	円形	27	25	11	542		
	SP319	北側調査区	円形	32	30	10	764		
	SP320	北側調査区	円形	32	29	6	727		
	SP321	北側調査区	円形	37	32	4	922		
	SP323	北側調査区	円形	34	28	17	774		
	SP327	北側調査区	円形	43	37	14	1256		
	SP328	北側調査区	楕円形	30	24	12	552		
	SP329	北側調査区	楕円形	31	26	8	654		
	SP330	北側調査区	楕円形	47	34	11	793		
	SP332	北側調査区	楕円形	47	35	28	1311	土師器	
	SP334	北側調査区	円形	32	26	6	663		
	SP336	北側調査区	楕円形	44	31	18	1184		
	SP337	北側調査区	円形	28	26	14	549		
	SP338	北側調査区	楕円形	39	29	11	509		
	SP340	北側調査区	円形	28	23	7	471		
	SP341	北側調査区	円形	27	24	13	504		
	SP343	北側調査区	不定形	24	20	15	396		
	SP344	北側調査区	楕円形	40	29	10	948		
	SP345	北側調査区	円形	25	22	8	422		

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎠	出土遺物	備考
	SP346	北側調査区	円形	31	28	15	696		
	SP347	北側調査区	円形	26	23	11	482		
	SP348	北側調査区	楕円形	53	39	8	1658		
	SP349	北側調査区	円形	37	35	8	999		
Fig. 29	SP350	北側調査区	円形	40	36	16	1147		
	SP351	北側調査区	円形	40	34	11	1086		
	SP352	北側調査区	楕円形	54	41	14	1850		
Fig. 29	SP353	西側調査区	楕円形	50	42	8	1813		
Fig. 29	SP354	西側調査区	円形	39	33	31	1027	縄文土器	
	SP355	東側調査区	楕円形	48	39	10	1481		
	SP356	東側調査区	円形	34	30	10	797		
	SP357	東側調査区	円形	26	22	10	445		
	SP358	東側調査区	円形	25	23	9	445		
Fig. 29	SP360	西側調査区	楕円形	49	35	5	1402	縄文土器	
	SP361	西側調査区	楕円形	40	32	14	1091		
	SP363	西側調査区	楕円形	27	21	16	458		
	SP365	西側調査区	円形	24	21	13	398		
	SP366	西側調査区	円形	36	35	18	992		
	SP367	西側調査区	楕円形	50	38	7	1605		
	SP368	西側調査区	円形	55	51	11	2205		
	SP369	西側調査区	楕円形	50	42	13	1673		
Fig. 29	SP370	西側調査区	円形	45	42	12	1526		
	SP371	西側調査区	楕円形	34	29	7	793		
	SP372	西側調査区	円形	31	30	12	718		
	SP373	西側調査区	円形	41	37	8	1175		
	SP374	西側調査区	円形	56	52	9	2342		
	SP375	西側調査区	円形	40	37	6	417		
	SP376	西側調査区	楕円形	41	32	8	1341		SK375に切られる
	SP377	西側調査区	楕円形	45	34	12	1175		
	SP378	西側調査区	円形	33	31	22	824		
	SP379	西側調査区	円形	36	35	19	1014		
	SP381	西側調査区	円形	37	35	13	1056		
	SP383	西側調査区	楕円形	28	21	8	460		
	SP384	西側調査区	不定形	49	34	10	1308		29T に切られる
	SP385	西側調査区	楕円形	42	31	16	1025		
	SP386	西側調査区	楕円形	35	24	8	697		
	SP387	西側調査区	楕円形	35	24	10	689		
	SP388	西側調査区	楕円形	26	20	15	403	縄文土器	
	SP389	西側調査区	楕円形	38	30	12	1630		
	SP390	西側調査区	円形	34	22	10	736		SP389に切られる
	SP391	西側調査区	円形	34	31	13	840		
	SP392	西側調査区	円形	30	29	11	635		
	SP393	西側調査区	円形	37	33	13	990		
	SP394	西側調査区	不定形	26	23	10	477		
	SP395	西側調査区	円形	31	30	8	722		
	SP396	西側調査区	楕円形	37	28	11	849		SD09に切られる
	SP398	西側調査区	円形	43	41	6	1407		
	SP409	北側調査区	円形	34	30	7	813		
	SP410	北側調査区	楕円形	34	28	7	776		
	SP411	北側調査区	円形	43	41	9	1423		
	SP412	北側調査区	円形	38	35	13	1094		
	SP413	北側調査区	円形	46	36	14	1352		
	SP414	北側調査区	円形	34	30	13	812		

図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
Fig. 29	SP415	北側調査区	円形	36	33	15	918	縄文土器	
	SP416	北側調査区	円形	34	28	12	729		
Fig. 29	SP417	北側調査区	不定形	62	55	18	2657	礫　剥片	
	SP420	南側調査区	円形	35	32	8	870		
	SP422	南側調査区	楕円形	45	33	10	1234		
	SP423	南側調査区	円形	41	38	10	1220		
	SP424	南側調査区	円形	40	38	8	1210		
	SP427	南側調査区	楕円形	32	23	7	583		
	SP428	南側調査区	円形	31	26	9	639		
	SP430	南側調査区	楕円形	36	29	10	828		
	SP431	南側調査区	円形	24	20	7	376		
	SP432	南側調査区	楕円形	45	32	8	1157		
	SP433	南側調査区	円形	35	31	7	828		
	SP434	南側調査区	楕円形	43	36	8	1257		
	SP435	南側調査区	楕円形	35	30	11	894		
	SP436	南側調査区	楕円形	29	17	8	500		SP435に切られる
	SP437	南側調査区	楕円形	27	23	17	483		
	SP438	南側調査区	楕円形	33	26	10	718		
	SP439	南側調査区	楕円形	39	29	15	909		
	SP440	南側調査区	楕円形	43	32	9	1085		
	SP444	南側調査区	円形	32	26	12	638		
	SP445	南側調査区	円形	26	24	14	506		
	SP447	南側調査区	円形	25	23	10	463		
	SP448	南側調査区	円形	32	30	15	760		
	SP449	南側調査区	楕円形	24	14	7	271		
	SP450	南側調査区	楕円形	38	29	8	896		
	SP451	南側調査区	円形	28	26	9	590		
	SP452	南側調査区	楕円形	50	38	12	1623		
	SP453	南側調査区	円形	29	27	6	625		
	SP454	南側調査区	円形	34	30	8	835		
	SP455	南側調査区	円形	40	36	11	1133		
	SP460	南側調査区	円形	37	33	8	991		
	SP461	南側調査区	円形	21	19	7	344		
	SP462	南側調査区	円形	20	18	12	293		
	SP463	南側調査区	円形	21	18	11	288		
	SP464	南側調査区	楕円形	34	28	14	777		
	SP465	南側調査区	楕円形	21	18	17	338		調査区外に延びる
	SP466	南側調査区	円形	33	28	12	744		
Fig. 29	SP467	南側調査区	円形	34	31	13	825		
	SP468	南側調査区	円形	19	18	14	277		
	SP469	南側調査区	円形	23	22	21	395		
	SP471	南側調査区	円形	33	30	13	786		
	SP472	南側調査区	円形	35	30	10	861		
	SP478	南側調査区	円形	37	33	16	970		
	SP479	南側調査区	楕円形	117	68	23	6410		
	SP481	南側調査区	円形	41	36	14	1146		
	SP482	東側調査区	不定形	180	67	31	9118		
	SP484	南側調査区	楕円形	36	26	10	747		
	SP485	南側調査区	円形	26	25	11	511		
	SP486	南側調査区	楕円形	20	16	18	271		
	SP487	南側調査区	楕円形	46	35	14	1274		
	SP488	南側調査区	円形	31	27	14	668		
	SP489	南側調査区	円形	36	34	15	973		

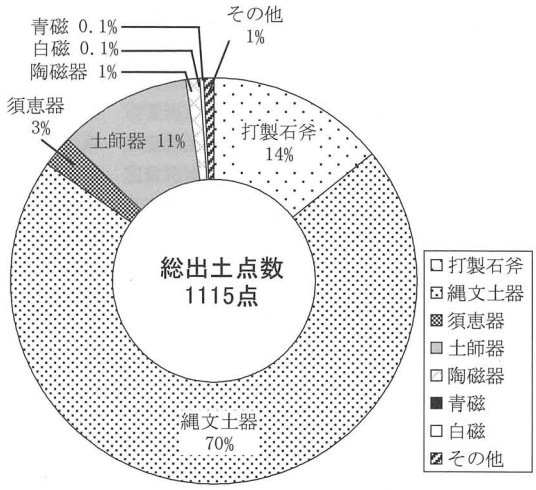
図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	SP490	南側調査区	楕円形	44	36	26	1273		
	SP491	南側調査区	楕円形	29	24	11	549		
	SP492	南側調査区	楕円形	53	43	16	1789		
	SP493	東側調査区	楕円形	94	63	22	4653		
	SP494	東側調査区	円形	26	24	16	491		
	SP495	東側調査区	楕円形	54	45	23	1889		
	SP496	東側調査区	楕円形	53	40	18	1633		
	SP498	東側調査区	円形	76	60	24	3392		
	SP499	北側調査区	楕円形	51	33	16	1293		
	SP501	北側調査区	楕円形	102	56	20	4554		
	SP502	北側調査区	円形	43	37	8	1221		
Fig. 29	SP503	北側調査区	楕円形	48	42	13	886		
	SP504	北側調査区	不定形	104	54	23	4571		
	SP505	北側調査区	円形	36	24	5	699		SD09に切られる
	SP506	北側調査区	楕円形	64	49	14	2491		
	SP507	北側調査区	楕円形	71	50	23	3009		
	SP508	北側調査区	楕円形	53	42	17	1907		
	SP520	東側調査区	楕円形	58	35	21	1639		
	SP521	東側調査区	楕円形	33	25	17	731		
	SP522	東側調査区	円形	33	27	17	729		
	SP523	東側調査区	楕円形	36	30	24	836		
	SP524	東側調査区	円形	40	36	24	1095		
	SP525	南側調査区	円形	29	26	14	618		

Tab. 13　風倒木一覧（下層）

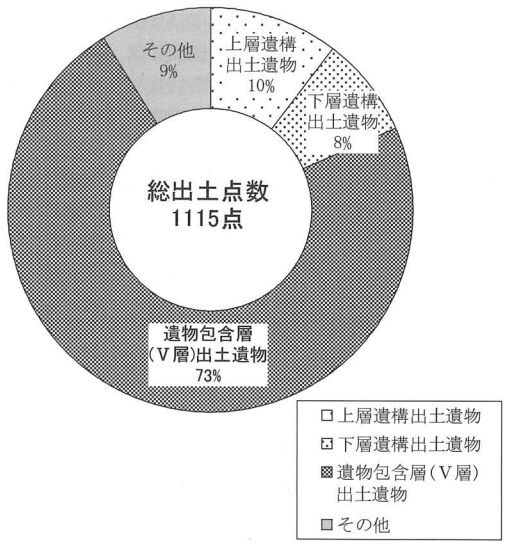
図版番号	遺構番号	地区	平面形	規模：長 cm	規模：短 cm	規模：深 cm	面積㎡	出土遺物	備考
	FB310	東側調査区	円形	366	244	47	74955		調査区外に延びる
	FB311	東側調査区	不定形	528	377	60	149665	縄文土器	
	FB312	東側調査区	不定形	445	318	63	115067		
	FB313	東側調査区	不定形	219	163	30	29322		
	FB314	東側調査区	不定形	550	379	79	162369	打製石斧	
	FB322	北側調査区	楕円形	154	109	48	15043	須恵器	調査区外に延びる
	FB359	東側調査区	不定形	282	210	38	45106		
	FB418	北側調査区	不定形	541	221	48	104951	打製石斧	
	FB419	北側調査区	不定形	207	99	61	21518		
	FB459	南側調査区	楕円形	232	211	34	41942		調査区外に延びる
	FB480	東側調査区	不定形	391	298	42	83550		
	FB497	東側調査区	不定形	470	261	35	114936		

第４節　遺　物　(Fig.31～43)

本遺跡から出土した遺物は、総点数にして1115点を数える。遺物の種類は、縄文時代では、打製石斧、磨製石斧、縄文土器があり、古代では須恵器、土師器がある。中世では土師器、珠洲焼、瀬戸美濃焼、青磁、白磁で構成されている。帰属年代は縄文時代、古代（８世紀～９世紀）と中世（鎌倉時代～室町時代）の三時期のもので占められる。遺構内から出土した遺物は10％程度であり、多くが遺物包含層出土である。以下（１）上層遺構出土遺物、（２）下層遺構出土遺物、（３）遺物包含層出土遺物の順でその詳細について述べる。



Tab.14　種類別遺物構成グラフ



Tab.15　出土別遺物構成グラフ

（１）上層遺構出土遺物　(Fig.31, Tab.14・15)

上層遺構からは、古代・中世に属する遺物が検出された。縄文土器が数点出土したが、これは後世につくられた遺構に混入したものである可能性が高い。

SD03（Fig.31－１～12）　須恵器、中世土師器皿、珠洲焼が出土している。１は須恵器杯蓋の天井部片であり、つまみが付くものである。つまみの形態は径が2.4cmの扁平なボタン状を呈する。天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整を施し、器形は天井部にやや狭い平坦面をもち、屈曲し口縁部に至る。帰属時期は８世紀であると考える[1]。２は甕の胴部片であり、器厚は均一にやや薄い。外面は平行線文、内面は同心円文が施されている。帰属時期は細片のため不明である。３は長頸瓶（はそう？）の胴部片であり、器厚はやや薄く、胴部上位は降灰し自然釉がかかる。胴部中位は屈曲し、屈曲部のすぐ上位に２条の、胴部下位に２条の沈線が施されている。帰属時期は８世紀と考えられる。４は壷の肩部片であり、外面は降灰している。降灰により不明瞭であるが、外面肩部に等間隔に沈線が数条施されている。また、内

須恵器杯蓋

８世紀

長頸瓶

８世紀

1　田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　石川県考古学会・北陸古代土器研究会

須恵器甕　面下部に残存10条の沈線が施されている。帰属時期は細片のため不明である。5は甕の口縁部片であり、外面は降灰している。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は外側に丸く収まる。口縁部内面は平坦面を持ち、両端部は丸く突起している。口縁端部下位に2条の沈線がめぐり、その間には2条を一単位とする波状文が施されている。帰属時期は8世紀後半と考えられる。6は土師器碗（Ⅲ）の底部片であり、全体が赤味を帯びている。調整はロクロによる横ナデ成形であり、底部外面は回転糸切りによって平坦に切られている。底部から体部にかけての立ち上がりが急であると考えられる。7は土師器碗（Ⅲ）の底部片であり、底部外面は糸切りによって平坦に切られている。調整はロクロによる横ナデ成形であり、底部から体部にかけて緩やかに立ち上がるものと考えられる。6・7とも帰属時期は底部のみの細片であるため詳細は不明であるが、底部糸切りや、ロクロ成形などから、古代後期の土師器碗[1]、もしくは中世前期（12世紀後半）の中世土師器Ⅲ（RB類）[2]と考えられる。また、6は底部から体部にかけて急に立ち上がることから古代の土師器碗、7は緩やかに立ち上がることから中世土師器Ⅲである可能性が高いと考えられる。8は土師器Ⅲであり、器厚は全体的に厚い。調整は口縁部横ナデを施し、口縁端部は器厚が薄くなり丸みを帯びて収まる。帰属時期は13世紀前半と考えられる。9は土師器Ⅲであり、器厚は全体的に厚い。8と同様に器形・調整方法は同じである。断面に漆痕が見られ、使用時に破損し漆による修復が行われた痕であると考えられる。10は土師器の甕もしくは鍋の胴部片であり、器厚はやや薄い。外面には横方向の刷毛目調整、内面上位は横方向、下位は右上方向の刷毛目調整が施されている。帰属時期は細片のため不明である。

8世紀後半

中世土師器

13世紀前半

土師器甕
鍋

珠洲擂鉢　11は珠洲焼のすり鉢の口縁部片であり、体部はわずかに内湾して立ち上がり、器厚は薄い。口縁端部は玉縁状であり、口唇部には1条の沈線が施されている。内面にはすり目は施されていないことから比較的古い様相であることが窺える。帰属時期は13世紀前半と考えられる。12は珠洲焼の甕の口縁部片であり、全体の焼成が弱いため部分的に剥離しており、黒色の瓦質である。口縁部はやや尖頭状に拡張し口縁端部は平坦面を持ち横に伸びる。胎土には海綿骨針が含まれている。帰属時期は13世紀前半（吉岡編年Ⅱ期）[3]と考えられる。

13世紀前半

須恵器杯蓋　**SD09**（Fig.31－13～21）　13は須恵器の蓋の天井部片であり、器厚はやや薄い。天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整を行っており、内面はロクロによるナデ調整が施されている。天井部中央には宝珠のつまみが付く短頸壷の蓋であると考えられる。帰属時期は9世紀前半と考えられる。14は須恵器の有台杯片である。体部はやや直線的に立ち上がる。高台は削り出しで、体部立ち上がりよりもやや内側にやや低い高台が貼付されている。底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。帰属時期は8世紀後半と考えられる。15は須恵器の有台杯片である。体部はやや内湾して立ち上がり口縁部でわずかに外反する。高台は削り出しで、体部立ち上がりよりもやや内側に貼付されている。底部はヘラ切り後かるくナデ調整が施されている。帰属時期は8世紀後半と考えられる。16は土師器椀の口縁部片であり、色調は全体が赤味を帯びている。器形

9世紀前半

1　田嶋明人　1986「Ⅳ考察－漆町遺跡出土土器の編年考察－3　9世紀後半から13世紀にかけての土器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

2　越前慎子　1996「第Ⅳ章考察1梅原梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器Ⅲの編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－』(財）富山県文化振興財団

3　吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

はやや丸みを帯びて立ち上がり口縁部でわずかに外反する。体部外面には横ナデ調整後に横方向のミガキが施されており、内面は丁寧な横ナデ調整が施されている。比較的丁寧な作りである。17は土師器皿であり、手づくねによる成形後、口縁部には強い一段ナデが施され、底部との境に稜が明瞭に付く。見込みの部分が粗雑でるため手づくね後は未調整である。横ナデだけで大部分をナデることができるため見込みの調整は省略したものと考えられる。帰属時期は13世紀後半と考えられる。18は土師器皿であり、手づくね成形後に口縁部に一段ナデを施され、底部との境に段差が付く。底部外面は未調整で、見込みの部分はかるいナデ調整が施されている。器形は体部丸みを帯びながら立ち上がり、一段ナデの部分から外反し口縁端部は先細りする。帰属時期は14世紀前半と考えられる。19は珠洲焼の鉢の口縁部片であり、やや直線的に立ち上がり、口縁端部は方頭を呈し平坦である。内外面ともロクロによるナデ調整が施されており、すり目は施されていない。帰属時期は13世紀前半と考えられる。20は須恵器の壷の口縁部片であり、内面には一部緑色の自然釉が降灰している。頸部はやや直線的に立ち上がり、口縁端部は方頭を呈し平坦である。21は龍泉窯系青磁碗であり、器面全体に暗緑色の釉薬が施され、胎土は密で精良である。器形はやや丸みを帯びて立ち上がり、器厚が徐々に薄く口縁端部で先細りする。内面にはヘラ状工具による輪花文が施されている。帰属時期は12世紀後半から13世紀初頭（森田編年Ｉ－２）[1]と考えられる。　（野原・小川）

（２）下層遺構出土遺物　(Fig. 32～43)

縄文土器（Fig. 32・33）　本遺跡からは、約750点の縄文土器の破片が出土した。調査区全体から出土しているが、多くは磨耗が激しい小破片であった。一括した縄文土器が３箇所から出土している。時期的には縄文中期後半～後期後半の範囲と考えられる。時期は縄文後期前葉が主体であるが、縄文中期後半、後期後半のものが認められる。

SK353（Fig. 32）　一括の縄文土器が覆土から出土している。24は気屋式段階の土器で、大小の山形突起による、波状口縁の深鉢であると考えられる。口縁部には３条の凹線をめぐらせ、やや太めの縄文を縦方向に転がしている。胴はやや球体に膨らみ、波状突起の特徴や口縁部の文様の喪失、器形等から、縄文後期前葉の気屋式相当の土器と考えられる。

SP245（Fig. 32）　縄文土器が覆土から出土している。25は口縁部分で、斜縄文と刺突文と思われる文様が見られるが、磨耗が激しく時期は不明である。

SP354（Fig. 32）　縄文土器が覆土から出土している。26はやや厚手の深鉢の口縁部分である。無文の口縁部に粘土紐を波状に貼り付け、ヘラ状工具で刻みを施している。内面は横位のナデである。縄文中期後半の古府式段階と考えられる。

打製石斧　**SP265**（Fig. 34）　打製石斧の一部が、遺構の底面から折り重なって２点出土している（Fig. 34）。基部として判断したが、刃部の可能性も考えられる。42は花崗岩製で、側縁部に刃潰しを行っている。形態は撥形である。43は安山岩製で、両側縁部の欠損部分に近い両側縁部に、加工が行われている。使用痕は見られない。

磨製石斧　(Fig. 34)　本遺跡から２点の磨製石斧が出土している（Fig. 34）。いずれも基部の部分は欠

1　森田　勉　1981「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究 NO. １』日本貿易陶磁研究会

損している。44は遺物包含層から出土している、流紋岩製の磨製石斧である。風化が激しいため脆い状態になっており、使用痕等を確認することはできない。刃部は大きく欠損している。

SK475（Fig.34）　磨製石斧は覆土から出土している。45は粘板岩製の磨製石斧である。刃部は欠損しており使用よって生じたと考えられる。

打製石斧　未製品は2点出土している（Fig.34）。自然円礫に打撃を加え、素材となる剥片を製作している。46は横長剥片の素材から、右側縁部に調整を行ったと考えられる未製品である。右側縁部中央には刃潰しが確認できる。47は自然円礫を打撃した際に生じる、バルブの部分である貝殻状剥片である。打撃した部分に若干加工を行っていると考えられる。（野原・阿部）

未成品

（3）遺物包含層出土遺物　（Fig.31～43）

白　磁（Fig.31－22・23）　22は白磁の合子であり、口縁端部は若干欠損している。受け部及び底部以外は白色の釉薬が施され、胎土は密で精良である。内面底部はロクロによるナデ調整の跡がみられる。23は白磁の碗であり、胎土は密で精良であり、内外面に白色の釉薬が施され、外面体部下位は露胎とする。器形は外傾しながら立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈する。帰属時期は12世紀中頃（森田編年Ⅳ－2）[1]と考えられる。

縄文土器（Fig.32・33）　Y300・X420付近で縄文土器が集中して出土している。27～29はその付近で出土した縄文土器の口縁部である。いずれも、縄文後期前半の気屋式と考えられる。27は口唇部から口縁部、胴部にかけて粒の大きい縄文が施されている。口縁部から頸部には、ヘラ状工具による矢羽状連続刺突文が4段押し引かれる。内面は指による横ナデである。28・29も口唇部から口縁部、胴部にかけて粒の大きな縄文が施されている。29は頸部にヘラ状工具による2～3段の矢羽状刺突を連続させているが、28は破損のため部分的に1段のみ確認できる。

串田新式　30～32は、縄文中期後葉の串田新式と考えられる胴部の破片である。30・32は隆帯区画を施し、葉脈状の沈線が施されている。31は葉脈状と考えられる沈線が施されている。

気屋式　33・35～37は縄文後期前半の気屋式相当と考えられる口縁部である。33は口唇部に沈線で区画を施し、区画内の隆帯部分に刻みを施している。頸部には矢羽状刺突文が2段確認できる。内面はミガキを施している。35は口縁から頸部が屈曲する深鉢である。波状口縁を呈すると考えられ、1条の沈線を隔てて上位の口唇部分に縄文を施す。下位にはやや幅広の刻みが施され、頸部外面の無文部は磨かれている。37は丁寧に縄文が施され、内面はミガキである。13は口縁がやや内湾する浅鉢で、口唇部に3条の沈線を巡らす。内面は磨かれている。胴部は磨耗が激しく、文様は判然としない。

磨消縄文　38～40は縄文後期後半の磨消縄文の深鉢と考えられる。斜縄文を施した後に沈線で区画を行い、区画によって縄文を磨り消している。38・40は口縁部であるが、波状口縁を呈すると考えられる。

1　森田　勉　1995「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として」『大宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集－』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会

41はY310・X345のグリッドで出土した一括の土器である。深鉢であるが磨耗が激しく、横位の調整痕は確認できたが、文様は判然としないため時期は不明である。

縄文土器の底部は数点出土している。34は胴部に縄文が施され、底部に網代痕が確認できるが、底部の大半は磨耗が激しく文様は判然としない。

打製石斧　(Fig.34～43)　本遺跡から出土した打製石斧73点中の70点は、５層（遺物包含層）からの出土である。なお、風倒木痕に混入していた58・80の打製石斧についても、遺物包含層に含めることにする。

昨年も同様に５層（遺物包含層）から、52点の打製石斧が出土している。打製石斧の出土位置は調査区全体に点在している。５層（遺物包含層）からは、打製石斧のほかに縄文土器が出土しているが、弥生時代の遺物は出土していない。出土した縄文土器の年代から、縄文時代の中期後半から後期後半の範囲内になると考えられるが、打製石斧の明確な時期確定は難しい。

石材の種類は安山岩が半数を占め、砂岩・溶結凝灰岩・ひん岩が主に使用されている。付近で容易に入手できる自然礫であると考えられる。打製石斧の形態は大きく３種類に分類した。短冊型・Ⅰ類（Fig.35～37）、撥型・Ⅱ類に分類した。短冊型・Ⅰ類は、側縁部が基部から刃部にかけてほぼ平行で、基部と刃部の幅がほぼ同じものとした。撥型・Ⅱ類は、基部幅より刃部幅の方が大きく、側縁部が刃部にしたがってほぼ直線的に開くⅡａ類（Fig.38～39）側縁部がくびれて（抉り）いるものⅡｂ類（Fig.40～41）に分類を行った。大きく破損したもの、形態判別の難しいものは破損品として分類している。出土した打製石斧では、両面加工を行っている打製石斧は３点のみである（60・65・100）。大半は自然円礫を分割して製作を行い、円礫側縁部の曲がりを利用して、刃部を形成するものが多く見られる。打製石斧の素材として利用する、２次加工前の剥片はすべて横長剥片である。中には剥片末端までバルブに覆われる貝殻状剥片も見られた[1]。遺存状態の良い完形品は半数で、多数の石斧は使用痕が確認される。

1　馬場伸一郎　2004「黒河中老田遺跡・黒河尺目遺跡から出土した石器群について」『黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡発掘調査報告書』（財）富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所

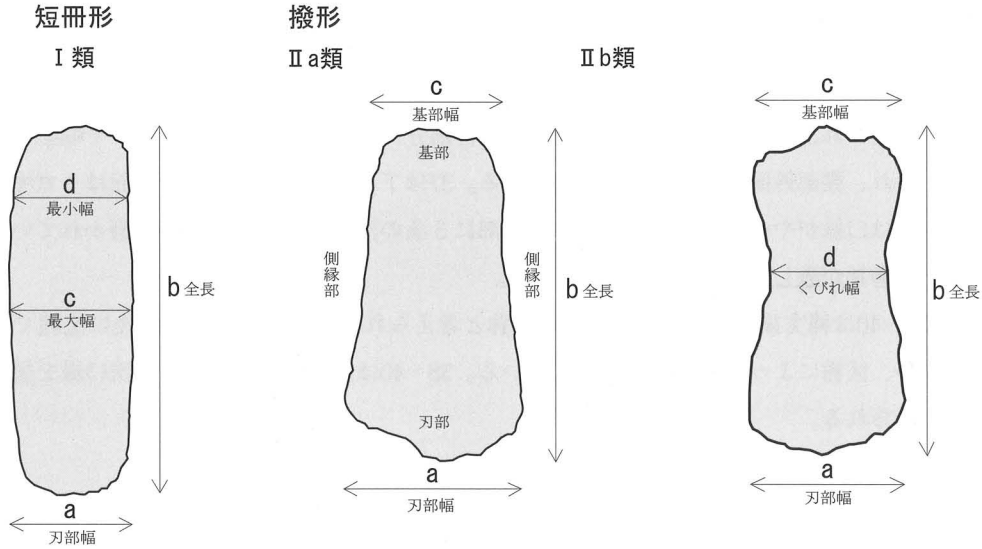


Fig. 30　各類型計測部位とその名称

Ⅰ類（Fig.35～37）　56～68・93～93はⅠ類である。最大長15cm以内・幅5cm程度の打製石斧が半数を占める。刃部は磨耗しているものが大半で、20には縦方向の使用痕が見られる。側縁部には刃潰しが見られる。60は両面調整が行われ、側縁部には装着痕と見られる弱いくびれが見られる。65も両面調整が行われているが、風化が著しく加工痕・使用痕が不明瞭であった。66には装着部分と見られる弱いくびれが見られ、素材として利用している剥片は、バルブ部分を用いた貝殻状剥片である。62・68は最大長が20cm以上・幅7cm以上・最大厚3cm以上の、Ⅰ類の中では大型の打製石斧である。刃部の加工は確認できず、使用した時の刃こぼれが見られる。21は縦方向の使用痕が確認できる。刃部形態は15が凹刃、21は片平刃に近い形態だが、素材となる剥片の端辺をそのまま利用しているためである。

Ⅱa類（Fig.38～39）　69～80・96・97はⅡa類である。破損したものが多く見られる。69・70・72～74・96・97は側縁部に弱いくびれがあるが、刃部はほぼ直線的に開く様相なのでⅡa類とした。69・75・77・80は剥片の端辺を利用しており、刃部に加工は施されていない。27は刃部が尖刃に近い形態で、刃部中心から左側部分・側刃角の範囲までの磨耗が激しく、刃部中央から左部分を集中して使用していたと考えられる。

Ⅱb類（Fig.40～41）　81～92はⅡb類である。遺存率の高いものは81～83・87で、破損しているものが大半である。刃部は磨耗が激しく、使用した時の刃こぼれや欠損が見られる。81・87は形態が類似しており、最大長10cm・刃部幅5cmのⅡb類の中では小型の打製石斧である。82・85は刃部の損傷は激しいが、基部・刃部方向から直線的にくの字にくびれ、刃部幅とくびれ幅の比率が大きな形態である。92も刃部の損傷が激しいが、くびれが強い分銅形に近い形態の可能性も考えられる。

破損品　破損品も多く出土している（Fig.42～43）。刃部・基部が残存するものが大半である。106・113・114（113・114は写真図版のみ）は刃部・基部も欠損しており、基部が破損しても再生して使用していたと想像させる。刃部部分の破損品はいずれも磨耗が激しい。111は刃部右側の磨耗が非常に激しく、使用方法に特徴が見られる。100はシルト岩製で両面加工を行っている。厚みが1.25cmと非常に薄く特徴的である。　（野原・阿部）

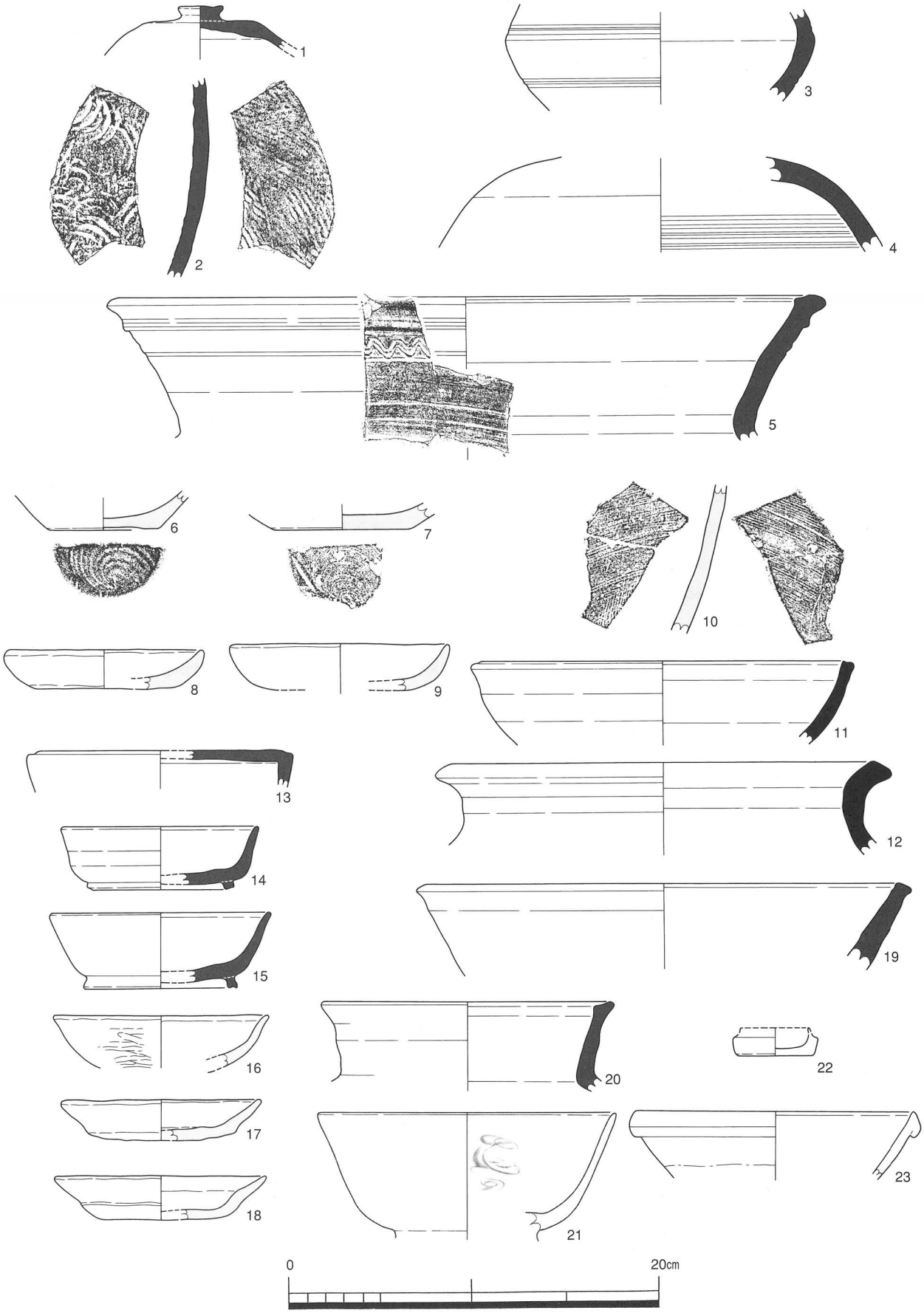


Fig. 31　上層遺構・遺物包含層出土遺物実測図（Scale＝１／３）

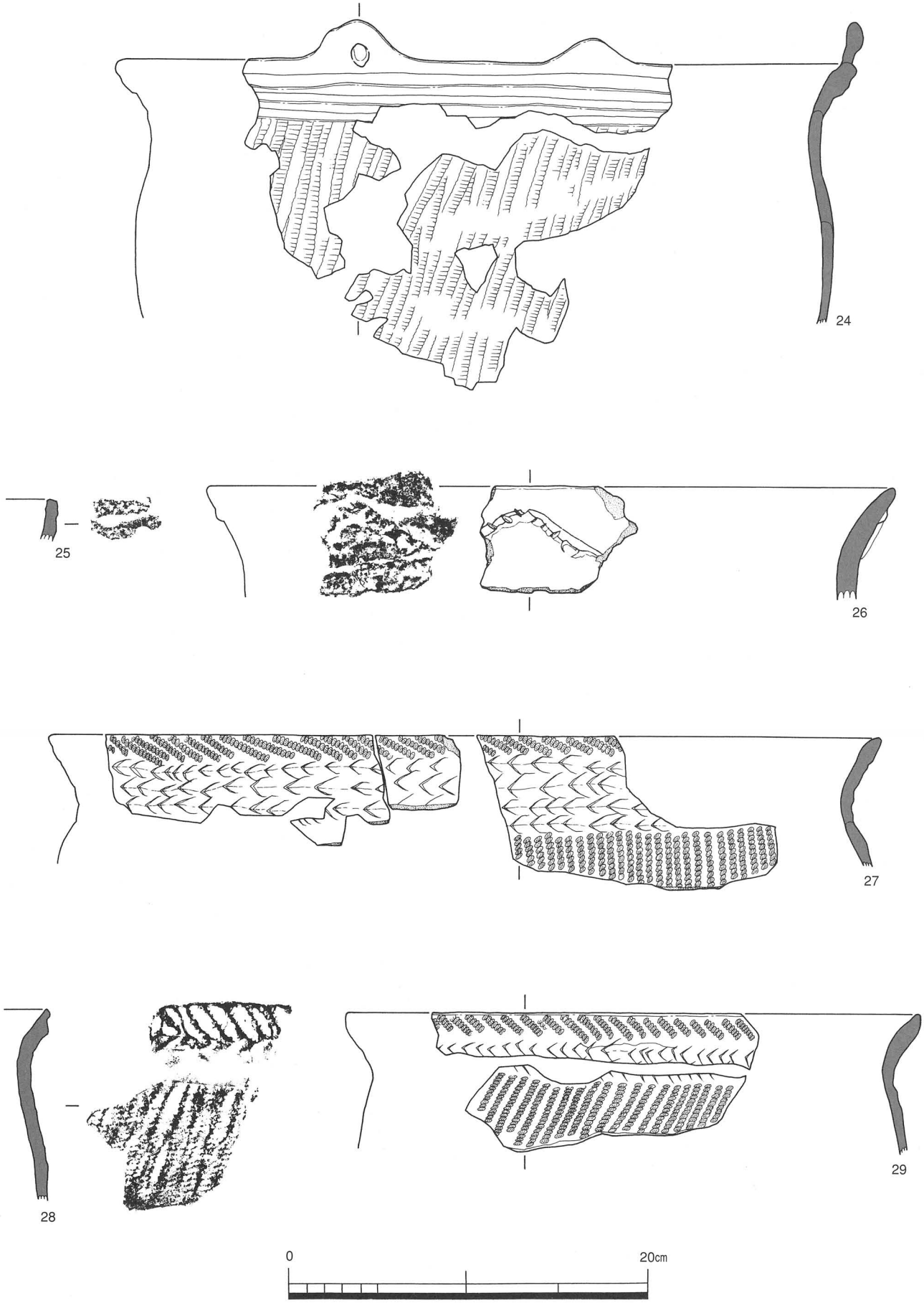


Fig. 32　遺構・遺物包含層出土遺物実測図（1）　　縄文土器（Scale＝1／3）

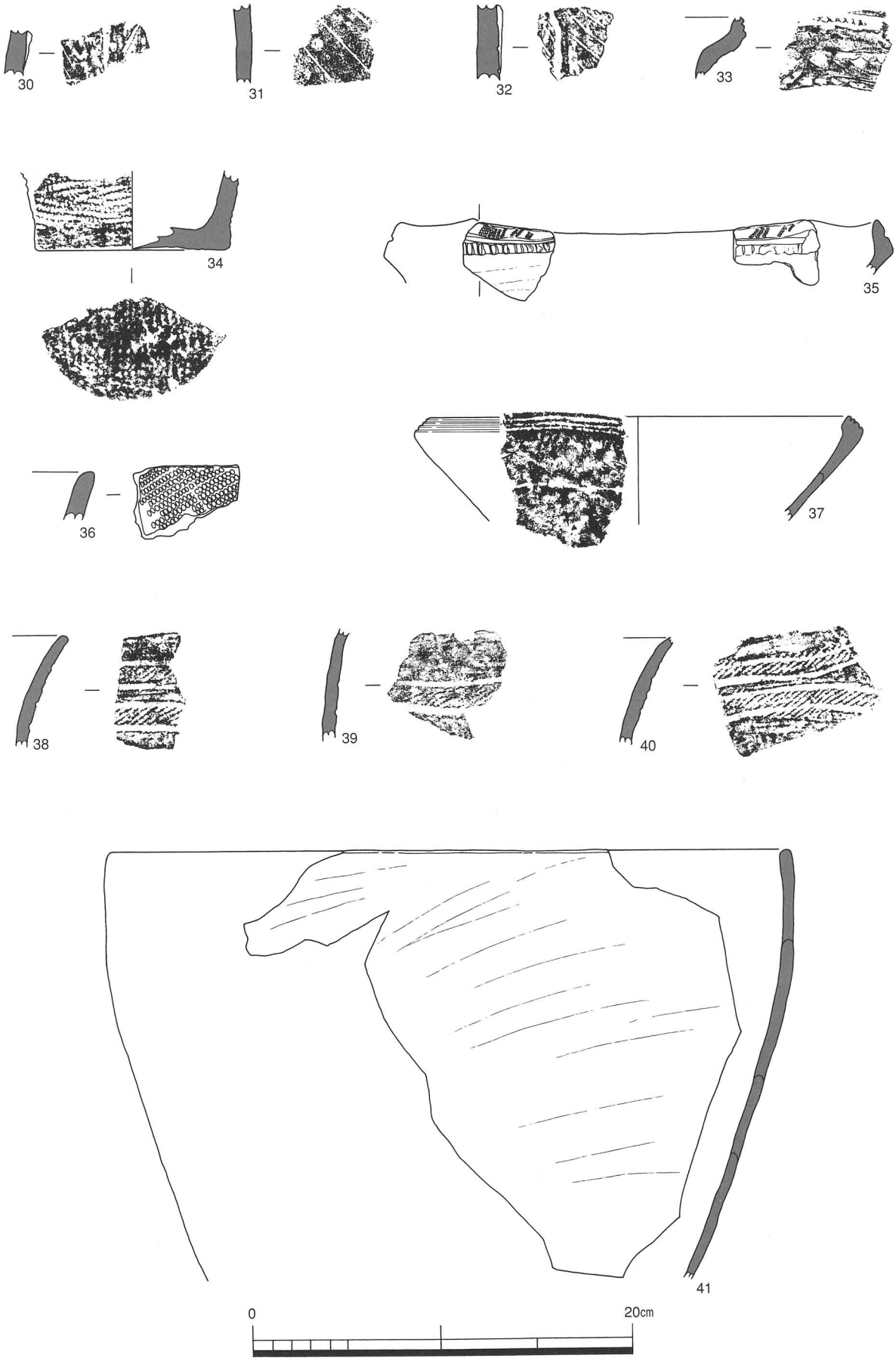


Fig. 33　遺物包含層出土遺物実測図（２）　　縄文土器（Scale＝１／３）

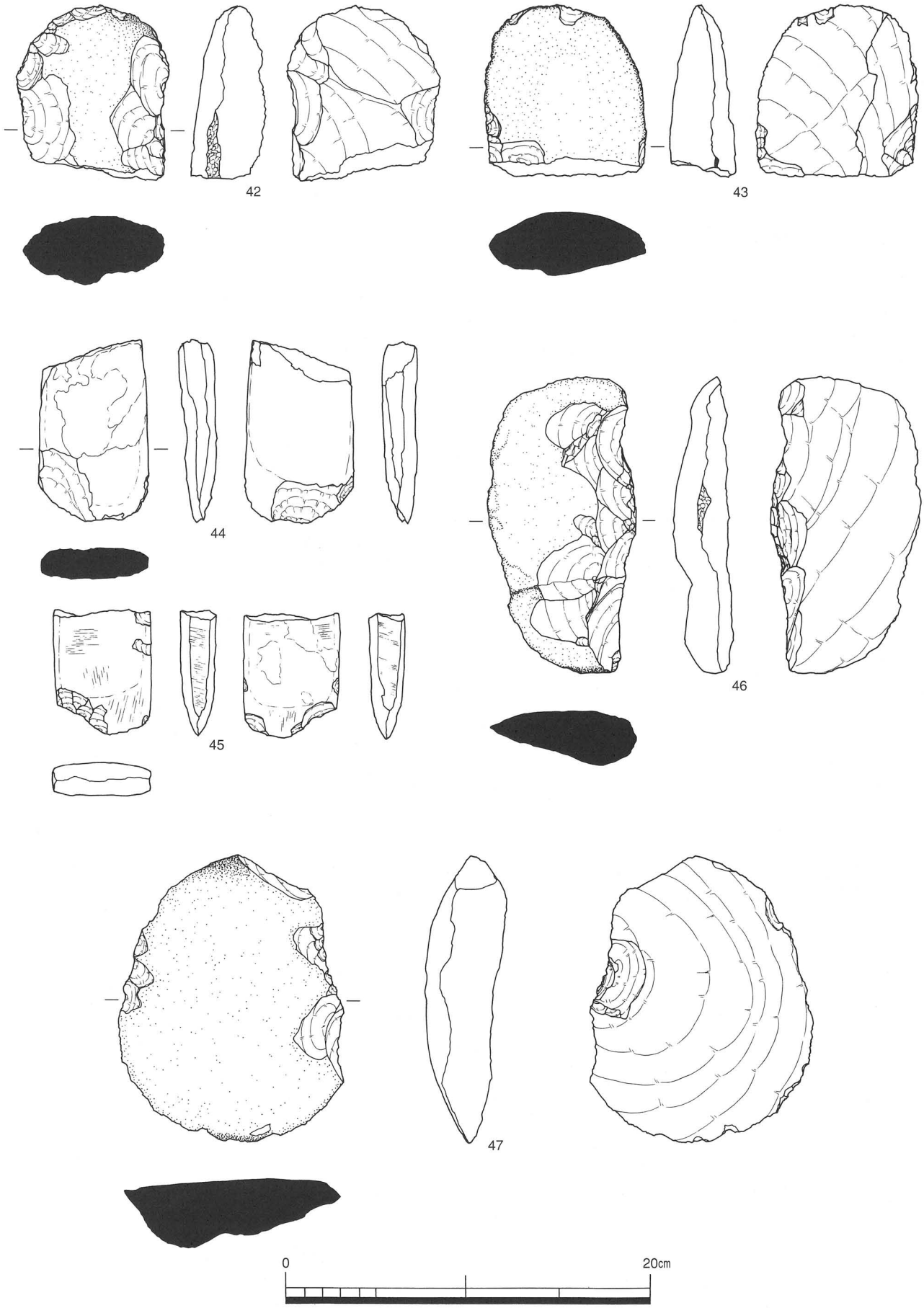


Fig. 34　遺物包含層出土遺物実測図（3）　打製石斧（SP265内磨製石斧 未製品）（Scale＝1／3）

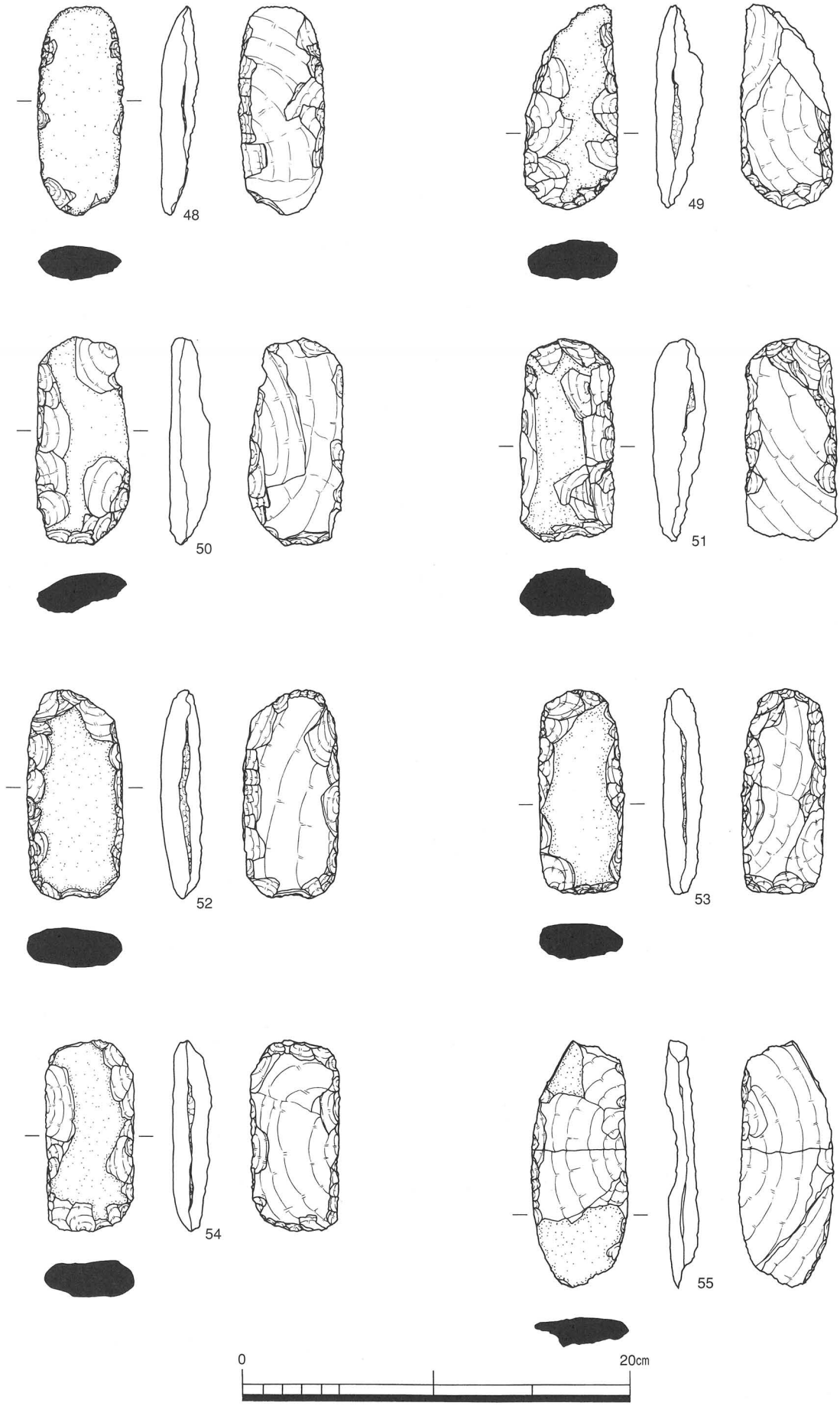


Fig. 35　遺物包含層出土遺物実測図（４）　　打製石斧（Ⅰ類）（Scale＝１／３）

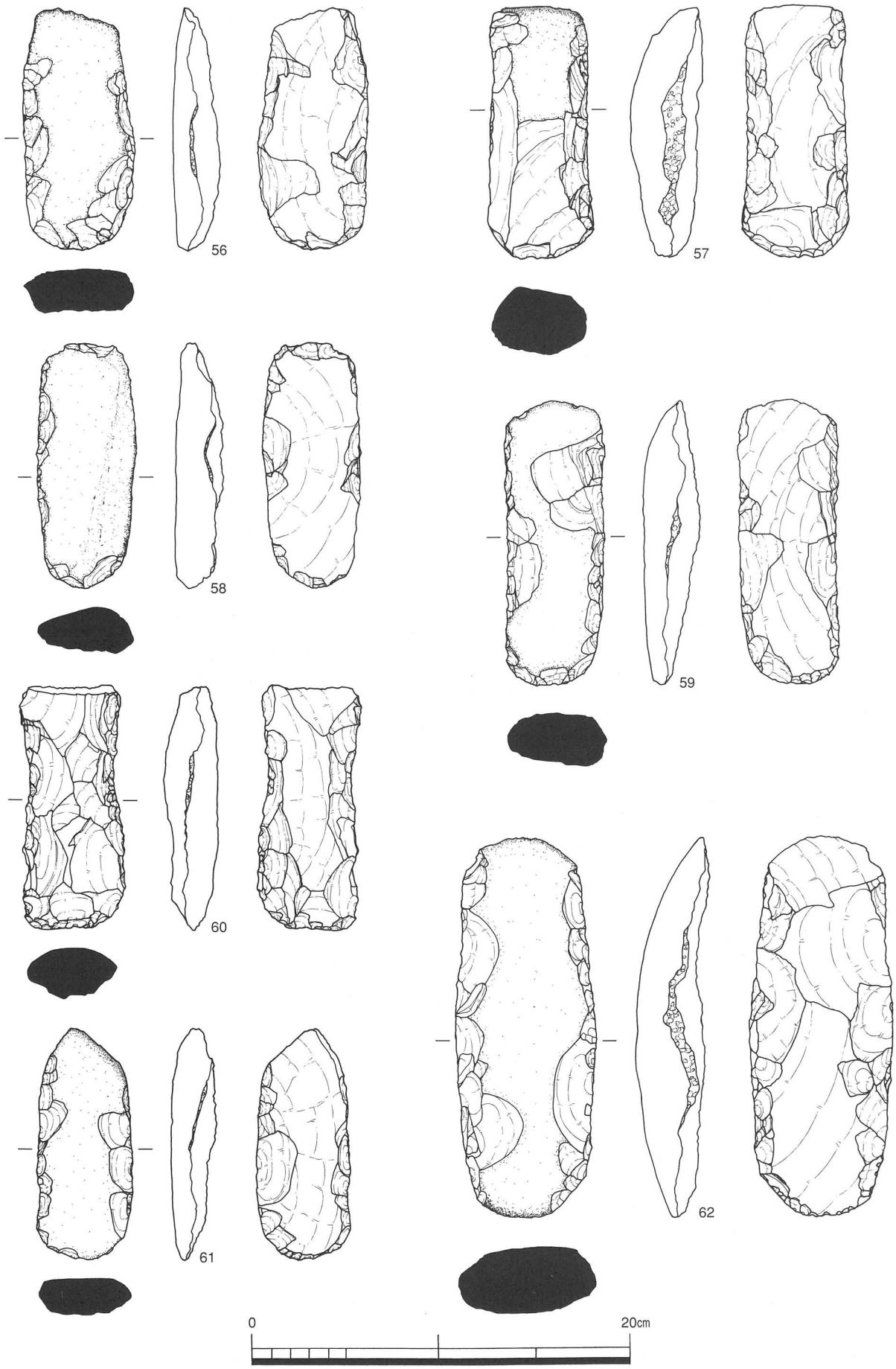


Fig. 36　遺物包含層出土遺物実測図（5）　　打製石斧（Ⅰ類）（Scale＝1／3）

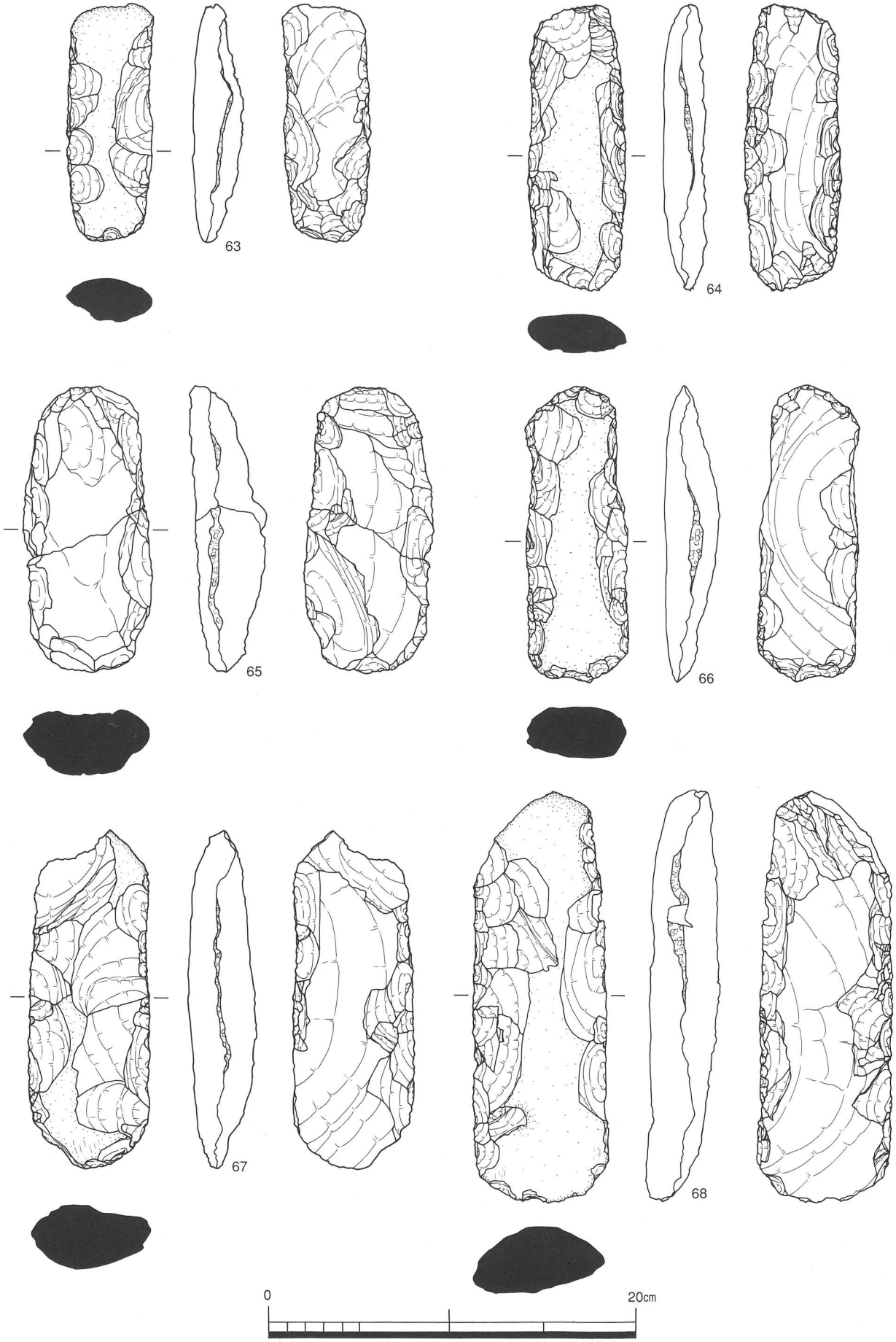


Fig. 37　遺物包含層出土遺物実測図（６）　打製石斧（Ⅰ類）（Scale＝１／３）

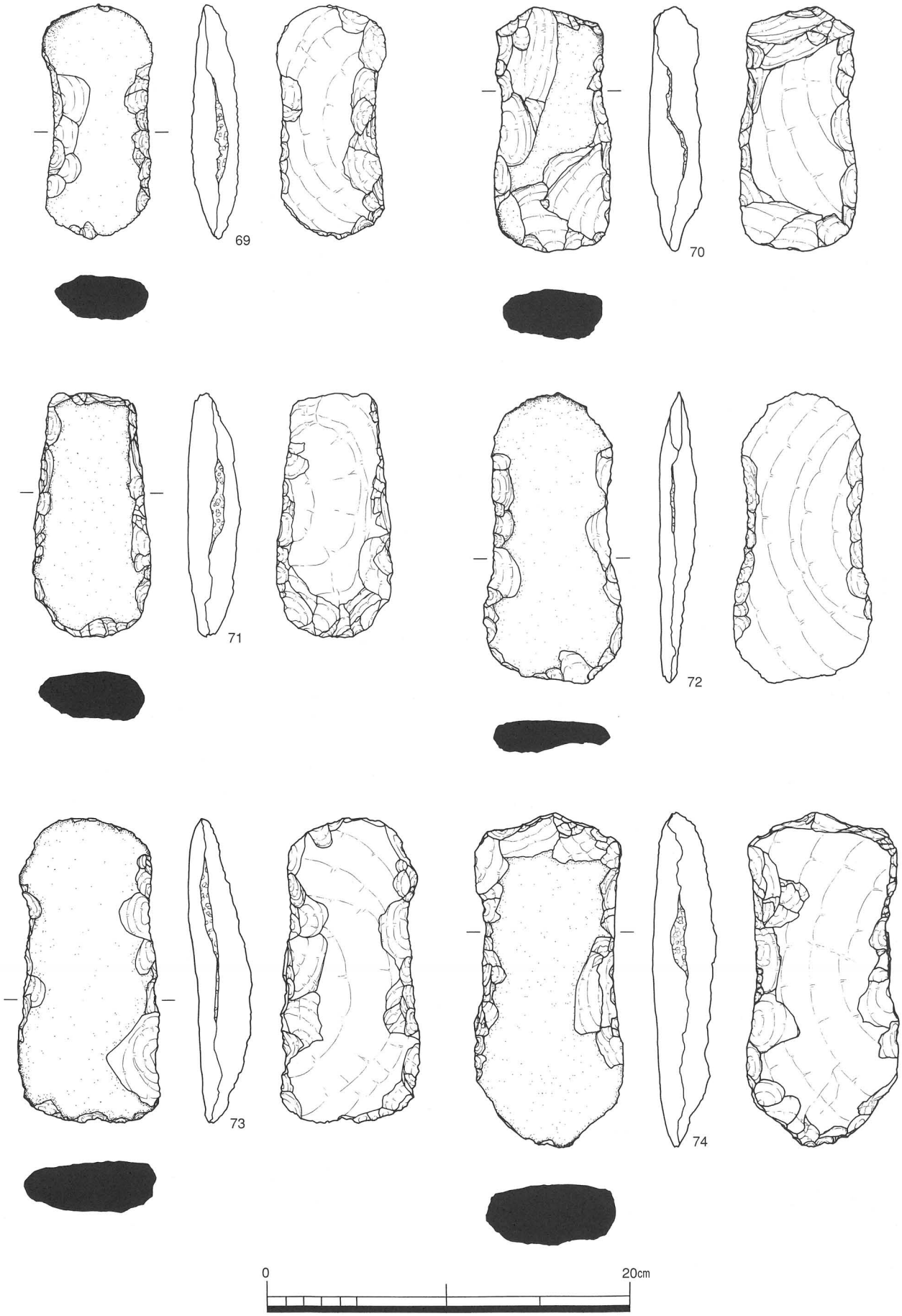


Fig. 38　遺物包含層出土遺物実測図（7）　　打製石斧（Ⅱ a 類）（Scale＝1／3）

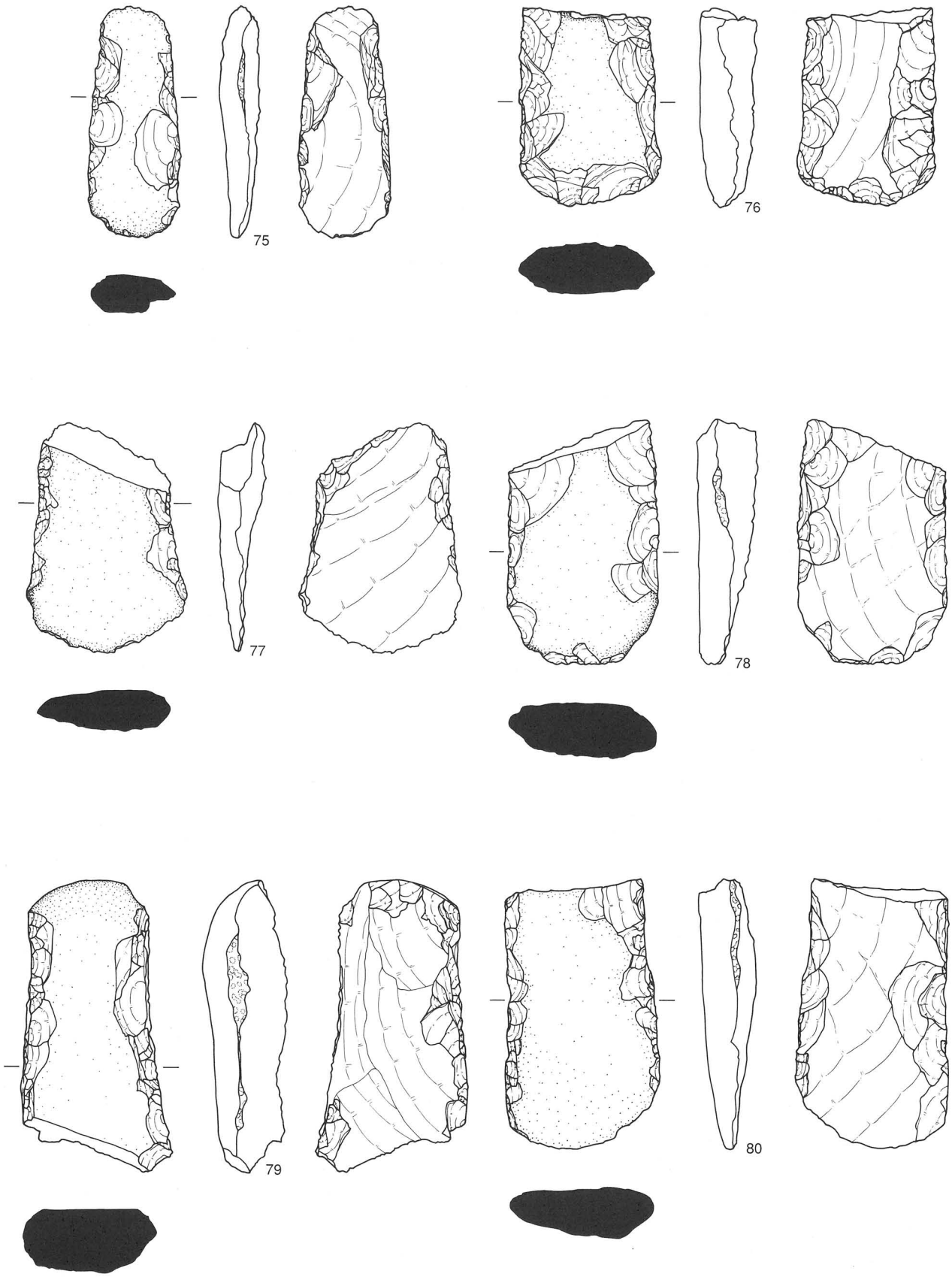


Fig. 39　遺物包含層出土遺物実測図（８）　　打製石斧（Ⅱａ類）（Scale＝１／３）

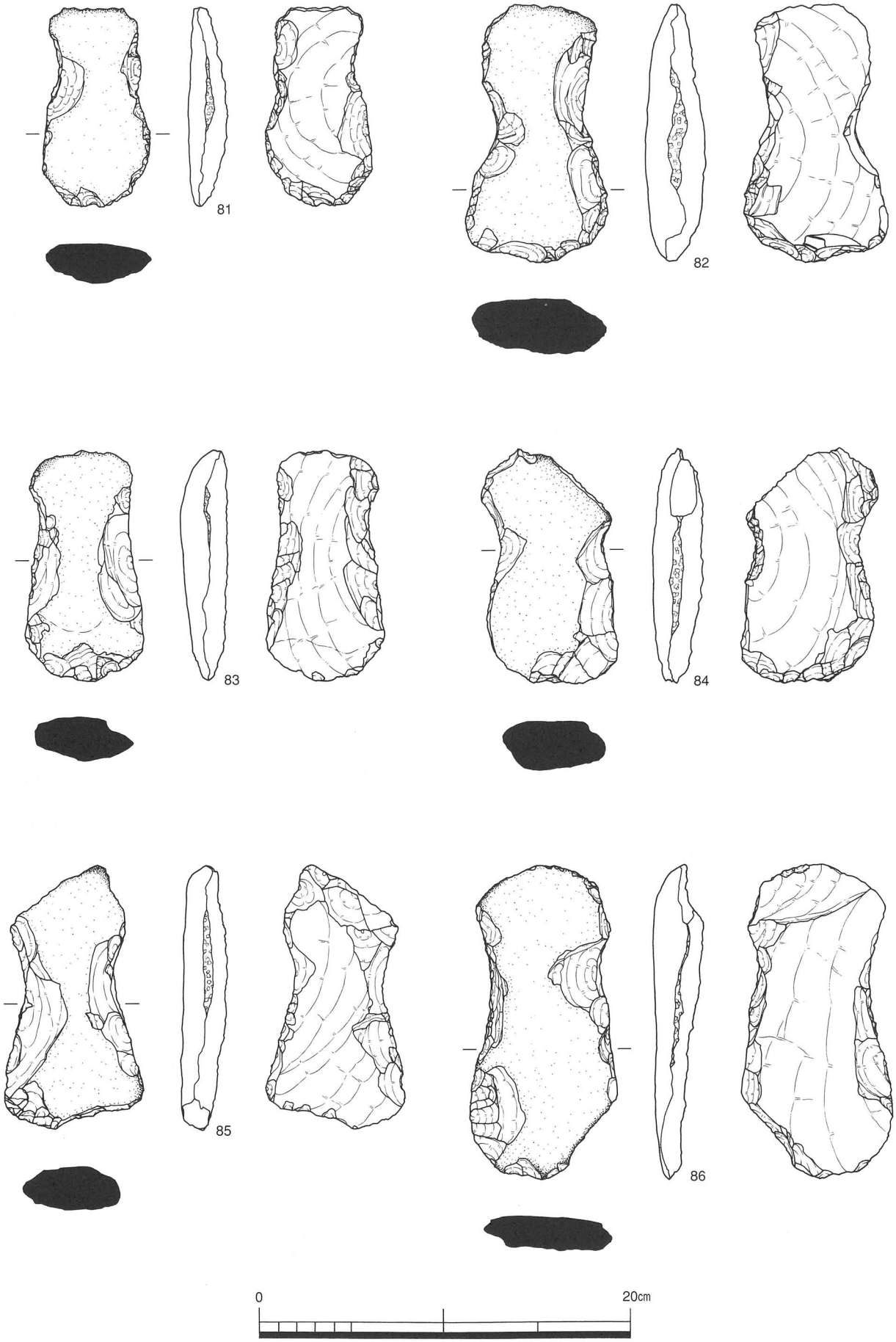


Fig. 40　遺物包含層出土遺物実測図（9）　　打製石斧（Ⅱ b 類）（Scale＝1／3）

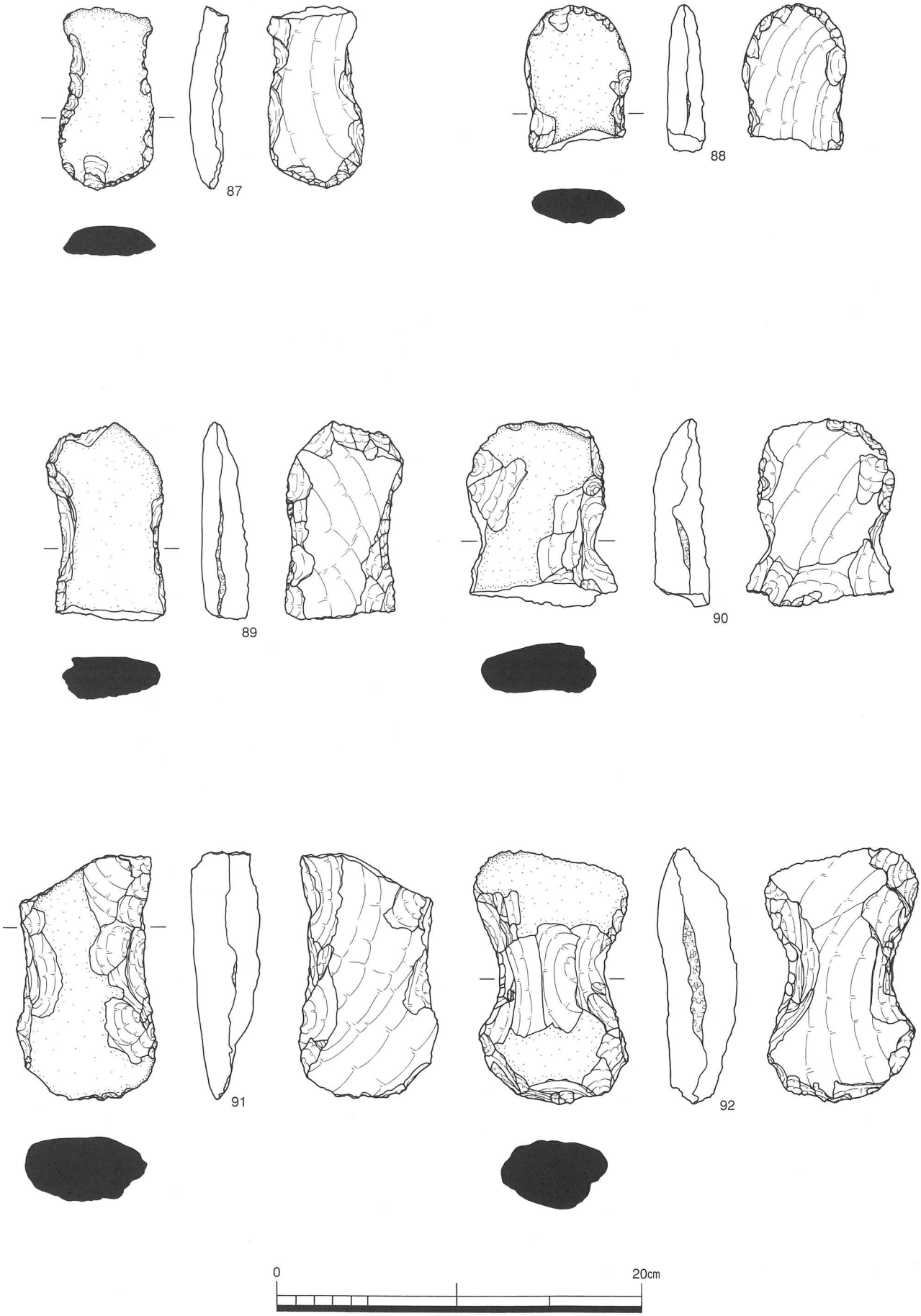


Fig. 41　遺物包含層出土遺物実測図（10）　打製石斧（Ⅱ b 類）（Scale＝１／３）

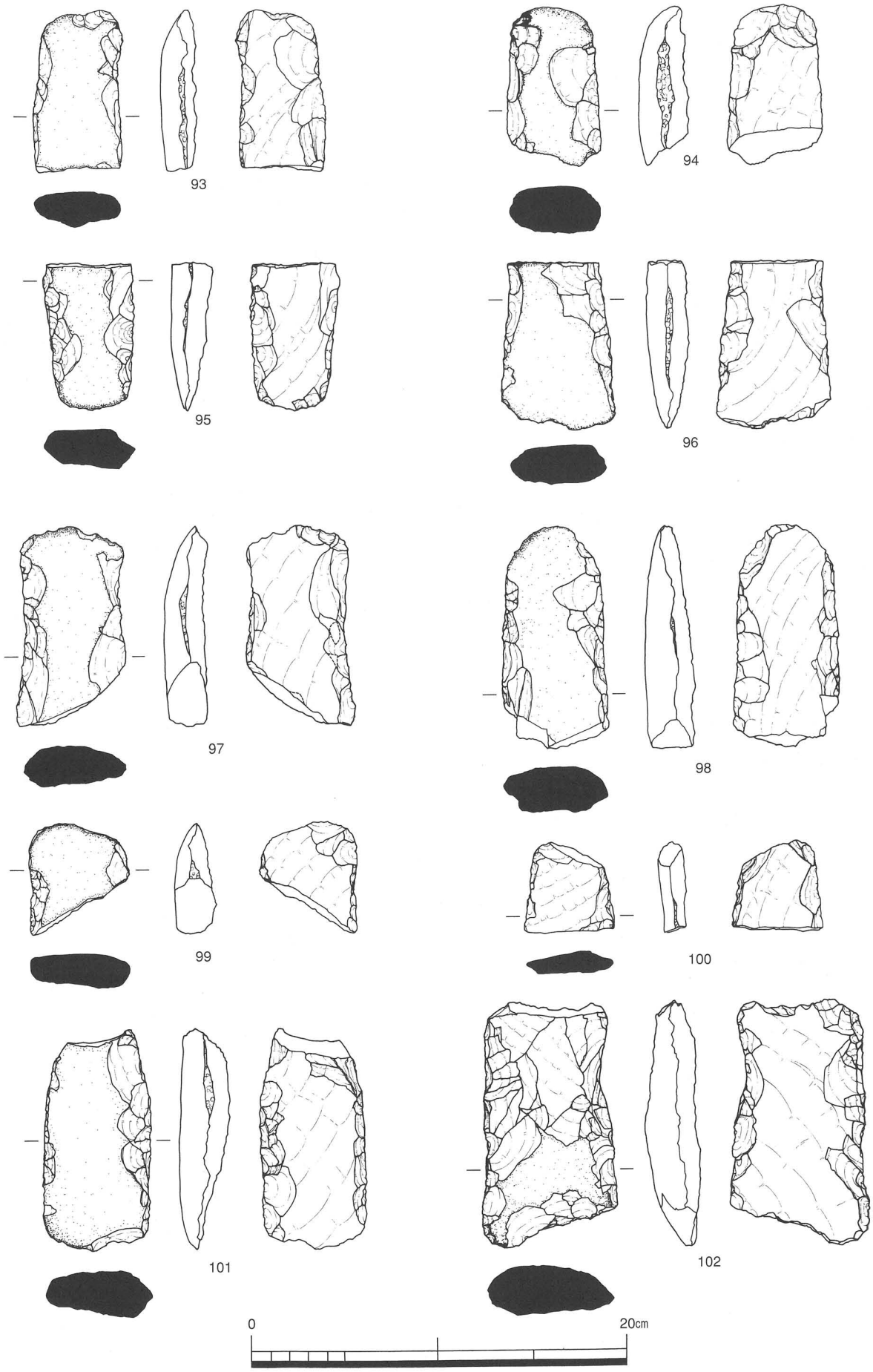


Fig. 42　遺物包含層出土遺物実測図（11）　　打製石斧（破類）（Scale＝1／3）

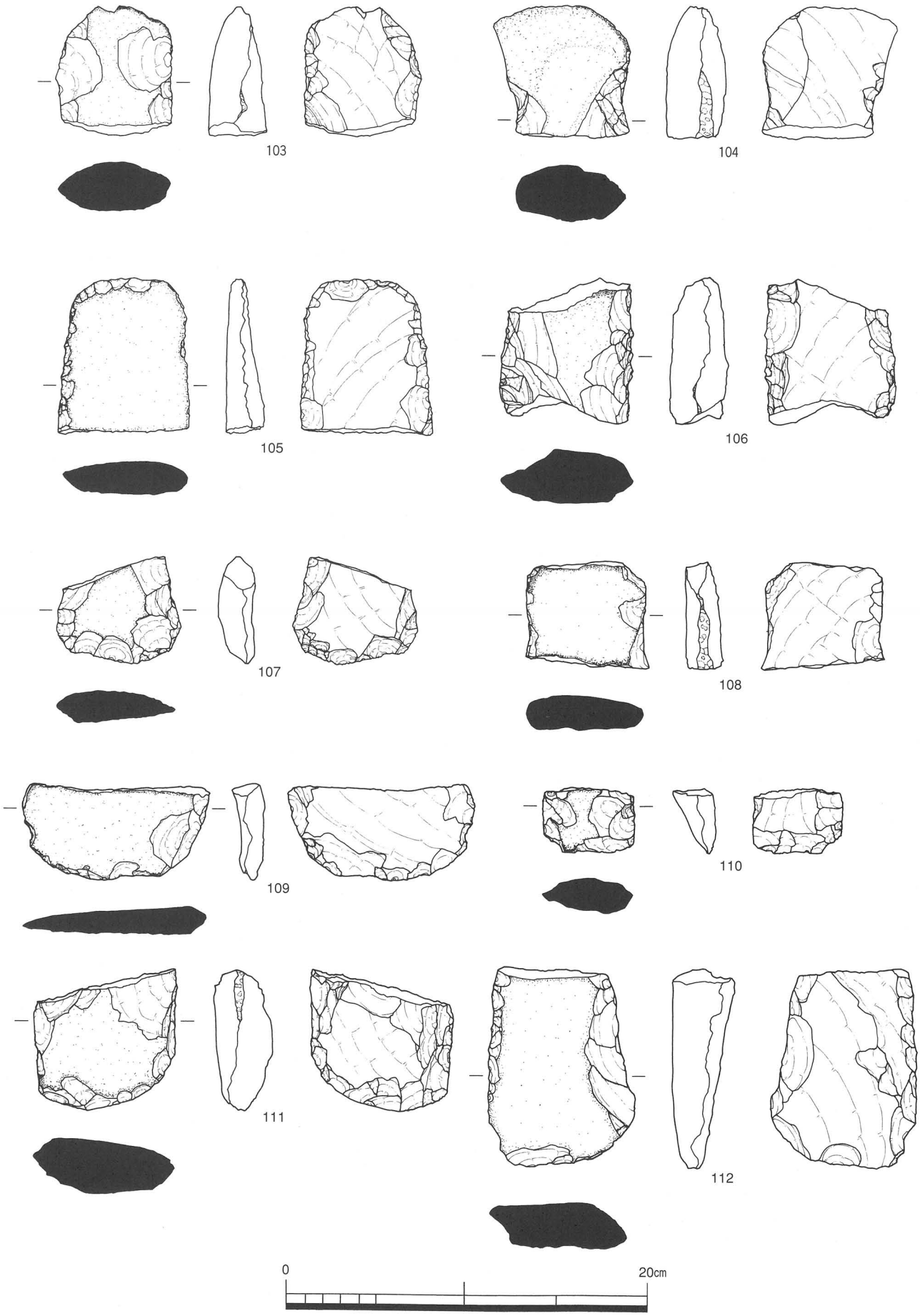


Fig. 43　遺物包含層出土遺物実測図（12）　　打製石斧（破類）（Scale＝１／３）

Tab. 16　遺物観察表（土器・陶磁器類）

図版番号	遺物番号	出土地点 出土層位	種類 器種	口径 （残存率）	底径 （残存率）	器高 （cm）	調　整・施　文	胎土	色調	備　考
	1	SD03	須恵器 杯蓋				内面ーロクロナデ・ロクロ削り 外面ーロクロナデ・ロクロ削り	密	10Y6/1　灰色 10Y6/1　灰色	8世紀
	2	SD03	須恵器 甕				内面ータタキ（同心円文） 外面ータタキ（平行線文）	密	10Y6/1　灰色 10Y3/2　オリーブ黒色	
	3	SD03	須恵器 ハソウ				内面ーロクロナデ 外面ーロクロナデ	密	10Y7/1　灰白色 10Y5/2　オリーブ灰色	8世紀
	4	SD03	須恵器 壺				内面ーロクロナデ 外面ーロクロナデ	密	10Y7/1　灰白色 7.5Y4/3　暗オリーブ色	
	5	SD03	須恵器 甕	38 10%			内面ーヨコナデ 外面ーヨコナデ・波状文・沈線	密	7.5Y5/2　灰オリーブ色 7.5Y3/2　オリーブ黒色	8世紀後半
	6	SD03	土師器 碗（皿）		7.6 20%		内面ーロクロヨコナデ 外面ーロクロヨコナデ・底部回転糸切	密	7.5YR7/8　黄橙色 7.5YR7/8　黄橙色	古代後期もしくは 12世紀後半
	7	SD03	土師器 皿（碗）		6 50%		内面ーロクロヨコナデ 外面ーロクロヨコナデ・底部回転糸切	やや密	7.5YR7/4　にぶい橙色 7.5YR7/4　にぶい橙色	古代後期もしくは 12世紀後半
	8	SD03	土師器 皿	10.6 30%	6.8 35%	2.1 100%	内面ーヨコナデ 外面ーヨコナデ	密	7.5YR7/8　黄橙色 7.5YR7/8　黄橙色	13世紀前半
	9	SD03	中世土師器 皿	11.8 20%	7 35%	2.5 100%	内面ーヨコナデ 外面ーヨコナデ	密	10YR6/3　にぶい黄橙色 10YR7/6　明黄褐色	13世紀前半
	10	SD03	土師器 甕（鍋）				内面ーヨコハケ 外面ーヨコハケ、タテハケ	密	2.5Y7/4　浅黄色 2.5Y7/4　浅黄色	
	11	SD03	珠洲焼 すり鉢	19.8 30%			内面ーロクロナデ 外面ーロクロナデ	密	5Y5/1　灰色 5Y6/1　灰色	13世紀前半
Fig. 31	12	SD03	瓦質土器 甕	23.2 35%			内面ーヨコナデ 外面ーヨコナデ	やや密	N3/1　暗灰色 N3/1　暗灰色	13世紀前半
	13	SD09	須恵器 蓋	14.4 25%			内面ーロクロナデ 外面ーヘラ削り後ナデ	密	10Y6/1　灰色 10Y6/1　灰色	9世紀前半
	14	SD09	須恵器 坏	10.6 30%	8 35%	3.4 100%	内面ーロクロナデ 外面ー底部ヘラ切り後ナデ	密	10Y6/1　灰色 10Y6/1　灰色	8世紀後半
	15	SD09	須恵器 坏	11.8 15%	8.2 30%	4.2 100%	内面ーロクロナデ 外面ー底部ヘラ切り後ナデ	密	5Y5/1　灰色 5Y5/1　灰色	8世紀後半
	16	SD09	土師器 碗	11.4 10%	6	1.9	内面ーヨコナデ 外面ーヨコナデのちミガキ	密	2.5YR6/6　橙色 2.5YR5/8　明赤褐色	
	17	SD09	中世土師器 皿	10.8 20%	8 20%	2.2 100%	内面ー手づくね成形後一段ナデ 外面ー手づくね成形後一段ナデ	密	10YR8/6　黄橙色 10YR8/6　黄橙色	13世紀前半
	18	SD09	土師器 皿	11.4 20%	6.4 20%	2.3 100%	内面ー手づくね成形後一段ナデ 外面ー手づくね成形後一段ナデ	密	7.5YR8/6　浅黄橙色 7.5YR8/6　浅黄橙色	14世紀前半
	19	SD09	珠洲焼 鉢	25.4			内面ーロクロナデ 外面ーロクロナデ	密	5Y5/1　灰色 5Y5/1　灰色	13世紀前半
	20	SD09	須恵器 壺	14.6 35%			内面ーヨコナデ 外面ーヨコナデ	密	5Y7/3　浅黄色 10Y7/1　灰白色	
	21	SD09	青磁 有台椀	16.2 10%			内面ーロクロナデ・ヘラ状工具による輪花文 外面ーロクロナデ	緻密	10Y5/2　オリーブ灰色 10Y5/2　オリーブ灰色	12世紀後半から 13世紀初頭
	22	X425Y390 5上層	白磁 合子		4 40%		内面ーロクロナデ 外面ーロクロナデ	緻密	10Y7/1　灰白色 10Y7/1　灰白色	
	23	X390Y325 5上層	白磁 玉縁碗	15 15%			内面ーロクロナデ 外面ーロクロナデ	緻密	10Y7/1　灰白色 10Y7/1　灰白色	12世紀中頃

Tab. 17　遺物観察表（縄文土器）

図版番号	遺物番号	出土地点 出土層位	種類 器種	口径 （残存率）	底径 （残存率）	器高 （cm）	調　整・施　文	胎土	色調	備　考
Fig. 32	24	SP353 フク土上層	縄文土器 深鉢	40.1	—	(20.6)	外面—縄文　凹線	普通	外面—10YR7/4　にぶい黄橙色 外面—7.5YR7/6　橙色	気屋式相当 後期前葉
	25	SP245 フク土	縄文土器 （鉢）	—	—	—	外面—刺突文　縄文	普通	外面—10YR5/6　黄褐 内面—10YR5/4　にぶい黄褐	
	26	SP354 フク土上層	縄文土器 （深鉢）	(19.0)	—	—	外面—波状の貼付文に刻み 内面—ナデ	普通	外面—2.5Y7/3　浅黄色 内面—10YR6/6　明黄褐色	古府式 中期後半
	27	X415　Y315 5層（包含層）	縄文土器 深鉢	(46.3)	—	—	外面—縄文　矢羽状刺突（4段）	普通	外面—10YR6/4　にぶい黄橙色 内面—7.5YR6/6　橙色	
	28	X420　Y295 5層（包含層）	縄文土器 深鉢	(31.7)	—	—	外面—縄文　矢羽状刺突	普通	外面—7.5YR6/6　橙色 内面—7.5YR5/3　にぶい橙色	気屋式相当 後期前半
	29	X420　Y295 5層（包含層）	縄文土器 深鉢	(31.7)	—	—	外面—縄文　矢羽状刺突（2～3段）	普通	外面—7.5YR6/6　橙色 内面—7.5YR5/3　にぶい橙色	気屋式相当 後期前葉
Fig. 33	30	X395　Y290 5層（包含層）	縄文土器 （深鉢）	—	—	—	外面—葉脈状文　（隆帯　沈線）	普通	外面—7.5YR6/8　橙色 内面—10YR6/4　にぶい黄橙色	串田新II式 中期後半
	31	X325　Y310 5層（包含層）	縄文土器 （深鉢）	—	—	—	外面—葉脈状文　（沈線）	普通	外面—7.5YR6/6　橙色 内面—7.5YR4/2　灰褐色	串田新II式 中期後半
	32	X395　Y340 5層上層	縄文土器 （深鉢）	—	—	—	外面—葉脈状文　（隆帯　沈線）	普通	外面—10YR7/4　にぶい黄橙色 内面—10YR5/2　灰黄褐色	串田新II式 中期後半
	33	X435　Y295 5層（包含層）	縄文土器 （鉢）	—	—	—	外面—矢羽状刺突　沈線　刻み 内面—磨き	良	外面—2.5Y4/2　暗灰黄色 内面—10YR5/3　にぶい黄褐色	気屋式相当 後期前葉
	34	X425　Y290 5層（包含層）	縄文土器 （深鉢？）	—	10.5	—	外面—縄文 底面—網代痕	普通	外面—7.5YR5/4　にぶい褐色 内面—7.5YR4/6　褐色	平底
	35	X435　Y295 5層（包含層）	縄文土器 深鉢	(25.2)	—	—	外面—沈線　縄文　刻み　磨き	普通	外面—10YR6/4　にぶい黄褐 内面—10YR5/4　にぶい黄褐	気屋式相当
	36	X415　Y300 5層（包含層）	縄文土器 （深鉢）	(28.8)	—	—	外面—縄文 内面—磨き	良	外面—10YR6/2　灰黄褐色 内面—10YR5/2　灰黄褐色	気屋式相当 後期前葉
	37	X470　Y230 5層（包含層）	縄文土器 浅鉢	(22.2)	—	—	外面—沈線 内面—磨き	普通	外面—10YR7/3　にぶい黄橙色 内面—10YR5/4　にぶい黄橙色	後期前半
	38	X375　Y315 5層上層	縄文土器 （鉢）	—	—	—	外面—磨消縄文　沈線 内面—ナデ	良	外面—10YR3/2　黒褐色 内面—10YR3/3　暗褐色	後期中葉
	39	X375　Y315 5層上層	縄文土器 （鉢）	—	—	—	外面—磨消縄文　沈線 内面—ナデ	良	外面—10YR7/1　黒褐色 内面—10YR2/1　黒色	後期中葉
	40	X370　Y310 5層（包含層）	縄文土器 （鉢）	—	—	—	外面—磨消縄文　沈線 内面—ナデ	良	外面—10YR4/3　にぶい黄褐色 内面—10YR5/3　にぶい黄褐色	後期中葉
	41	X340　Y310 5層（包含層）	縄文土器 深鉢	(35.7)	—	—	外面—斜め～横位の調整痕	普通	外面—10YR6/4　にぶい黄橙色 内面—10YR6/3　にぶい黄橙色	

Tab. 18　遺物観察表（打製石斧・磨製石斧）

図版番号	遺物番号	地点	層位	類型	状態	計測数値（cm） a	b	c	d	最大厚（cm）	重量（g）	石質	No.（旧出土地点）	High	刃部の形	分割法	剥離方向	備考
Fig. 34	42	SP265	SP265底	II	30～40%	—	(9.8)	6.1	—	3.80	376	花崗岩	石斧 No. 91		—	円礫分割	横長剥片	
	43	SP265	底面	不明	20～30%	—	(9.6)	8.4	—	3.45	347	安山岩	石斧 No. 94		—	円礫分割	横長剥片	
	44	X360 Y310	5層中	磨製石斧	40～60%	4.7	(9.1)	5.9	—	1.90	176	流紋岩	石斧 No. 1	53.812	円刃	—	—	両凹刃
	45	SK475	フク土	磨製石斧	50～60%	5.1	(7.1)	5.3	—	1.90	131	粘板岩	石斧 No. 87	53.264	円刃	—	—	両凹刃
	46	X390 Y295	5層中	未製品	—	—	16.5	8.0	—	2.80	411	砂岩	石斧 No. 20	53.843	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	47	X390 Y285	5層中	未製品	—	—	15.9	—	—	3.50	720	安山岩	石斧 No. 39	53.599	—	円礫分割	貝殻状剥片	
Fig. 35	48	X370 Y310	5層中	I	95%	4.0	10.9	4.4	3.7	2.75	105	ひん岩	石斧 No. 3	53.758	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	49	X390 Y290	5層中	I	60～70%	4.1	(10.7)	4.7	—	2.30	124	安山岩	石斧 No. 24	53.781	円刃	円礫分割	横長剥片	
	50	X465 Y290	5層中	I	90%	3.3	10.9	4.7	3.9	2.00	131	安山岩	石斧 No. 63	53.336	円刃	円礫分割	横長剥片	
	51	X380 Y320	5層中	I	95%	4.7	10.5	4.7	3.4	2.40	116	ひん岩	石斧 No. 75	—	円刃	円礫分割	横長剥片	
	52	X385 Y325	5層中	I	100%	4.2	10.9	4.9	4.6	1.90	167	砂岩	石斧 No. 71	53.972	円刃	円礫分割	横長剥片	
	53	X405 Y285	5層中	I	95%	3.7	10.7	4.4	3.8	1.80	130	安山岩	石斧 No. 38	53.814	直刃	円礫分割	横長剥片	
	54	X435 Y305	5層中	I	90%	4.2	10.0	4.5	4.4	1.70	127	安山岩	石斧 No. 61	53.572	—	円礫分割	貝殻状剥片	
	55	X405 Y295	5層中	I	90%	3.6	12.9	4.9	4.4	1.45	102	砂岩	石斧 No. 15. 16	53.717	尖刃？	円礫分割	横長剥片	
Fig. 36	56	X440 Y295	5層中	I	100%	4.5	13.0	5.8	5.1	2.40	226	安山岩	石斧 No. 60	53.578	円刃	円礫分割	横長剥片	
	57	X390 Y295	5層中	I	100%	5.4	13.5	5.2	5.0	3.30	360	安山岩	石斧 No. 21	53.812	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	58	X410 X295	5層中	I	100%	4.1	13.1	5.2	4.6	2.40	205	石英斑岩	石斧 No. 97	—	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	FB314
	59	X400 Y300	5層中	I	95%	4.6	15.2	5.2	5.0	2.45	278	安山岩	石斧 No. 13	53.809	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	60	X465 Y295	5層中	I	100%	4.5	13.1	5.3	4.3	2.50	189	凝灰質シルト岩	石斧 No. 62	53.449	直刃	円礫分割	横長剥片	
	61	X410 Y290	5層中	I	100%	4.6	12.4	4.9	4.2	1.80	157	花崗岩	石斧 No. 35	53.722	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	62	X410 Y295	5層中	I	100%	5.3	20.5	7.4	6.4	3.50	660	砂岩	石斧 No. 36	53.579	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
Fig. 37	63	X385 Y305	5層中	I	95%	3.4	13.1	4.7	4.3	2.50	186	安山岩	石斧 No. 8	53.938	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	64	X410 Y295	5層中	I	100%	4.3	15.7	5.2	4.9	2.05	248	安山岩	石斧 No. 37	53.661	円刃	円礫分割	横長剥片	
	65	X395 Y295	5層中	I	100%	5.0	15.7	6.8	5.4	3.30	493	火成岩の一種	石斧 No. 17. 23	53.820	円刃	円礫分割	横長剥片	石斧 No. 23 と接合
	66	X375 Y310	5層上面	I	100%	5.3	16.2	5.4	4.5	2.75	323	安山岩	石斧 No. 95	—	円刃	円礫分割	貝殻状剥片	
	67	X415 Y305	5層中	I	95%	6.2	18.5	6.5	6.1	3.20	493	安山岩	石斧 No. 48	53.675	尖刃	扁平円礫分割	貝殻状剥片	
	68	X400 Y310	5層中	I	95%	7.0	22.2	7.2	6.6	3.60	816	石英粗面岩	石斧 No. 80	53.654	円刃	円礫分割	横長剥片	
Fig. 38	69	X350 Y315	5層中	II a	100%	5.2	11.2	5.1	—	2.15	230	角閃石安山岩	石斧 No. 83	53.598	円刃	円礫分割	横長剥片	
	70	X395 Y325	5層中	II a	95%	5.6	13.7	5.8	—	2.70	340	安山岩	石斧 No. 67	53.964	円刃	円礫分割	横長剥片	
	71	X370 Y305	5層中	II a	95%	6.3	13.5	4.6	—	2.60	302	砂岩	石斧 No. 2	53.814	円刃	円礫分割	横長剥片	
	72	X420 Y305	5層中	II a	100%	7.1	16.2	6.4	—	1.80	262	ひん岩	石斧 No. 43	53.621	円刃	円礫分割	貝殻状剥片	
	73	X375 Y315	5層中	II a	100%	6.6	17.1	5.9	—	2.85	488	溶結凝灰岩	石斧 No. 81	54.085	直刃	円礫分割	横長剥片	
	74	X395 Y310	排水溝	II a	95%	7.3	18.6	7.2	—	2.70	707	不明	石斧 No. 93	—	尖刃	円礫分割	横長剥片	

図版番号	遺物番号	地点		層位	類型	状態	計測数値（cm）				最大厚	重量	石質	No.	High	刃部の形	分割法	剥離方向	備考
							a	b	c	d	(cm)	(g)		(旧出土地点)					
Fig. 39	75	X325	Y315	5層中	II a	100%	4.0	12.3	4.9	—	2.00	132	安山岩	石斧 No. 86	53.661	円刃	円礫分割	横長剥片	
	76	X435	Y300	5層中	II a	50～60%	6.6	(10.7)	6.8	—	2.80	312	安山岩	石斧 No. 56	53.579	円刃	円礫分割	横長剥片	
	77	X390	Y295	5層中	II a	40～50%	8.5	(12.2)	6.9	—	2.20	195	溶結凝灰岩	石斧 No. 18	53.910	円刃	円礫分割	横長剥片	
	78	X400	Y310	5層中	II a	50～60%	4.6	(13.1)	7.9	—	3.20	418	安山岩	石斧 No. 49	53.795	円刃	円礫分割	横長剥片	
	79	X400	Y270	5層上面	II a	60～70%	—	(15.6)	7.4	—	4.40	647	砂岩	石斧 No. 92	—	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	80	X300	Y420	5層中	II a	50～60%	6.3	(14.4)	7.8	—	2.00	355	安山岩	石斧 No. 96	—	円刃	円礫分割	横長剥片	FB418
Fig. 40	81	X405	Y285	5層中	II b	100%	5.4	10.8	4.6	4.3	1.85	144	安山岩	石斧 No. 26	53.680	円刃	円礫分割	横長剥片	
	82	X415	Y280	5層中	II b	90%	6.3	14.1	5.2	4.6	3.10	377	輝緑岩	石斧 No. 30	53.637	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	83	X370	Y305	5層中	II b	95%	6.3	12.6	5.3	4.7	2.30	324	ひん岩	石斧 No. 4	53.790	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	84	X430	Y295	5層中	II b	90%	6.0	12.7	—	5.4	2.60	300	安山岩	石斧 No. 79	—	円刃	円礫分割	貝殻状剥片	
	85	X390	Y295	5層中	II b	90%	7.2	14.3	6.0	4.7	2.20	276	砂岩	石斧 No. 19	53.875	円刃	扁平円礫分割	横長剥片	
	86	X395	Y325	5層中	II b	95%	(6.0)	17.2	6.8	5.9	2.50	362	凝灰岩	石斧 No. 66	53.966	円刃	円礫分割	横長剥片	
Fig. 41	87	X465	Y295	5層中	II b	100%	4.6	10.1	4.6	3.9	1.40	99	安山岩	石斧 No. 64	53.376	円刃	円礫分割	横長剥片	
	88	X410	Y280	5層中	II b	40～50%	—	(8.2)	4.7	4.9	1.90	116	安山岩	石斧 No. 28	53.455	—	円礫分割	横長剥片	
	89	トレンチ3		5層中	II b	40～50%	—	(11.0)	6.1	5.2	2.30	224	砂岩	石斧 No. 102	—	—	円礫分割	横長剥片	電柱移設部分
	90	X415	Y280	5層中	II b	40%	—	(10.4)	6.9	6.1	2.60	286	溶結凝灰岩	石斧 No. 31	53.759	—	円礫分割	横長剥片	
	91	X415	Y305	5層中	II b	70～80%	7.0	(13.6)	—	6.6	3.50	410	凝灰岩	石斧 No. 42	53.666	円刃	円礫分割	貝殻状剥片	
	92	X440	Y295	5層中	II b	70～80%	6.0	14.2	8.0	4.7	3.60	519	溶結凝灰岩	石斧 No. 59	53.524	円刃	円礫分割	貝殻状剥片	
Fig. 42	93	X430	Y295	5層中	I	50～60%	—	(8.7)	4.5	4.0	1.80	100	安山岩	石斧 No. 50	53.475	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	94	X415	Y285	5層中	I	50～60%	—	(8.6)	4.9	4.3	2.30	140	砂岩	石斧 No. 32	53.645	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	95	X350	Y315	5層中	I	50～60%	3.6	(8.0)	4.7	—	2.10	106	砂岩	石斧 No. 82	53.661	円刃	円礫分割	横長剥片	
	96	X410	Y290	5層中	II a	50～60%	6.0	(9.1)	—	—	1.95	146	安山岩	石斧 No. 34	53.759	直刃	円礫分割	横長剥片	
	97	X390	Y330	5層中	II a	50～60%	—	(10.7)	5.1	5.0	2.10	166	安山岩	石斧 No. 70	53.901	—	円礫分割	横長剥片	
	98	X390	Y300	5層中	I	70%	—	(11.9)	5.5	5.1	2.50	219	安山岩	石斧 No. 11	53.942	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	99	X410	Y290	5層中	I	20～30%	—	(6.0)	—	5.1	2.20	74	砂岩	石斧 No. 33	53.721	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	100	X395	Y325	5層中	不明	20～30%	—	(4.9)	4.7	—	1.25	38	シルト岩	石斧 No. 68	53.524	—	円礫分割	横長剥片	
	101	X405	Y280	5層中	I	80%	5.1	(11.9)	4.5	4.3	2.50	200	安山岩	石斧 No. 27	53.481	直刃	円礫分割	横長剥片	
	102	X400	Y305	5層中	II	60～70%	(7.0)	(13.2)	4.3	—	2.60	280	溶結凝灰岩	石斧 No. 14	53.858	—	円礫分割	横長剥片	
Fig. 43	103	X345	Y315	5層中	不明	30～40%	—	(7.3)	6.3	—	3.10	170	砂岩	石斧 No. 84	53.437	—	円礫分割	横長剥片	
	104	X325	Y310	5層中	II	20～30%	—	(7.5)	7.0	—	2.90	192	溶結凝灰岩	石斧 No. 99	—	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	105	X375	Y315	5層中	不明	40～60%	—	(8.8)	7.2	—	1.90	171	砂岩	石斧 No. 6	53.956	—	円礫分割	横長剥片	
	106	X325	Y310	5層中	不明	30～40%	—	(8.3)	(7.2)	—	3.00	211	安山岩	石斧 No. 100	—	—	円礫分割	横長剥片	
	107	X330	Y310	5層中	II	30～40%	5.6	(6.0)	—	—	1.60	80	安山岩	石斧 No. 85	53.185	円刃	円礫分割	横長剥片	
	108	X375	Y305	5層中	II	20～40%	—	(6.0)	6.5	—	1.70	126	斑岩	石斧 No. 5	53.797	—	扁平円礫分割	横長剥片	
	109	X380	Y310	5層中	不明	20～30%	7.9	(5.3)	—	—	1.25	96	安山岩	石斧 No. 7	53.890	円刃	円礫分割	横長剥片	
	110	X395	Y300	5層中	不明	10～20%	4.9	(3.6)	—	—	1.90	44	安山岩	石斧 No. 12	53.941	直刃	円礫分割	横長剥片	
	111	X395	Y310	排水溝	不明	30～40%	6.3	(7.8)	—	—	2.90	232	安山岩	石斧 No. 90	—	円(偏)刃	円礫分割	横長剥片	
	112	X340	Y310	5層中	II	40%	6.2	(11.2)	—	—		348	溶結凝灰岩	石斧 No. 101	—	円刃	円礫分割	横長剥片	

第５節　自然科学分析（放射性炭素年代測定）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに　遺跡は、庄川扇状地に島状に分布する微高地上に立地する。微高地上には黒ボク土とよばれる土が堆積していることから、縄文時代以降、河川の直接的な影響は受けていなかったとみられる。周りは扇状地面を放射状に流れる河川によって侵食を受けており、現在でも台地化が進行している状況にある。

前回の自然科学分析調査（パリノ・サーヴェイ株式会社，2004）では、埋没谷中の黒ボク土や、中世とされる遺構の炭化物について年代測定を行い、埋没谷や遺構の年代に関する情報が得られている。今回は、前回と隣接する調査区において、遺構の覆土や覆土中の炭化物の年代測定を実施し、遺構や堆積層の年代に関する情報を得る。

1. 試　料　試料は、SD09等から採取された遺構覆土の土壌11点と、SK475等の遺構覆土から検出された炭化物４点の計15点である。試料の詳細は表１にまとめて記す。

2. 分析方法　測定は、土壌試料についてはβ線計数法（液体シンチレーション法）で、炭化物４点については加速器質量分析法（AMS 法）でそれぞれ実施する。AMS 法については、株式会社加速器研究所の協力を得た。

液体シンチレーション法は、試料を塩酸で洗浄し、酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させたあと、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。得られた合成ベンゼンにシンチレーターを含むベンゼンを加えて、シンチレーションカウンターで測定する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。

3. 結　果　結果を表１に、暦年較正の結果を表２に示す。結果には比較のため、前回の結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，2004）も再録した。前回も含めると、測定方法により結果の表示方法や補正方法が異なる。このため、できるだけ条件をそろえて比較できるよう努めた。

今回、液体シンチレーション法で土壌の年代測定を実施したが、その炭素の由来はほとんどが陸上植物である。陸上植物は光合成を行う様式が大きく３つ（C３植物、C４植物、CAM 植物）存在するが、これらは反応系が異なるため、同位体分別の違いにより δ13C の値がそれぞれ異なる（Pearsall，2000など）。前回測定した黒ボク土の δ13C 値は約－18‰であるが、この値はC３植物（－25‰前後）よりもススキ属などC４植物（－15‰前後）に近くなっている。久泉遺跡の植物珪酸体分析結果をみると、当時はススキ属などのイネ科植物によって覆われていたと考えられている（外山，2004）。このことから、前回行った黒ボク土の δ13C の値は、ススキ属などのイネ科植物由来の炭素が黒ボク土中に多く含まれていることに由来し、δ13C 値と植物珪酸体分析結果とは調和的であるといえる。一方で、今回の液体シンチレーション法では δ13C の測定を行っていない。今回測定を行った SD09等の試料は、風化の進んだ粘土質

な堆積物も含まれているため、前回の黒ボク土のδ13C値を直接用いることが難しい。このため、今回は陸上植物の標準的な値である、－25.0‰を用いて、同位体補正の参考値を出し、これに基づいて暦年較正を実施することとした。

また、前回、気体計数法により測定を行なった年代値には、同位体補正を行う前の測定値が記載されていない。そこで、同位体補正を行った値（１桁目を丸めない値）から逆算して測定値を算出し、表に掲載した。

暦年較正を行わない値でみると、南側調査区東壁では、SD456　６層が4,560±110BP、２層中が1,830±130BP、東側調査区東壁では、SD212　２層が2,180±130BP、５層中が3,280±100BPである。SD09は複数点測定を行っており、ばらつきがみられる。2,200－2,300BPに分布の中心があり、年代値の古い試料では2,800BP、新しい試料では1,400BPの年代値を示す。AMS法で測定を行った炭化物については、SK475　９層中が3,980±40BP、SK457　覆土が4,930±40BP、SP415　覆土が3,660±40BP、SK425　覆土が3,530±40BPを示す。

4.考　　察　南側調査区東壁、北側調査区東壁で行った年代測定結果をみると、測定値では６層で4,600BP、５層で3300BP、上位の２層では約2000BPを示している。暦年較正値でみると、６層は約5000－5500calBP、５層は3400－3600calBP、２層は1600－2300calBPとなる。縄文時代の落ち込みであるSD456では縄文時代の年代値が得られており、考古学所見とよく整合する。また、下位で古く上位で新しい年代値が得られており、層位的に矛盾しない。ただし、古代～中世の遺構であるSD212では遺構の時代時期よりも古い年代が得られている。これは遺構を埋積している覆土中の炭素の由来は、遺構よりもずっと古いことを反映した結果と言える。

SD09の結果をみると、遺構最上部にあたる20層よりも、層位的に下位にあたる５層下や32層下の方が新しい年代値が得られているなどの逆転現象がみられる。また全体として値がばらついているが、これは、埋積過程や生物擾乱による後代の汚染および古い炭素の混入などの影響があるためと考えられる。測定値を概観すると、下部では2,800BP、上部では2,200－2,300BPとみられ、暦年較正値では、下部で2,800－3,100calBP、上部で2,000－2,400calBPに相当する。前述と同様に、遺構は古代のものであるが、その遺構を埋積している覆土中の炭素の由来はそれよりもずっと古いことを反映した結果と考えられる。

AMSを行った炭化物については、SK475　９層中が約4,000BP（4,400－4,500calBP）、SK457　覆土が約4,900BP（5600－5700calBP）、SP415　覆土が約3,700BP（3900－4100calBP）、SK425　覆土が3,500BP（3750－3850calBP）を示す。各遺構が縄文時代と考えられていることともよく整合する結果である。いずれも埋没谷よりも古い年代を示すことから、埋没谷が埋積する以前の遺構である可能性がある。

引 用 文 献　パリノ・サーヴェイ株式会社，2004，第６節　自然科学分析（放射性炭素年代測定、脂肪酸分析、リン・腐植分析）．久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ，砺波市教育委員会，67－70.

Pearsall Deborah M., 2000, *Paleoethnobotany A Handbook of Procedures* second edition.Academic Press, 700 p.

外山秀一，2004，第５節プラント・オパール分析．久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ，砺波市教育委員会，58－66.

第４章　考　察

第１節　打製石斧の製作技術と出土状況

本節の目的　打製石斧は縄文時代の石器組成においてもっとも一般的な石器のひとつである。

縄文時代前期の南関東地方に出現し、中期にかけて関東・中部地方を中心に盛行した後に衰退するが、弥生時代に至っても存続する。また、西日本には縄文時代中期末にあらわれ、後期後半になって普及することが指摘されている[1]。

本遺跡では、前年度調査[2]に続いて縄文遺物のなかで打製石斧が大部分を占め、その他の石器類では磨製石斧が２点出土しているにすぎない。石器組成としては打製石斧が９割以上の比率で構成されるわけであり、それとともに一般的な縄文期の集落遺跡と比較して、土器量が極端に少ないという傾向が本年度も看取された。この出現傾向は次年度も続くものと考えられ、久泉遺跡の最大の特徴ということができる。このことから本遺跡の縄文時代の実態解明の一助とすべく、打製石斧に焦点をあて考察をすすめたい。

（１）打製石斧の類型と構成

年　代　打製石斧は欠損品も含めて全部で73点出土しており、内71点は５層（遺物包含層）からの出土であり、遺構内出土ではSP265から２点出土している（Fig.34－42・43）。また、風倒木痕から２点出土しているが、これは埋土断面から５層内に存在したものが樹根に巻き込まれたものと思われる。

５層（遺物包含層）から共伴して出土した土器は、串田新Ⅰ式（大杉谷式）、気屋式が主体となっており、中期後葉から後期前葉に帰属すると思われる。前年度調査区からは、上山田・天神山式、串田新Ⅰ・Ⅱ式、気屋式、八日市新保式が出土している。土器の年代では、昨年度は縄文時代中期中葉から後期前葉、そして後期後葉の範囲に含まれ、今年度に関しては若干後期後葉があるものの、中期後葉から後期前葉が主体を占める。前年度同様に個々の打製石斧の時期比定をすることは難しいが、串田新Ⅰ・Ⅱ式～気屋式という時期に含まれることに注意したい。北陸地方では、打製石斧が中期中葉から後葉にかけて増加する傾向がある[3]ことが指摘されており、本遺跡資料も年代的にその範疇に収まる。

５層の土壌サンプルについて放射性炭素年代測定を行ったところ、3,275±95という年代が得られた（第３章第５節）。前年度調査では、５層の年代値BP2,110±80～3,330±100という結果を得ている。この数値は暦年代でいう後期から晩期の範囲[4]に含まれるものであり、土器の年代と大差ない。

1　藤尾慎一郎　2003「第４章縄文時代の雑穀・穀物栽培―縄文後・晩期稲作の実態―」『弥生変革期の考古学』同成社
2　砺波市教育委員会　2004『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』
3　山本直人　1985「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』第28号　石川考古学研究会
4　東京国立博物館　2001『土器の造形―縄文の動・弥生の静―』

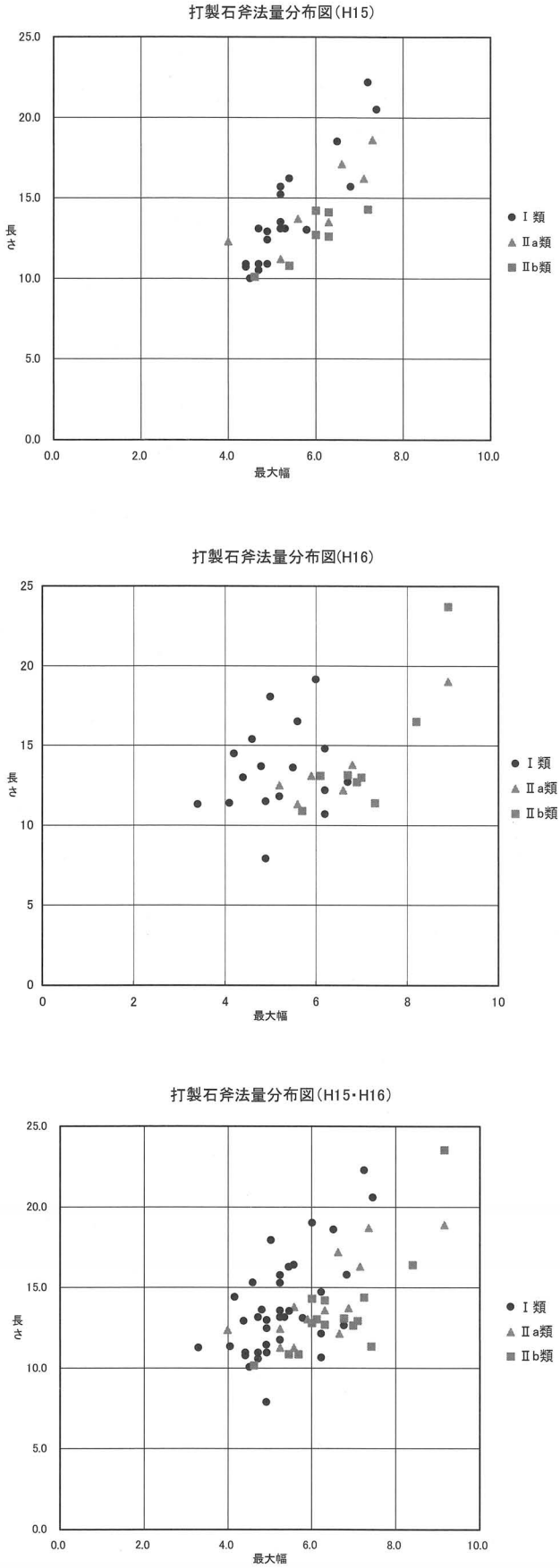
大別	略別	北陸の土器編年	遺跡名	久泉	福山大堤	厳照寺	高沢島Ⅰ	高沢島Ⅱ	宮森新北島Ⅰ	上和田	頼成	増山	東保石坂	徳万	孫子ワバラ
			m	55	120	79	54	53	78	70	85	50	38	62	350
晩期		柴山出村・大境Ⅴ													
	後葉	下野Ⅱ・長竹 下野Ⅰ													
	中葉	（中屋Ⅲ） 中屋Ⅱ 中屋Ⅰ													
	前葉	（御経塚Ⅲ） 御経塚Ⅱ 御経塚Ⅰ・勝木原													
後期	後葉	八日市新保Ⅱ 八日市新保Ⅰ （井口Ⅲ） 井口Ⅱ													
	中葉	酒見・井口Ⅰ （＋）													
	前葉	気屋Ⅱ 気屋Ⅰ 前田・岩峅野													
中期	後葉	（＋） 串田新Ⅱ 串田新Ⅰ（大杉谷）													
	中葉	（古府Ⅱ） 古府 上山田・天神山Ⅱ 上山田・天神山Ⅰ													
	前葉	新崎Ⅲ 新崎Ⅱ 新崎Ⅰ 新保Ⅱ 新保Ⅰ													
前期	後葉	朝日下層 福浦上層													
	中葉	蜆ヶ森Ⅱ 蜆ヶ森Ⅰ 福浦下層 朝日C													
	前葉	佐渡・極楽寺													
早期	後半	〔常世〕 桜峠													
草創期															

Tab. 19　市域の縄文遺跡消長表

形態分類　形態によって、伝統的な分類法である短冊形（Ⅰ類）と撥形（Ⅱ類）に大別した。Ⅰ類は、両側縁がほぼ平行な短冊形である。Ⅱ類は、側縁部が刃部に向かって直線的に開くもの（Ⅱａ類）と基部に近いところでくびれ（抉り）をもつもの（Ⅱｂ類）に細別することとした。構成は、Ⅰ類が32点（45.07%）、Ⅱ類が23点（32.39%）｛うちⅡａ類11点（15.49%）、Ⅱｂ類12点（16.9%）｝、欠損しているため不明のものが14点（19.72%）、未製品２点（2.82%）である。数値的にはⅠ類がⅡ類を若干上回っており、Ⅱ類はⅡｂ類がⅡａ類よりやや多いという構成を示し、前年度とほぼ近い傾向が認められる。分銅形やその他のものは認められないが、92（Fig.41）は分銅形に近い形態である。

鈴木次郎氏によると、「ほとんどの遺跡で短冊形が圧倒的に多く、撥形は10～20%と少ない。分銅形はさらに少なく、10%未満に過ぎない」[1]という。本遺跡では出土数の半数近くをⅠ類（短冊形）で占めるものの、Ⅱ類（撥形）が30%を超え、やや高出現する傾向が認められる。確かに各類型の中間形態を呈するものもあり、形態分化を明確に判断できない資料があったことを断っておく。

最大幅と全体長の相関について見ると、Ⅰ類では全体長10.0～20.0cmまでの間に大半が分布しており、10.0～14.0cm付近に集中する。集中する範囲に属するものは、小型の部類で20cmを超える大型品とは類型を同じくするもの、使用目的は異なるものと考えられる。Ⅱ類については、Ⅱａ類・Ⅱｂ類ともに全体長11.0～14.0cm付近に分布が集中しており、それを超えると分布は散漫となる。最大幅については、Ⅰ類は4.0～6.0cmに集中するのに対し、Ⅱ類では5.0～7.0cmに分布の中心がある。



Tab. 20　打製石斧法量分布図

1　鈴木次郎　1995「３打製石斧」『縄文文化の研究７　道具と技術』雄山閣

（2）打製石斧の製作技術

製作技法　打製石斧の製作工程は、**〈工程①：大型扁平円礫から背面に自然礫面の残る楕円形横長剥片を剥離する〉→〈工程②：この大型剥片を素材とし、打点側および先端側を中心に整形剥離を加えて大まかな打製石斧の形態を作り出す〉→〈工程③：着柄部のくびれ部等の側縁部や刃部にさらに細かな剥離や敲打を加えて完成する〉**というのが一般的である[1]。本遺跡出土の打製石斧は、そのほとんどが原材に衝撃を与えて大形剥片を取り出し、側部から打ち割って大体の形を整えている。一面には自然礫面をそのまま利用しており、なだらかな反りをもつのが特徴である。基部側の自然礫面は刃部に比べて屈曲しており、原材の側面を意識して剥離したものと思われる。刃部は丁寧に工程③を行い鋭く作り出しているものが大半を占めるが、なかには素材の鋭い縁辺を何ら加工せず、そのまま刃部とするものも相当数見受けられる。

石川県野々市町の粟田遺跡では、打製石斧とともにその母岩類にも注目し製作方法のパターンを導き出している。岡本恭一氏は、母岩に残された剥離痕や加撃痕そして剥片、裂片との接合資料や出土状況から打製石斧の製作技法について三つの技法が存在することを推定している[2]。第一の技法は、「選択した礫の縁辺の全周ないしは半周ちかくに幾度も打撃を加え、半截あるいは一部を剥離する方法」であり、両面に全く自然礫面を残さないものや中落ちの板状の剥片が得られることがあるため両面加工、または全面加工する必要が生じる。第二の技法は、「礫の側縁に対してほぼ平行方向の加撃」を行うものであり、第三の技法は「礫の側縁に対してほぼ垂直方向の加撃」を行うものである。その結果、剥離される剥片は加撃の力が均等に伝わると、剥片の形状は蛤状・鶴嘴状となる。第一の技法の場合、大型剥片を得ることは難しく、二次加工に手間がかかる。これに対し、第二、第三の技法は、剥片形状が蛤状・鶴嘴状となるため二次加工する際に形態的な制約を受けること、そしてうまく力が伝、わらないと大きな剥片がえられないという難点があるものの、主剥離面と自然礫面の交わる側片は加撃点から離れるにつれて薄く鋭いものとなるという。

今回出土した打製石斧は、ほとんどが岡本氏のいう第二、第三の技法によって製作されたものと考えられる。素材の鋭い縁辺を何ら加工せず、そのまま刃部とするもののように工程③が省かれているのは、こうした技法によって製作されたことを示すものである。

両面加工　両面加工を施し片面に自然礫面を残さないものとして、55（Fig.35）、60（Fig.36）、65（Fig.37）がある。55は、打製石斧と認定するかどうか議論の余地を残すが、薄型剥片をわずかな整形で作っている。非常に薄いため、中程で折れている。60は比較的丁寧に仕上げられており、工程②ののち片面を細かな剥離を施している。また、65は全体的に厚みを持つため、両面加工をして一定の厚さに整えたのであろう。いずれにしても両面加工を施すには片面整形の打製石斧製作より工程がひとつ増えることであり、それだけ労力を必要とする。打製石斧の使用目的を考えたとき、片面加工で事足りるはずであり、両面加工は工程①もしくは工程②で何らかの事由により不意の剥離や打撃ミスが生じた結果に生まれたイレギュラー的な製品と思われる。

1　山本正敏　1996「2．縄文時代の石器」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ―』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

2　岡本恭一　1991「第6章石製品」『粟田遺跡発掘調査報告書』（社）石川県埋蔵文化財保存協会

また、側縁部を観察すると敲打痕がみられるものが多く、工程③の結果と思われる。Ⅰ類には、基部から刃部にかけて敲打痕がみられる。これは製作工程上、肉厚となる部分を削ぎ落とし整形するために生じたものと考えられる。そしてⅡ類については、Ⅱａ類の側縁部に敲打痕が顕著にみられる。Ⅰ類のように基部から刃部にかけてのものもあるが、くびれ部に集中的に敲打を施している。Ⅰ・Ⅱ類ともに敲打する部分は若干ことなるものの、いずれも工程①・②によって生じた側縁部の刃を潰し、着柄し易くするために敲打されたものとみることができる。

未製品　本遺跡では初めてとなる未製品（製作途中のもの）を２点検出している（Fig.34－46・47）。いずれも調査区中央よりやや東の位置で、他の打製石斧と同じく５層上部から出土している。

46は、大型剥片の片側の側縁部を整形している段階のものと考えられ、工程②の途中で止めている状態と思われる。片側側縁部には刃潰し痕も認められる。刃部に近い位置の自然面に大きな剥離が見られ、この剥離によって器厚がやや薄くなっている。他の打製石斧を観察すると、刃部周辺まである程度の厚みを保って整形していることから、46は工程②の全体的な形態を作り上げる過程で不意に出来た剥離によって打製石斧に必要な強度（一定の厚み）を得られないと判断し、破棄されたものと理解したい。肉眼観察では使用痕を確認することはできなかった。

また、47については46よりさらに一段階前の調整で終わっている。ほぼ工程①の、扁平円礫から大型剥片を取り出した状態に近く、バルブ部分の貝殻状剥片である。自然礫面の背面、つまり剥片の腹面の打点近くには大きな打瘤がみられる。腹面全体に放射状のリングがよく残り、打点から全体の２／３程の部分に大きなステップが認められる。打点と反対側の側縁に小さな剥離があるが、整形によるものとは考え難い。一次剥離で全体がやや厚みを持ってしまったために、工程②を行わなかった可能性も考えられる。

これら未製品の存在から、直ちにこの場所で打製石斧を製作していたとは判断できない。製作に伴う多量のチップが見られないことから、47のように大型剥片の状態で持ち込まれたもの、もしくは大型剥片の状態で製品として成り立っていたという可能性も考えられる。46が未使用で製作途中にあることは示唆的である。双方とも打製石斧製作を裏付ける要素のひとつに間違いなく、今後遺跡内での製作跡発見があるかもしれない。しかし、未製品の存在だけでは本遺跡が打製石斧製作遺跡であるという確証は得られず、剥片を取り出した母岩や製作時に出る小剥片などの検出を待って、諸要素を総合的に判断したい。

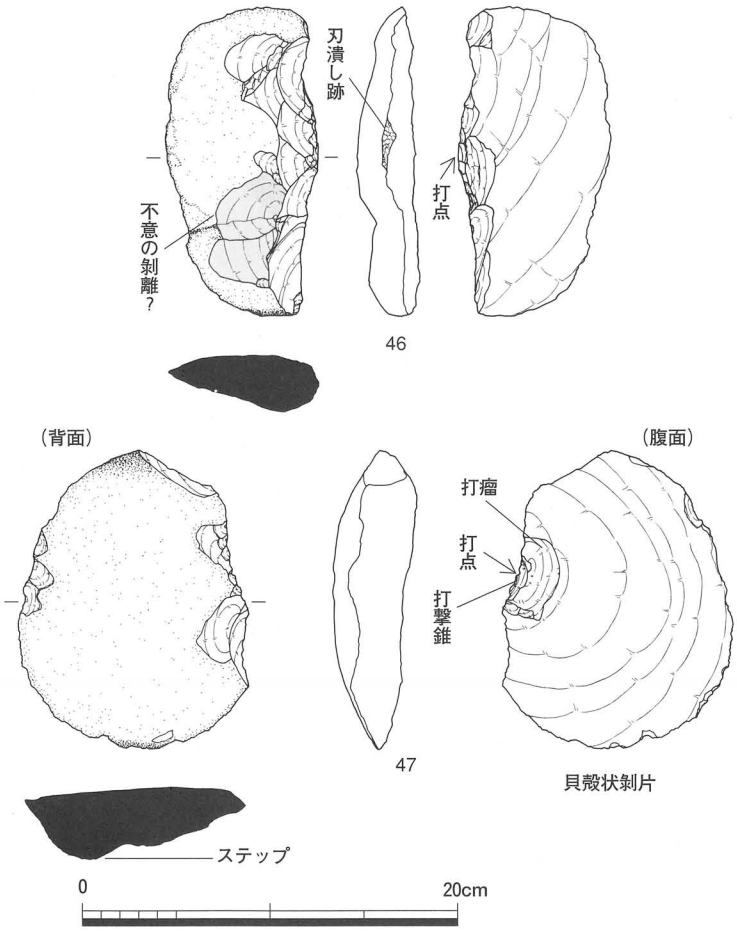
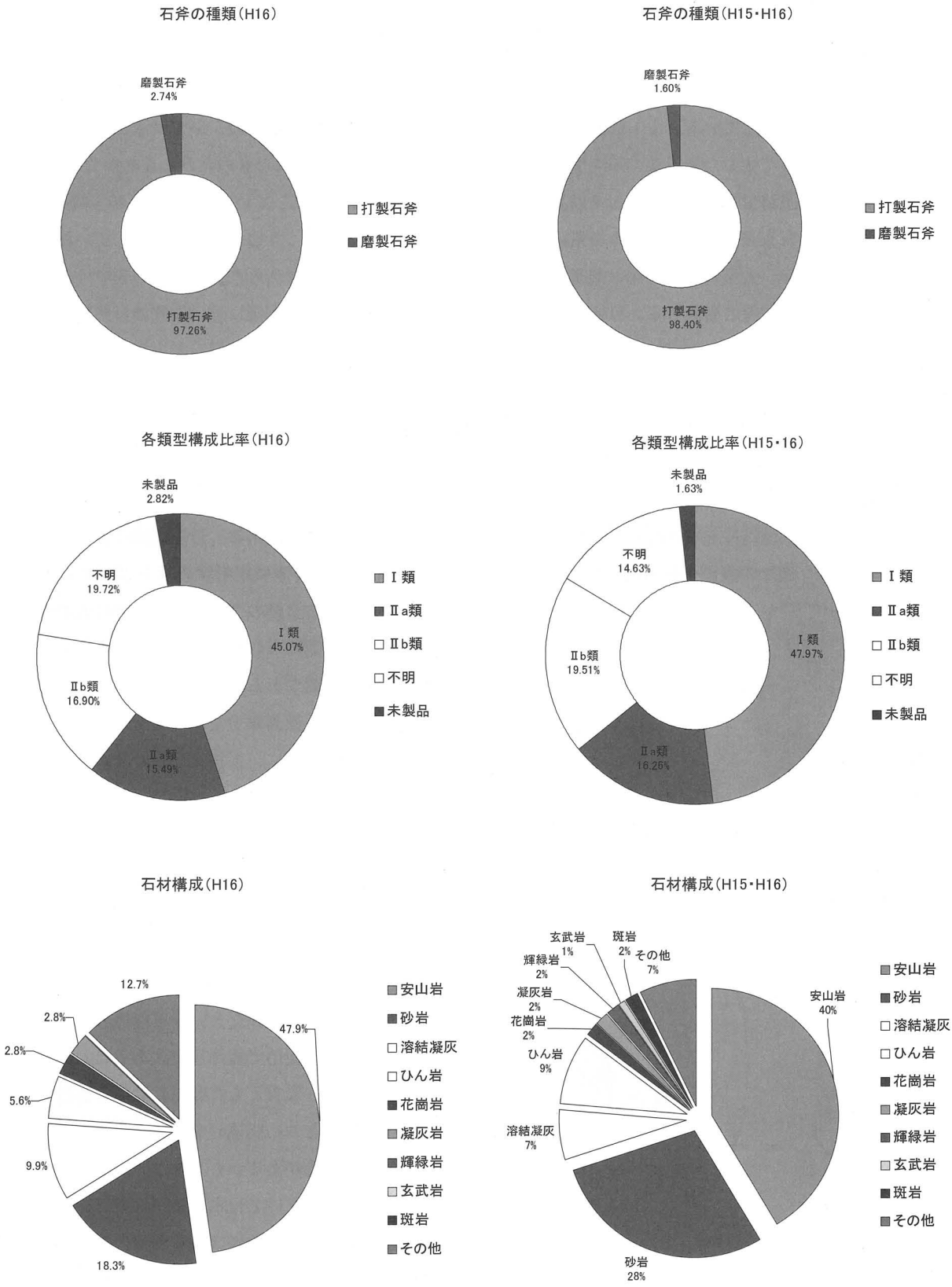


Fig. 44　打製石斧未製品



Tab. 21　打製石斧の諸元グラフ

使用石材　原材は、両面加工を施しているものを除き大半が扁平円礫もしくは大形の円礫を使用していると考えられる。石材は、安山岩（角閃石安山岩・変朽安山岩含む）34点（47.9%）、砂岩13点（18.3%）、溶結凝灰岩７点（9.9%）、ひん岩４点（5.6%）、花崗岩2.8%、その他９点（12.7%）で構成される。前年度に続き安山岩・砂岩で全体の３／４近くの割合を占めることになり、ひん岩・溶結凝灰岩が続く。概して、選択される石材は多様であるといえよう。

使用石材の多様性は、石材選択の幅が広いという打製石斧の特徴を表すもの[1]と評価したい。決して硬度が高くない砂岩がもっとも多いのは、製品の使用に際しそれほど強度を必要としなかったことの表れとみることが可能である。つまり対象物が比較的軟らかいものであったことが容易に推察される。

また、すべての石材は川原などで採取可能なものであると思われ、扇状地という地理的環境を考えるとその入手は比較的容易だったものと考えられる。安山岩は国内でもっとも広く分布している火山岩であり、砂岩は２～１／16mmの粒径の岩片や鉱物片が膠結したものであるため、その分布範囲は広い。川口武彦氏の「石材運搬に関わるコストやエネルギー、効率性などを考慮すれば打製石斧の大半が集落外で製作されていたとするのが、妥当」[2]という考え方を援用すると、本遺跡周辺で石材を入手し、打製石斧を製作し現地で使用していた可能性が高い。もしくは未製品が出土していることから、石材産地から大型剥片の状態で遺跡内に持ち込まれた可能性も考慮すべきである。

使用痕　使用痕については、ほとんどの刃部が残っている製品や破損品にみられる。刃部先端が磨り減って丸くなっているものや、使用により刃部が欠けたものがある。明瞭な擦痕や条線痕などはみとめられない。

完形品（遺存率90%以上）と欠損品の比率は、右表のとおりである。ここで注目したいのは、完形品が半数以上を占めているということである。遺存率90%以上であれば、廃棄される必要はなく打製石斧として充分にその機能を有し使用に耐えうるものと思われる。これらの打製石斧はある程度使用したのち、目的を果たしたためにそこに捨てられたとみることができ、言い換えれば“使い捨ての道具“であったということができる。欠損品については、非常に損傷し易い用途に用いられたとも、使用頻度が高く消耗が激しかったとも言い切れない。

側縁部については、着柄するための敲打がなされているが、着柄による摩滅がみられる。Ⅰ類については、刃部から着柄したと考えられる部分にかけて摩滅しているものがある。側縁部の摩滅は使用によるものであり、着柄したと考えられる部分には幅１～1.5cm程度の摩滅がみられ、着柄により磨り減ったものと思われる。

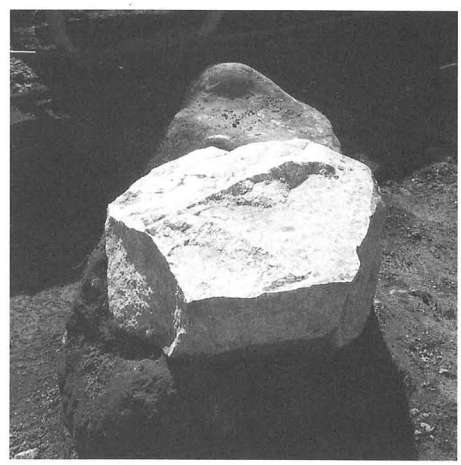
また、64（Fig.37）は、刃部と基部の稜線に沿って帯状に黒褐色の小塊が付着しており、使用の際に付着したものか土壌中の成分が集積して付着したものか判然としない。

1　山本　薫　1989「縄文時代の石器製作における石材の利用について」『筑波大学先史学・考古学研究第１号』筑波大学歴史・人類学系

2　川口武彦　1997「縄文時代中期における石器製作技術の再検討―植物採集・加工石器を中心として―」『筑波大学先史学・考古学研究第８号』筑波大学歴史・人類学系

（3）打製石斧の出土状況

出土層位　大半が5層（遺物包含層）からの出土である。前年度も同様の状況であったため、比較的厚い5層のどの位置から出土するのか、その傾向を掴むために打製石斧を1点ずつタワー状態で掘り残し、座標とレベルを計測して取り上げるという調査方法を採用した。その結果、総じて6層からの漸移層から15～20cm付近に集中して出土することが判明した。62（Fig.36）のみ漸移層の下部の6層に近いところから出土しており、認識しえなかった遺構内に包含されていた可能性も考えられる。



剥片を取り出したような礫

5層中の礫　調査区西側から市道を隔てて北側にかけて、5層中に大量の礫が含まれることを確認した（Fig.27）。

礫が扇状地礫層（7層）に含まれる礫に酷似することから、現地調査では河川運搬物等の可能性も考えられた。もしくは礫群が集中する範囲がSD09沿いの南側に限定され、溝が7層まで掘り込まれているので掘削で排出された礫とも考えられた。しかし、SD09は5層上の4層より上層から掘り込まれていることから、SD09排出礫の可能性は消えた。また、5層中に人頭大の礫以外に洪水堆積物のような層位が存在せず、完全に黒色有機質層の中にあって遺物と同じように埋没している状況から、河川運搬物の可能性は低いのではないかと思う。礫群中に打製石斧をはじめ土器片が出土し、調査区内でも遺物が集中する傾向にあることから、むしろ人為的に運び込まれたもの（打製石斧の材料となりうる礫であるため）の可能性が高いと考えられる。

調査区北側周辺で破砕した礫や薄い剥片がいくつか見受けられた。中には、1個の大きな礫から打製石斧の素材としていくつかの剥片を剥ぎ取ったような母岩らしき礫も検出したが、果たしてそのような役割をもった礫か確証はない[1]。粟田遺跡では、108点もの母岩を確認しており、母岩に残る剥離痕や加撃痕、剥片・裂片資料から打製石斧の製作技法を復元している[2]。本遺跡において母岩と認定しうる個体はなく、打製石斧製作を行っていたと判断することはできない。

出土位置　各類型ごとの出土位置とグリッドごとの土器出土量を図化した（Fig.45）。調査区全体に散漫として出土していることがわかる。この遺跡の調査面積と打製石斧の出土数を単純に計算すると、約40m²に1点の割合で出土していることになる。調査区中央付近にややまとまって出土しており、唯一の遺構内出土のSP265も存在する。土器出土量と打製石斧の出土する範囲は必ずしも一致せず、土器が全く見られない箇所においても打製石斧の存在が認められる。

調査区中央付近で接合資料があり、55・65は近辺から出土した破片が接合している。また、各類型についての出土傾向は、判然としない。

1　山本正敏氏（富山県埋蔵文化財センター）に実見して頂いたところ、「打製石斧を剥ぎ取った母岩という感じではないが、断定的に否定することもできない」とのご教示を得た。

2　（社）石川県埋蔵文化財保存協会1991『粟田遺跡発掘調査報告書』

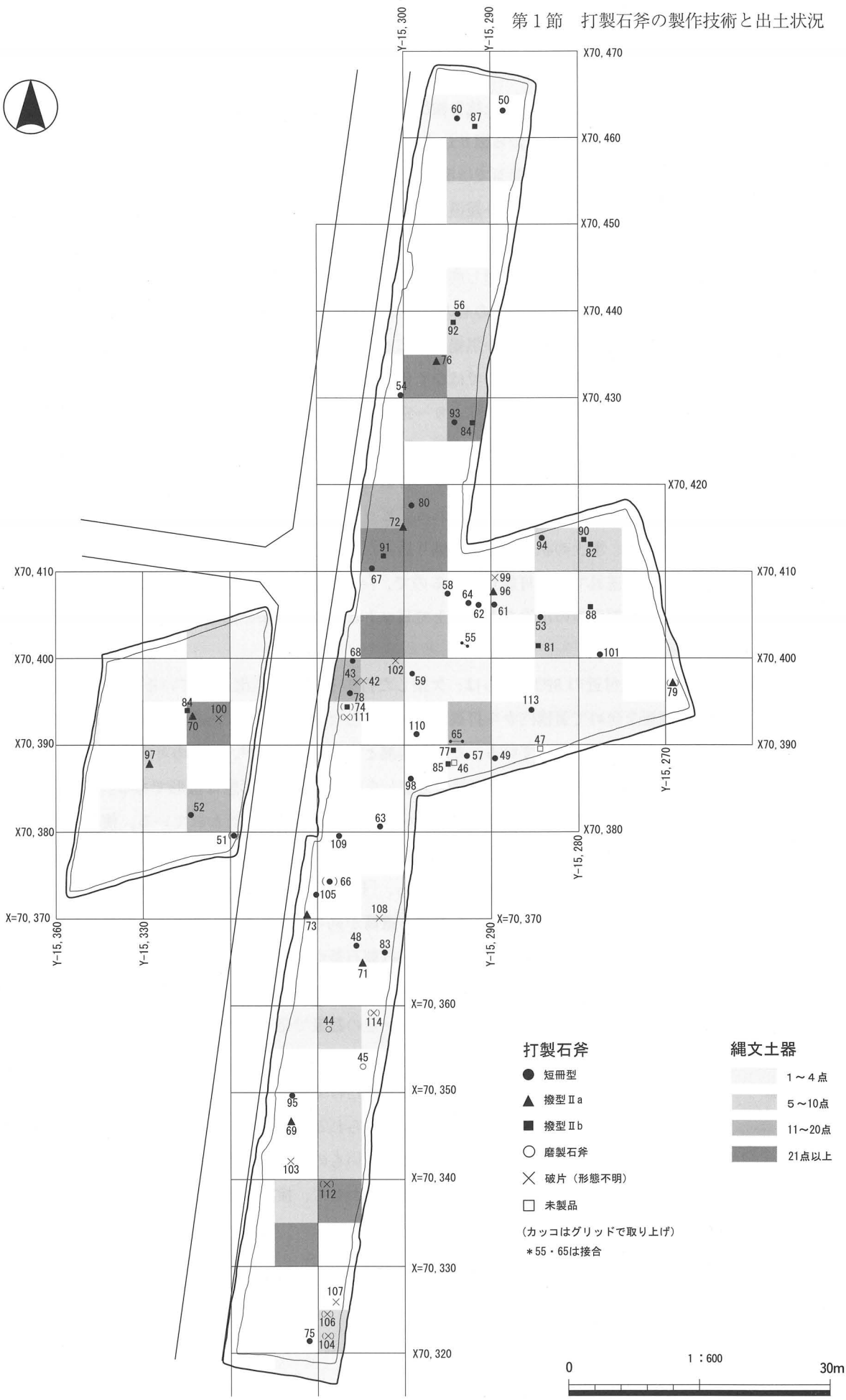


Fig. 45　縄文土器・打製石斧出土分布図（Scale＝1／600）

遺構との関係　下層遺構面では、ピットと土坑を検出している。ピットが大部分を占め、土坑は20基程度である。遺構はすべて5層内から掘り込まれて形成されており、掘り込みは6・7層に到達する。前年度調査では、「下層遺構面では明確に縄文時代に属する遺構は認められなかったが、打製石斧が出土している地点は、小規模ピットが密集している範囲を避けるようにして分布している。小規模ピット群は、調査区のほぼ中央、SD90を挟んで南北に無数に存在する。この小規模ピットは、やや円錐形状を呈し底部に向かって先細りしているものがほとんどであり、検出面からの深さは20～40cm程度のものである。柱穴などのように柱根痕跡などは認められず、埋土は5層(遺物包含層)に近い黒褐色土に地山シルトが粒状に混ざっているような状況であったため、構築物を構成するものではなく何のために掘られたものか判然としない。しかし、この小規模ピットは点在するというより一定の範囲で集中して存在する傾向」が認められた。今回の調査では打製石斧を1点ずつ座標で計測しているので、遺構との位置関係を詳細に把握できる。まず、ピットのないグリッドから打製石斧があまり出土していない。調査区北側、中央付近、西側にそのような傾向が見られる。ピットの性格はいずれも不明だが、構築物を形成するというより、埋土の状態から単に掘り込んだだけという印象が強い。打製石斧は植物質食料などの採集の道具である可能性もあるので、「小規模ピット群＝採集痕」と短絡することはできないが、打製石斧の用途を考える上でピットとの位置関係を把握していくことが必要であると思われる。

遺構内出土　調査区中央付近のSP265からは、欠損した打製石斧が2点出土している（Fig.34)。前年度からの調査を含めて遺構内から打製石斧が出土したのは初めてである。打製石斧はいずれも基部であり、上半部で折れている。ただし基部として判断したが、刃部の可能性も考えられる。42（Fig.34）は花崗岩製で、側縁部に刃潰しを行っている。形態は撥形である。43（Fig.34）は安山岩製で、両側縁部の欠損部分に近い両側縁部に、加工が行われている。使用痕は見られない。②層を掘り下げていったところ、遺構の底に近いところで2つ重なる状態で検出した。あたかも据え置かれたような出土状態から、「打製石斧埋納遺構」の可能性もあると現場は色めき立ったが、①遺跡内で打製石斧を伴う遺構が見られないこと、②出土した打製石斧が一般的に見られる製品の欠損品であること、③打製石斧が埋納行為の対象となる遺物とは考え難いことなどの理由から、穴を掘る過程で打製石斧が折れ偶然重なる状態で埋まったものと考えたい。ただし、打製石斧を伴う同種の遺構が一定の数量で発見された場合、この遺構に対する評価も再考する必要があるだろう。

磨製石斧　前年度調査では、縄文時代の石器は打製石斧だけであったが、今回磨製石斧を2点検出している。磨製石斧は、伐採具としての機能が考えられる。調査区内には、大きな風倒木痕を10箇所以上確認しており、古環境復元を試みていないものの、高燥地帯にある程度の樹木が存在していたことが推定できる。打製石斧の存在と合わせて、検討していく必要がある。

（野原）

第２節　大溝（SD09）の検討

調査区北側において、長大な溝を検出した。平成14年度の試掘調査時に旧河道と認識したものであるが、埋没地形復元作業を通して遺跡内でも比較的高い地形状況にあるにもかかわらず、河道が走るということで、疑念を抱いた記憶がある。洪水起源と思われるシルト層が堆積していること、そしてその規模から河道と判断したものである。この溝の性格については、次年度調査を待たねば詳細に検討できないが、その基礎資料として溝と認定した根拠と埋没過程の復元、その諸要素について若干の考察を試みたい。

遺構の認定　果たして人工的に造成された“遺構”なのかという問題がある。検出時、黒色有機質層であるⅤ層[1]上面において褐色～黄褐色のシルト層が同じ幅で南西から北東方向にかけて調査区北側を斜めに縦断するように明瞭に確認できた。その後、調査区西側において同様のシルト層を確認し、堆積土と方向性・規模からSD09の延長であることを認識している。このシルト層を調査区東壁の精査をしている段階で、少量の遺物が検出された。遺物の出土は遺構としての要素のひとつに違いないが必要条件ではなく、むしろ遺跡内でも比較的高い場所（自然に河道が発生すると考え難い場所）に存在することや数度の再掘削の痕跡と考えられる堆積状況が看取されたことが「溝」として扱う決定要素となった。遺構として認定するには、掘り込みの状況、堆積状況、出土遺物、他の遺構との関係、地形状況などを勘案し、総合的に判断する必要がある。次に、調査時に現地で遺構と判断した諸要素について、簡単に述べる。便宜上溝として記述を進める。

掘り込みの状況　Ⅴ層上面で検出できたことから、上層遺構として扱っているが、断面を観察するとさらに上層から掘り込まれていることが判明した（Fig.24）。Ⅴ層の上層、つまりⅣ層・Ⅱ層を掘り込んで形成している。Ⅴ層の年代観は、出土遺物や放射性炭素（以下、C14という）年代測定から縄文時代中期～後期にかけてと思われる。少なくともⅤ層上層から掘り込まれていること、SD09周辺のⅤ層中もしくは上面付近に溝掘削に関係すると思われる堆積がみられないことから、Ⅴ層堆積後にSD09が形成されたことは確実である。

Ⅱ層・Ⅳ層の年代観は不確定要素を多分に含むものの、Ⅴ層上面における遺構や出土遺物から、概して古代～中世と考えられる。掘り込みは、Ⅴ層→Ⅵ層→Ⅶ層に到達しており、深いところでⅦ層を約1.6m掘り込む。最終堆積面に近づくにつれ溝幅が緩やかに広くなっていくのは、旧状（開削時）の掘り込み形状を留めているのではなく、自然な浸食作用もしくは水流によって溝の肩部が削られたものと考えられる。

堆積状況　分層の限界に挑戦し、77もの埋土に細分した。行過ぎた細分は混乱を招くが、後にいくつかの層を属性ごとにまとめる作業をするときに検証可能なので、ある程度の細分化は行うべきと考える。ここでは、残りが良くもっとも断面観察をし易かった調査区北側の東壁面のセクションを基に埋没過程の復元を試みることとする。

1　基本層序と埋土の層番号を区別するために、本節に限って基本層序をⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層・・・とローマ数字で表記し、SD09埋土を１層・２層・３層・・・とアラビア数字で表記して記述することとする。

埋没過程の復元試案　埋没過程復元作業にあたって理解し易くするため埋没段階によって、埋土を属性によって群単位でまとめ、古い順にSTAGE 1 ～STAGE 7として分類した。

《STAGE 1》　開削直後の堆積層である。主に黒褐色シルトで構成され、遺物包含層である5層と酷似している。溝内の河床や縁辺に自生した植物が腐って堆積した腐蝕土と考えれば、層厚からかなりの時間的経過があったものと見なければならない。しかし、8層から古代の遺物を検出していることや、土相がV層に似ており堆積のメカニズムも同じだとするとV層のC14年代測定値からこの層厚だと数千年の時間幅を持つことになる。むしろ、周囲にすでに存在していたV層がなんらかの作用によって削られ、地形的に低い場所に集積した結果と見るほうが妥当に思われる。

《STAGE 2》　STAGE 1の堆積後、再度掘削され堆積した洪水層を主とした段階と考えられる。STAGE 1の5層が河床に向かって薄く堆積する状況が不自然であり、断面の屈曲したラインを再掘削による掘り込みと判断した。STAGE 2堆積層の14・31・32・33層などは黒化しており、13・14層には漸移層が形成されたような感もある。再掘削後の安定期を示す可能性もあるが、間に洪水堆積層が存在することから、V層の流れ込みの可能性も考えられる。

《STAGE 3》　再度掘削された後に堆積した洪水層である。かなりの層厚があり、分層を試みたが肉眼では困難である。洪水起源と思われる均質のシルト層が厚く堆積している状況から、短期間の間に一気に埋まってしまったと考えられる。遺物の出土はない。

《STAGE 4》　STAGE 3で堆積した後に、小規模であるが再度掘削し、そこに洪水堆積物が埋積している。肌理の細かいシルトと細砂が互層状に累積し、ラミナ状(葉理状)を呈する。この互層は、微起伏の凹部に河道から溢れ出た越流（overflow）・溢流によって細粒の泥や砂が繰り返し堆積したものと考えられる。堆積時間は比較的短いものと考えられる。

《STAGE 5》　STAGE 3で堆積した後に、さらに規模を小さくして掘削し、埋没している。埋土は黒色土を主体とするが、洪水層である褐色シルトがブロック状・マッドボール状に混入している。周辺にあった黒色土とともに洪水層を巻き込んで、堆積したものと考えられる。この埋積で溝の機能はほぼ失われ、周辺より若干窪んだ程度の痕跡しか残っていなかったものと思われる。

《STAGE 6》　STAGE 5で溝がほとんど機能しなくなり、周辺より低くなったところに自然堆積したと考えられる。10層にはシルトがブロック状に混入しており、下層のSTAGE 3の洪水層を撹拌している。

堆積の特徴　全体として埋土は、黒色土と洪水起源と考えられる褐色シルトで構成されている。河道が自然堆積により埋没した場合、増水時の浚渫作用によって幾度かそれまでの堆積土を削り取ることもあるだろう。

ここでSTAGE 1 ～STAGE 6までの段階分けした根拠は、「再掘削」としか説明できない掘り込みラインを確認したためである。自然の浚渫作用ではSTAGE 2堆積前の70cm程の削り取りは考え難く、また5層に特徴的な河床に向かって堆積厚が薄くなっていくという現象も説明できない。よって、開削したのちに再掘削→堆積を数度繰り返したと判断したのである。ただし、溝であった場合、水が流れていたことを示す水底（河床）堆積物と思われる層位が見られない。また、大規模な溝状遺構に見られる堤状の盛り土も存在しない。

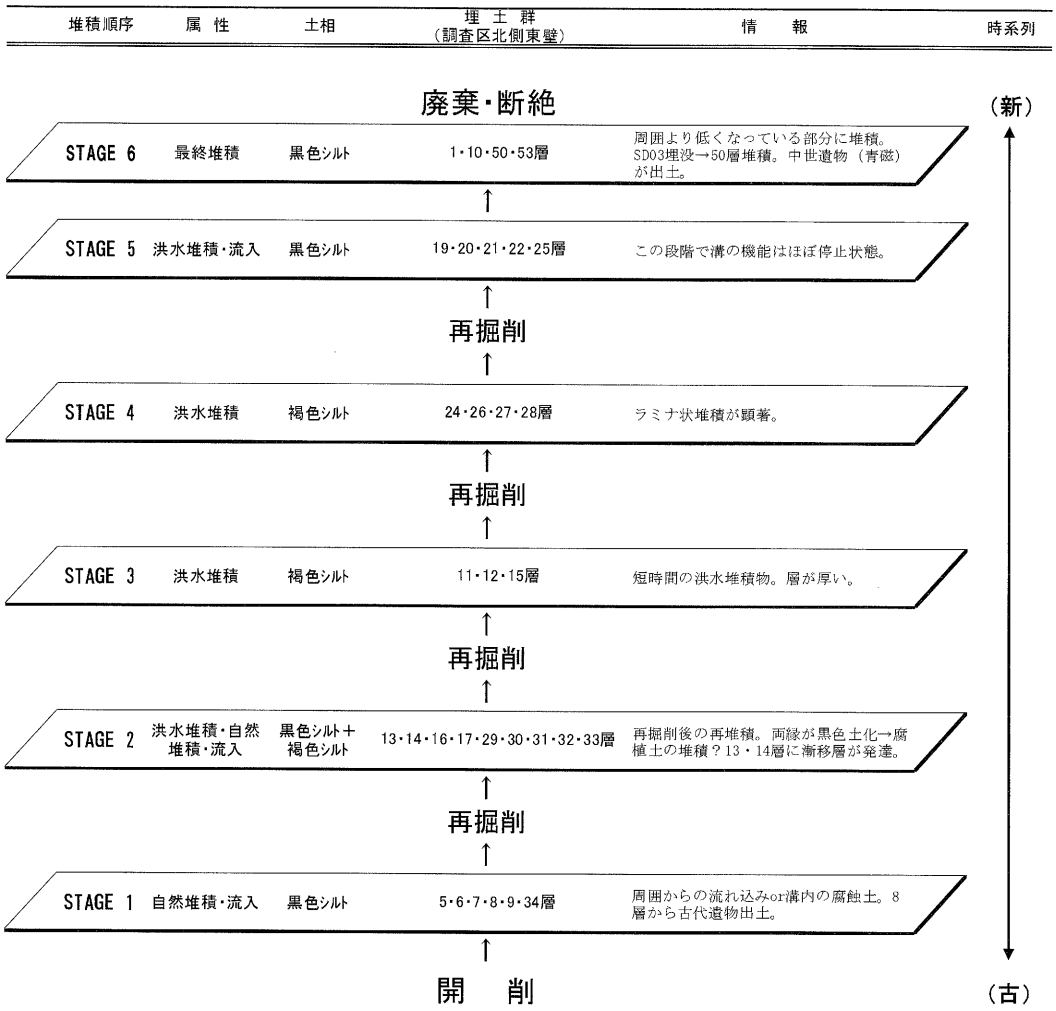


Fig. 46　SD09埋没過程の復元モデル

地形の制約　SD09が存在する地形は、埋没微地形を復元したところ、遺跡内でも比較的地山レベルの高い微高地状の地形を呈していることがわかっている[1]。調査区東側では緩やかに傾斜し低くなっており、遺構・遺物とも希薄になるため遺跡の東端と認定している。SD09はその低くなる地形に向かってはいるが、本体は地山等高線が高い位置にある。たしかにSD09の推定ラインに沿って、等高線が谷状地形を呈するが、これはSD09の地山掘り込み面に影響（反映）を受けているものである。実際に現地調査時には、SD09が走行する範囲にⅦ層である地山砂礫層が存在し、Ⅴ層下にはⅥ層が見られない。第３章第２節で触れたようにⅦ層により形成された微起伏の凹部に越流・溢流によってⅥ層が堆積したとの考え方を援用すると、SD09は地形的に高位な場所に位置していると判断可能である。このような地形に自然発生的に河道が形成されることは考え難く、敢えてこの場所に溝を掘削したと理解したい。地形的制約があるにもかかわらず、溝を設定したと考えるならば、大変な規模の土木工事を行ったということができ、相当の労働力を投入する必要がある。SD09の性格を考える上で、旧地形（埋没微地形）との関係性を把握することは、非常に重要な手がかりとなる。

1　野原大輔　2004「第２節過去に行われた調査」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会

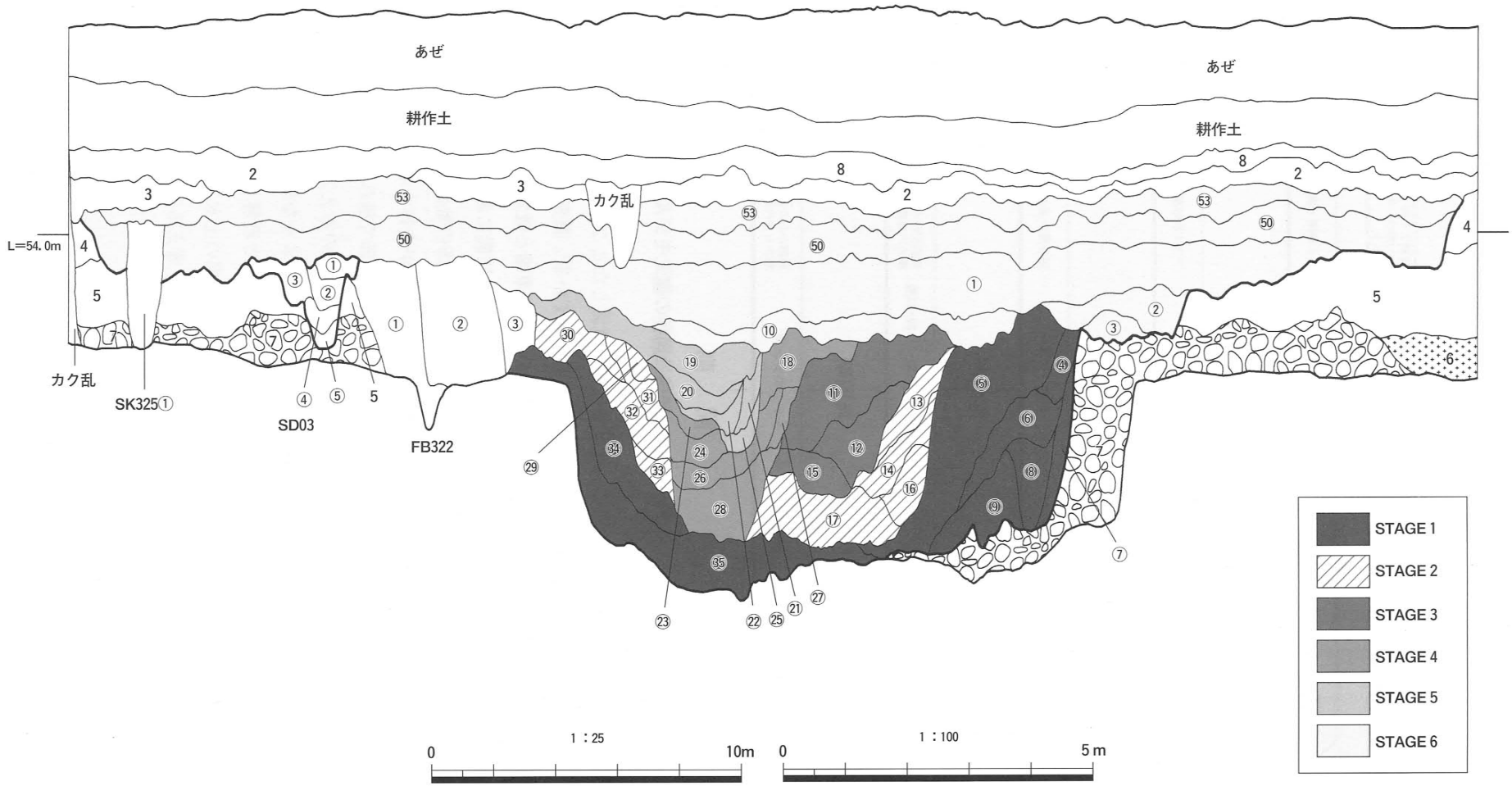


Fig. 47　SD09埋没過程復元模式図（垂直方向：Scale＝1／25　　水平方向：Scale＝1／100）

復元規模　Ⅴ層上面の検出面では、幅7.84m・長さ16.96m・深さ1.0mを測る。実際に壁断面ではⅣ層上面からの掘り込みが認められたため、断面からの復元値では、幅12.5m・長さ16.96m・深さ1.75mとなる。断面計測値は、最終堆積層である53層上面で計測したものである。最終堆積面に近づくにつれ溝幅が緩やかに広くなっていくのは、旧状（開削時）の掘り込み形状を留めているのではなく、自然な浸食作用もしくは水流によって溝の肩部が削られたものと考えられるため、開削時の溝幅を示すものではなく、検出面での規模が開削時に近い様相を呈する可能性が高い。溝の規模はSTAGE１～STAGE６に進むにつれて縮小化の傾向が看取される。扇状地という地形上、洪水は不可避であり、集落を形成する微高地は比較的安定していたであろうが、溝のような凹部には進んで洪水層が流入し被覆したことが容易に推定できる。規模の縮小化は、再堆積によりその都度掘削するための労働力の確保と溝の役割が次第に低下したことと不可分の関係にあると思われる。非常に恣意的だが、溝の堆積状況からは以上のことを読み取ることができる。

機能年代　試掘調査では、SD09埋土の黒色土から縄文土器の破片が検出されたため、縄文期の河道であると認定していたが、今回の調査では縄文期の遺物はほとんど出土していない。遺物を包含していた黒土は、遺物包含層であるⅤ層が流れ込んだものと考えられ、遺物も溝の機能年代との同時性を持つという確証はない。他の出土遺物の年代は８世紀代から14世紀代と幅広い。ただし、溝の使用年代特定の一助とすべく、埋土のC14年代測定を行ったが、必ずしも芳しい結果を得られたとは言い難い。

年代の誤差　出土遺物と埋土のC14年代測定値には、大きな乖離がある。いずれの年代も信頼性をどこに置くかで議論の余地はあるが、双方の年代に差があることは否めない。

遺物は極少量に限られ、層位的に取り上げることができなかったため、遺物と埋土の年代的関係性を導き出すことができない。出土遺物の年代は、８世紀後半～９世紀前半と12世紀後半～14世紀前半の大きく２時期ある。12世紀後半～13世紀初頭の同安窯産の青磁は、最終堆積層（STAGE６）から出土している。

本遺構が溝である場合、その性質からいずれの遺物も周辺からの流れ込み・混入品の可能性を孕んでいるため、遺物の年代幅を遺構の使用年代に当てはめることはできない。SD03からは８世紀から13世紀前半の遺物を検出している。ほとんどの遺物が河床付近にあったことから、遺構年代と大きな隔たりがあるとは思えない。SD09と同じ方向性を持つことからも並存関係にある可能性をもつ。

遺構	番号	種　類	器　種	年　代
SD09	13	須恵器	杯蓋	９世紀前半
	14	須恵器	有台坏	８世紀後半
	15	須恵器	有台杯	８世紀後半
	16	土師器	碗	
	17	中世土師器	皿	13世紀前半
	18	土師器	皿	14世紀前半
	19	珠洲焼	鉢	13世紀前半
	20	須恵器	壷	
	21	青磁	有台椀	12世紀後半～13世紀初頭
SD03	1	須恵器	杯蓋	８世紀
	2	須恵器	甕	
	3	須恵器	ハソウ	８世紀
	4	須恵器	壷	
	5	須恵器	甕	８世紀後半
	6	土師器	碗(皿)	古代後期or12世紀後半
	7	土師器	皿(碗)	古代後期or12世紀後半
	8	土師器	皿	13世紀前半
	9	中世土師器	皿	13世紀前半
	10	土師器	甕(鍋)	
	11	珠洲焼	すり鉢	13世紀前半
	12	瓦質土器	甕	13世紀前半

Tab. 22　SD09・SD03出土遺物一覧

Tab. 23　C14測定年代結果

番号	場所等	遺構名	層位	性状	年代値 補正年代 BP	年代値 測定年代 BP	δ13C (‰)
19	東壁	SD09	7層	土壌	(2,290±100)	2,290±100	(−25.0)
24	東壁	SD09	34層	土壌	(2,030±150)	2,030±150	(−25.0)
29	西壁	SD09	32−1層下	土壌	(1,680±170)	1,680±170	(−25.0)
31	西壁	SD09	20層	土壌	(2,240±130)	2,240±130	(−25.0)
32	西壁	SD09	5層下	土壌	(1,410±100)	1,410±100	(−25.0)
35	西壁	SD09	48層	土壌	(2,800±110)	2,800±110	(−25.0)
28	西壁	SD03	1層	土壌	(2,600±300)	2,600±300	(−25.0)

1）年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。
2）BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

C14年代値　SD09と SD03の C14年代測定結果を Tab. 25に示した。調査区東壁では、ともに STAGE 1 に分類した7層と34層の試料について測定したが、弥生時代前期～中期頃の年代を示す。西壁では、32－1層、20層、5層、48層の測定を行い、BP1,410±100～2,800±110の年代値を得た。注目すべきは、STAGE 5 に相当する20層が STAGE 1 の5層の年代値より古いという逆転現象が見られることである。全体として遺物年代よりも相当古い数値示すが、採取した試料はいずれも黒色土であり、周辺にあるⅤ層を含む黒色土の流れ込みの可能性は否定できない。加えて層位的にみて間違いなく切り合い関係の把握できる堆積順序において年代値の逆転現象が見られることから、各埋土を土壌的にみれば生成された正確な年代値かもしれないが堆積年代として扱うには不適当であると思われる。

また、年代値のばらつきは、埋積過程や生物擾乱による後代の汚染および古い炭素の混入などの影響があることも一因として考えられる。

上限と下限　溝の機能時と同時性を推定可能な遺物の出土状況がなかったことと、遺物を堆積土ごとに層位的に取り上げられなかったことから、わずかな希望を託して C14年代測定を行ったが、結果として各埋土の堆積年代を把握するに至らなかった。遺物・埋土の年代から正確な溝の機能時期を推定することができないことが明らかとなったが、考えうる限りの遺構の年代観を提示しておく必要がある。Ⅴ層を掘り込み、Ⅴ層上面より上位から掘り込まれていることから、遺構年代の下限はⅤ層の年代、つまり縄文時代中期～後期より新しい年代といえる。

また、上限はⅡ層・Ⅳ層の年代を鍵として導き出すべきである。層位自体の年代観は不確定であり判然としないものの、Ⅴ層上面において掘立柱建物などを検出していることから、上限年代は少なくとも古代～中世に位置付けられると考えたい。STAGE 6 の最終堆積層中に12世紀後半～13世紀初頭の遺物が出土していることから、混入の可能性を考慮しても少なくとも最終堆積はその遺物年代より新しいということができる。

開削年代・廃棄年代を確定し、溝の使用継続期間を明らかにすることが、溝の性格を判断する重要な要素と成り得るのであるが、今回の調査では明らかにすることができなかったた。年代の上限と下限を押さえることができたため、次年度調査時にさらに詳細な年代決定の手がかりを求めて精査したい。

SD03　SD09を溝とした根拠のひとつに、SD03との関係が挙げられる。SD03は調査区北側に位置し、北東～南西方向に延びており、最大幅110cm、深さ15cmを測り、検出面からは比較的浅い溝である。最深部は７層土を若干掘り込んでおり、礫を多含する。断面形態から南西～北東にかけて傾斜しており、北東方向への流水が考えられる。底面からは須恵器、土師器皿、珠洲焼などが出土している。注目すべきはSD09との位置関係である。SD03は、SD09にほぼ平行して存在しており、流路方向も同じである。加えて出土遺物の年代も近似することから、SD09に並存して計画的に設定されたことや同時代性が考慮されるところである。SD09の性格を読み解く重要な要素のひとつと成り得る。

流路方向　完掘後の底面標高は、西側52.53m－中央52.48m－東側52.34mを測ることから、南西→北東方向に流れていたことがわかる。ちなみにインブリケーションによる観察を試みたが、河床の礫の多くがⅦ層に包含されるものであり、溝そのものの方向性を推定することはできなかった。

溝	方向性	調査年
SD09	N－42°－E ～N－45°－E	H16
SD03	N－45°－E	H16
SD169	N－50°－E	H16
SD170	N－52°－E	H16
SD212	N－24°－E	H16
SD90	N－13°－E	H15
SD165	N－19°－E	H15

Tab. 24　溝の方向性一覧

また、同じく調査区内で南西→北東方向に流路をとる溝が多く検出されている。検出された溝の大半は同じ方向性をもつ。他の溝との方向性を比較すると、Tab. 26のとおりである。SD09は主軸をN－42°－E～N－45°－Eにとる。SD03とほぼ同じ角度であり、両溝の関係性を考慮する上で重要である。SD170（Fig. 13）・SD212（Fig. 13）とほぼ同一方向であることがわかる。

流路方向を設定する要因として、溝造成の計画意図と地形的な制約が考えられる。周辺の地形状況を把握するために基盤整備前の従前図に等高線を合成した図を作成した（Fig. 48）。現在は基盤整備も完了し、水田区画はほぼ磁北に沿って配置されているが、従前図を見ると「中筋往来」以東の光圓寺付近から水田形状が南西→北東方向となっている。検出された溝の大半が同じ方向性をもつことは、従前図で見るとおり地形状況を反映したものであると言える。

東大寺領荘園　ただし、溝造成の計画意図と地形的状況が一致したことも考慮しておかねばならない。SD09がほぼ直線的に流れていたとすると、その下流の延長線上に伊加留伎村の推定地がある。この推定地は、金田章裕氏の説[1]によるものであり、東大寺正倉院に現存する神護景雲元年(767)越中国砺波郡伊加留伎村墾田地図をはじめとする伊加流伎荘、井山荘、石粟荘の各荘園図の位置関係から比定したものである。SD09からは８世紀代の遺物も少量ではあるが出土しており、この溝が砺波平野東部に展開した東大寺領荘園と何らかの関係があれば興味深い資料となる。

小　結　本節では溝としての認定根拠を中心として述べてきたが、本来は溝としての機能や性格、造成の社会背景にまで言及すべきところである。調査の不手際により遺構の機能年代を明らかにできなかったことから、過言を控えることにした。このSD09には不明な点が幾つも残っており、たとえば掘削時の排出土砂の堆積がみられない。規模から推定すると、排出土砂を利用して土手に築堤することも考えられるが、その痕跡もない。そのような疑問点は、幸い次年度調査区にSD09の南方向の延長が含まれるので、その調査成果を得て再論したい。　（野原）

1　金田章裕・田島公　1996「６越中ａ越中国砺波郡東大寺領荘園図」『日本古代荘園図』東京大学出版会